小説ドラゴンクエストII

悪霊の神々 下

高屋敷英夫

小説ドラゴンクエストII
悪霊の神々
下
高屋敷英夫

ENIX

DRAGON
QUEST

エニックス

ISBN4-900527-18-1 C0093 P1000E 定価1000円(本体971円・税額29円)

小説 ドラゴンクエストII

悪霊の神々 下

高屋敷英夫

小説　ドラゴンクエストII　悪霊の神々［下］

ロトの末裔たちによる愛と勇気のファンタジー物語

イラスト／いのまたむつみ

上巻のあらすじ

勇者ロトの血をひくアレフによって竜王が倒されたのち、彼とその子孫によって築かれたローレシア、サマルトリアの二国は、近隣の強国ムーンブルクと同盟を結んだ。その三国の協力は、アレフガルドの歴史上かつてなかった安定期をもたらしたのであった。

そして百数十年の月日が流れた――

ローレシア暦二一七年の夏。長かった平和と繁栄の時代は終わりを告げた。

ロンダルキア台地に本拠を構える邪教の徒、大神官ハーゴンの侵略が始まったのだ。

長い歴史を誇るムーンブルクは一夜にして壊滅し、惨劇の報に人々は恐れおののいた。

アレフの子孫である二人の王子、ローレシアのアレンとサマルトリアのコナンは、ハーゴンを倒すべく故郷を離れた。二人は廃虚と化したムーンブルク城で、非業の死を遂げた王の亡霊と出会い、幼なじみの王女、セリアの消息を知った。魔物の目を逃れるため小犬に変えられていたセ

リアは、ラーの鏡の力によって真の姿を取り戻したのであった。

三人となった一行は、風の塔で魔女から風のマントを授かり、港町ルプガナへと渡った。

魔物に襲われていた少女、レシルを助けたアレンたちは、彼女の祖父ハレノフ八世から快速船ラーミア号を譲り受けた。ラーミア号により海を越え、ラダトームへ立ち寄った三人は、漁師たちから恐れられているというぶきみな竜王の島へとむかった。

数百年前、アレフと竜王の死闘が繰り広げられた場所で彼らが出会ったのは、天上界の神々に幽閉された竜王の子孫であった。

ハーゴンの城へ行くためには水の羽衣と月のかけら、そして邪神の像が必要だと教えられたアレンたちは、さらなる手がかりを求めて大灯台へと針路を取った。

だが、海上高くそびえる大灯台で三人を待ち受けていたのは、謎の男ガルドだった。

大神官ハーゴンの片腕の悪魔神官に雇われているこの男には、アレンの剣術もコナンとセリアの呪文も通用しなかった。

アレンとコナンの必死の抵抗をあざ笑い、セリアをさらったガルドの姿は一瞬にして宙に消えた。怒りと悔しさに震えるアレンたちのかたわらを、凍てついた烈風が吹き抜けた。

第六章　果てなき航海

季節はすでに夏を迎えていた——。
真冬の大灯台で王女セリアを奪われたアレンとコナンは、ロンダルキア大陸からはるか離れたデルコンダル島を目指して、航海をつづけていた。
邪神の像は、ロンダルキア大陸のはるかかなたの東海にある。その同じ東海にあるデルコンダル島へ行けば、邪神の像のありかの手がかりがつかめるかも知れないと考えたからだ。
ラーミア号は、広大なロンダルキア大陸の南側をぐるりと回る南航路をとった。
大灯台からデルコンダルまで、いくつかの航路があったが、距離的には遠くても、その方が季節風に乗れるとガナルがいったからだ。
途中、南海一の都市ベラヌールの町で、水と食糧を補給し、邪神の像の情報も聞いてみた。だが、なんの手がかりもなかった。
また、ベラヌールでアレンは十七歳の誕生日を迎えていた。
そのベラヌールの港を出航してから八〇日目の昼過ぎ、水平線のかなたにやっと青々としたデ

ルコンダル島が見えてきた。
　セリアを奪われてから、すでに一五〇日になろうとしていた。

1　デルコンダル

　岬を回ってデルコンダル湾に入ると、正面に人口八〇〇〇人のデルコンダルの町が見えてきた。港の後方には赤い屋根の町並みがつづき、そのさらにむこうの小高い丘の上に、要塞のようなカンダタ家の居城デルコンダル城がそびえていた。
　カンダタは勇者ロトと同じ異世界からやって来た大盗賊だ。
　彼はこの世界に来てからは足を洗って、魔界の軍勢と戦ったと伝えられていた。
　そして勇者ロトが大魔王を倒したあと、戦乱の中で孤児となった子供たちを連れてデルコンダルに渡ったのだ。やがて彼の豪快な気性を慕って、戦士や武闘家たちがぞくぞくと集まり、未開の孤島だったデルコンダルに、カンダタが都市国家を誕生させたのだ。
　だが、集まって来たのは堅気の人間ばかりではなかった。各地でおたずね者となっていた盗賊や海賊たちも、カンダタの庇護を求めてこの国へと渡って来たのだ。
　そのためか、「今でもカンダタ家は海賊とつながっているという噂が絶えない」とガナルが教えてくれた。

ベラヌールで船乗りたちに邪神の像の情報を聞いたときも、船乗りたちが口を揃えて、「デルコンダルの国王に聞いた方がいい。海の情報ならおれたちより詳しいはずだから」とガナルと同じことをいったのは、その噂を信じているからなのだろう。
もちろん、デルコンダルは、ローレシア、サマルトリア、ムーンブルクの三国とは国交がなかった。
港には数隻の異国の船が停泊していた。
ラーミア号を桟橋につけると、アレンとコナンはガナルを残して、さっそくデルコンダル城へむかった。
港から路地を抜けて町の中央にある大聖堂の広場へ行くと、大通りの正面にデルコンダル城の強固な二層の城門が見えた。その手前に、五層建ての巨大な円形の闘技場があった。
夏の太陽がじりじり照りつけるせいか、町は閑散として人通りが少なかった。
城門に行って警備の兵士に名前と用件を告げると、二人はすぐ宮殿の王の謁見の間に通された。
「すげえ品がねえの――」
国王カンダタ十八世を待つ間、謁見の間を見回しながらコナンが呟いた。
壁や柱や、玉座まで、派手に金箔が張られていた。
ほどなくカンダタ十八世が重臣を連れて現れた。ずかずかと大股で入って来たカンダタ十八世

は、どかっと玉座に座って行儀悪く足を組むと、

「おまえさんたちか、ロトの血をひくってえのは」

三〇歳過ぎの油ぎった顔で、じっと二人を見た。

目はぎょろりと大きく、立派な口髭をたくわえている。

首から金や銀の宝石を散りばめた派手な首飾りを何本もさげ、腕にも同様の腕輪をし、両手の指には色とりどりのごてごてした大きな宝石の指輪をいくつもはめていた。

一目で趣味の悪い、粗野な男であることがわかった。

一国の国王というより、見るからに盗賊とか海賊の首領といった感じの男だ。

二人は丁重に名を名乗って挨拶をした。そして、アレンが用件をいおうとすると、

「待ていっ！」

カンダタ十八世は、アレンの言葉を遮った。

「ロトの血をひくものだって証拠はあるのかっ？　ローレシアの王子だって証拠があるのかっ？　サマルトリアの王子だって――」

「信じないのかよっ！」

思わずコナンがむっとして叫んだ。

「コナン――」

アレンは、コナンを制して、

「このロトの鎧とロトのしるしを見てください。それに、この楯も、この兜も――」
手に持っていた兜をカンダタ十八世の前に突き出した。
カンダタ十八世は、じっとアレンの身につけているものを見ると、
「それがロトの残したものだっていうのかっ？　ふっははは。とても本物には見えんがなっ。そんな安物ならそのへんの道具屋でいくらでも売っているわ。はっははははは」
「なんてこというんだっ！　よく見てみろよ！」
コナンが、カッとなって怒鳴った。
「大体わしはなっ、ロトがだーい嫌いなんだっ！」
「えっ？」
アレンとコナンは、あ然とした。勇者ロトが嫌いだという人物に会ったことがなかったからだ。
「わが先祖カンダタさまは偉大なる大盗賊。弱きを助け強きをくじく義賊だったのだ。だが、ただひとつ汚点を残した。それはっ！」
カンダタ十八世は、いきなり立ちあがった。
「ロトに一度負けたことだっ！　御先祖さまもさぞ無念だったろう！」
「なにいってんだい！　カンダタは勇者ロトに捕まって改心したんだろ？　ロトに協力して魔王と戦ったそうじゃないか。そしてこの国を造ったんだろ！」
コナンも負けじと叫んだ。

「わしが許せんのは先祖がロトに負けたってことだ。たとえ一度でもロトに捕まったってのが気にいらんのだ！」
カンダタ十八世は、唾を飛ばして怒鳴ると、鋭い目でコナンをにらみつけた。
「御先祖はただの泥棒なんかじゃねえ！　偉大な大義賊だったんだからな」
「どっちだって同じじゃないかっ！」
「うるさいっ！　ああいえばこういう！　可愛気のないやっちゃ！　だがなっ――」
カンダタ十八世は、肩で大きく息をつくと、じっと鋭い目で二人を見て、
「わしは強ーいやつが好きだっ！　とてつもなく強ーいやつがなっ！　この国は昔から武勇を尊ぶ国だっ！　武勇にすぐれた者が英雄なのだっ！　どうだっ、わしの飼っておるキラータイガーを見事斬り倒してみんかっ？　そしたら、ロトの血をひくもんであろうがなんだろうが、歓迎してやるっ！」
「えっ？」
アレンとコナンは、顔を見合わせた。
「もっとも、真にロトの血をひく者なら、倒せるはずだがなっ――。それとも、ロトの子孫は腰抜けだと物笑いになるか――」
そういってカンダタ十八世は、けしかけた。
「だが、もし倒したら、なんだって聞いてやる！　望み通りになっ！」

「アレン――」
コナンは不安そうに見た。
「仕様がないな――」
アレンは、なかば呆れていたが、
「ほんとうになんでも聞いてくれるんだなっ！」
というと、キッとカンダタ十八世をにらんだ。
「あた棒よっ！　大盗賊の子孫にうそはないっ！」
「よし、受けてやるぜっ！」
とたんにカンダタ十八世は目を輝かせて、上機嫌になった。
「それでこそ、男よっ！　ロトの子孫よ！　がっははははっ、こりゃ楽しみだっ！　さっそく町の者どもに知らせいっ！　毎日暑い日がつづいて、家んなかでうんざりしておるだろうからなっ！」
「ははっ！　喜んで――」
後ろに控えていた重臣が、嬉々として飛んでいった。

その日の夕方――。
城門の前にある五層建ての円形の闘技場を埋めた二〇〇〇〇人の観客は、アレンが登場すると、

闘技場が壊れるのではないかと思うほどの熱狂的な歓声をあげた。
賭けているだけに、一層燃えているのだ。
噂を聞いてガナルもラーミア号からすっ飛んできていた。
「心配するな。大丈夫だ――」
客席の最前列で心配しているコナンとガナルにそういって笑うと、アレンは中央にむかった。
いよいよ時間なのだ。兵士が檻の鉄格子の扉を開け、キラータイガーがゆっくりと観客の前に姿を現すと、歓声はさらに大きくなった。
重臣たちを従えて正面の特別席についていたカンダタ十八世も、身を乗り出して目を輝かせた。
アレンは、鋭い目でキラータイガーをにらみつけ、おもむろに剣を抜いた。
研ぎ澄まされた鋭い牙。獲物に飢えた獰猛な目。盛りあがった四肢の筋肉。
キラータイガーは、威嚇するように唸り声をあげた。
アレンは剣を上段に構えると相手の出方を見守った。
ウオオオオッー！　咆哮をあげキラータイガーが跳躍した。
満員の観客は一瞬息をのんだ。アレンがまったく動こうとしなかったからだ。
つぎの瞬間、おびただしい量の鮮血が闘技場の床に飛び散った。
血塗れの魔物が空中で一回転すると、ゆっくりと落下した。
小さな金属音が響き観客たちは我にかえった。アレンが剣を鞘に納めた音だった。

そして、そのアレンの背後でキラータイガーは二、三度痙攣(けいれん)すると動かなくなった。
キラータイガーが襲(おそ)いかかった瞬間、アレンは剣を上段に構えたまま、身を屈(かが)めたのだ。魔物の牙が、ほんの一瞬前までアレンの頭があった空間に達したとき、そこには鋭い剣の切っ先が待ち構えていた。魔物のいきおいを利用してアレンは喉から腹まで一気に剣を振(ふ)りおろしたのだ。
真冬の大灯台でガルドにあっけなく剣をかわされたアレンは、あのあとさらに習練を積んでいた。時間さえあれば、一日に何時間でも剣を振り回した。必ずガルドと対決するときがくるからだ。そして、確実にアレンの腕は上達していた。
あ然としていた総立ちの大観客から、大きなどよめきが起こると、やがてそれがものすごい大歓声と拍手(はくしゅ)と口笛(くちぶえ)に変わったのだ。
ぎょろ目をさらに大きく開いてあ然としていたカンダタ十八世は、やっと我にかえると、
「がっははは――がっはははっ――がっはははっ！」
顔を引きつらせて笑った。
あまりのすごさに感動して、思わず失禁してしまったのだ。

2　カンダタ十八世

「いやあ、さすがは勇者ロトの子孫！　お知り合いになれてこんなに嬉(うれ)しいことはありません

っ！　今夜はもう最高ーっ！」
アレンの腕前を見たカンダタ十八世の態度は、がらりと変わった。
カンダタ十八世は、アレンとコナンとガナルの先頭に立って闘技場から宮殿まで案内すると、豪華な料理を運ばせたのだ。
広間の食卓には、果実酒や地酒、海の幸のゼリー、蛤とキノコの冷たいスープ、鯛の衣揚げ、地鶏の林檎酒風味の丸焼き、特製ヌードル、子豚のロースト、季節の野菜と羊肉の炒めもの――食べきれないほどの料理が並んだ。
「しかも、たったひと振りであのキラータイガーを仕留めるんですからなあ！　今まであなたの他にたったひとりだけですよ！　こいつもすごかった！　呪文もすごいが腕も立つ！　一年ほどここでぶらぶらしておったんですが、いつの間にか風のようにいなくなりおった――。いやあ、それにしてもおみそれいたしましたっ！　なんですなあ、その――」
「実は、カンダタ十八世――」
アレンは、慌ててカンダタ十八世の言葉を遮った。
このままではひとりでずっと話しつづけかねないからだ。
「聞きたいことがあって、わざわざデルコンダルまで来たんです」
「おおっ！　結構結構！　なんでも聞いてください。約束ですからな」
「泥棒の子孫はうそはつかない」

すかさずコナンがからかった。
「泥棒じゃないっ！　大盗賊といえっていったろうがっ！」
カンダタ十八世は、思わず顔色を変えてコナンに怒鳴ったが、アレンを見るや、
「さあさあさあ。なんでも聞いてくださいっ！」
と、満面に笑みを浮かべた。
アレンは、大神官ハーゴンを倒すために旅をつづけていること、邪神の像のありかを捜していること、セリアがハーゴン配下の者に奪い去られたことなどをかいつまんで話した。すると、瓶をわしづかみにし、地酒を飲みながら聞いていたカンダタ十八世が、
「そいつは――その王女をさらったやつは、どんなやつでした？」
なにか思い当たったらしくそうたずねた。
「背が高くてがっちりしていて――。長い髪を後ろでひとつに結わえて――」
アレンがそこまでいうと、
「ガルドだっ！」
思わずカンダタ十八世が叫んだ。
「ガルド？」
「背中に長剣をさげたやつですねっ？」
「そうです。知ってるんですか？」

「さっき話したやつですよ！」
「そうですか。ガルドっていうんですか――」
アレンは、セリアの顔を思い浮かべ、悔しそうに唇を噛んだ。
「しかし――、信じられんなあ――。やつが、ハーゴンと手を組むとは――。天涯孤独の一匹狼なんですがねえ――」
カンダタ十八世は、大きく溜息をつくと、
「ま、それはそれとして――。その邪神の像ってやつですが、残念だが、さすがのわしも聞いたことがありませんなあ。ま、世界を股にかけている貿易商のハレノフ八世のところの人を前にしてなんだが、こう見えても海の情報にかけてはわしの右に出る者はおらんと自負しておるんですがねえ」
「じゃあ、テパの村と満月の塔へ行ってみるしかないか――」
気落ちしてコナンが溜息をついた。
邪神の像を手に入れるには、セリアの他に、水の羽衣と月のかけらが必要だ。だから、その二つを調べれば、ハーゴンが邪神の像を手に入れたかどうかがはっきりするのだ。
「テパ？」
カンダタ十八世は、すかさず聞いた。
「テパって、あのロンダルキア大陸の西の山奥にある村のことですかい？」

「知ってますか？」
今度は、アレンが聞き返した。
「いや、テパっていえば、昔から得体の知れない連中が住んでるってもっぱらの噂でしてね。ろくに道もないらしくて、だれも行きませんよ、あんな山奥には。待てよ、テパのことでなんか聞いたことがあるなあ——。水門の鍵がどうのこうのって話ですがねえ」
「水門の鍵？」
「おいっ。じいさんを呼んで来いっ！」
カンダタ十八世は、隅に控えていた部下にそう命じた。
ほどなく、九〇歳過ぎの小柄な老人が現れた。異様なほど鋭い眼光をしていた。
「もと海賊でしてねえ。裏の世界に通じておる男ですよ。なあ、じいさん。以前、じいさんからテパの村の水門の話を聞いたことがあったよなあ。ケチなコソ泥の話をさあ。その話をもう一度聞かせてくんねえかっ？」
「はい——」
老人は、しわがれた声で答えた。
「どうってえ話じゃありませんが——かれこれ四〇年も前の話ですだ——。ある港で、ラゴスってえコソ泥が海賊の仲間にして欲しいって来たんでさあ——。そいつは、テパの村の水門の鍵を盗んだって、やたらあっしたちに自慢しましてねえ——。この鍵はテパの村の命だ。これがなけ

りゃ、永遠にだれも満月の塔に近づけねえ——そういって、まあ、売りこんで来たんでさあ——」
「満月の塔に近づけないって、どういうことですか？」
アレンが聞いた。
「よくわかりませんですだ——。あまりテパの村には関心がなかったもんですからねえ——。なにせ、山奥の隔離されたところですから——。ところが、そのラゴスって野郎は、とんでもねえやつでして、仲間に入れてやったその晩、あっしたちのあり金をごっそり盗んで逃げちまいましてねえ——。まんまとやられましただ——」
「はっははは！」
カンダタ十八世は、愉快そうに笑った。
「天下の海賊がコソ泥にやられるとはのぉ。はっははは」
「それが——」
老人は、言葉をつづけた。
「一〇年ほど前でしたか、そいつがペルポイの町に潜んでるって噂が流れてきましてねえ——」
「ペルポイ？」
「ロンダルキア大陸の南の半島にある町ですだ——」
「昔、海賊の襲撃を恐れて、地下に町を造ったところなんですよ」
カンダタ十八世が笑いながら、また口をはさみ、

「海賊から逃げるにはあそこが一番いい。あそこの連中は、海賊には怨みを持ってるからな。それで追うのを諦めたんだろっ？」

と、老人をからかった。

「いえ――あっしの仲間たちもほとんどあの世にいっちまったんで、それっきりになっただけですだ――。たしか、そんときに国王にこの話をしましただ――。お茶の菓子がわりに――。ま、いずれにせよ、昔の思い出話ですだ――」

そういって、老人は微笑んだ。

「そのラゴスって泥棒、どんな男でした？」

それまで鋭い目で老人の話を聞いていたガナルがいきなりたずねた。

アレンたちが他人と話しているときは、ガナルは自分の立場をわきまえて、必ず黙って聞いていた。このように、自分から口を開くことは珍しいことだった。

「生きてりゃあ六〇ぐらいになりますかなあ――。やたら調子のいいやつで――あっ、そうそう、この二の腕に大きな髑髏の入れ墨をしてましただ――」

「髑髏の入れ墨――？」

「ねえ、ガナル。なんか心あたりあるの？」

コナンが聞いた。

「いや――。なんでもねえ――」

ガナルは、黙って目を伏せた。
「こりゃあテパに行く前にペルポイに寄らなきゃなりませんな。もっとも、そのコソ泥がいるとは限りませんが――。ま、いたとしても、鍵を持ってる保証はないが――」
そういって、カンダタ十八世は溜息をついた。そして、
「わざわざ、悪かったな。じいさん――」
地酒を一本持たせて老人を帰すと、
「おおっ、そうだそうだ。テパとは関係ないが、あなたたちにいいものを進ぜよう」
といって、隣の部屋に行って来て、
「これですよ、これ――」
アレンに一枚の湾曲した石の破片を差し出した。
球形のものを割ったその一部らしい。蛤の殻ほどの大きさで、厚さが人さし指の太さほどある。見た目よりかなり重い石で、表面には三日月の絵と楔形文字が彫ってあり、鮮やかな美しい色が塗りこんである。
「月の紋章ですよ」
「月の紋章？」
「精霊ルビスが残した五つの紋章のひとつじゃないかといわれておるんですわ。なんでも御先祖が勇者ロトにゆかりのある人から預かったとかで昔からわが家に伝わっておるんです。五つの紋

章を集めてルビスさまの神殿に行けば、ルビスの守りを授けてもらえるとか――」
「ルビスの守り？」
「邪神のまやかしを打ち破ることのできるお守りのことだそうですよ。きっと、ハーゴンの神殿に行ったら役に立つはずです」
「他の四つは？」
　コナンが聞いた。
「さあ――」
　カンダタ十八世は、首をかしげた。
「ただ、五つ合わせるとちゃんとしたひとつの形になるんだろうなあ」
「もうひとつ聞きたいことがあるんだけど――」
　アレンがいった。
「はいはいっ」
　カンダタ十八世は、また満面に笑みを浮かべた。
「盲目の魔女の噂を聞いたことがありませんか？」
「盲目の魔女？」
「かつて竜王に仕えていたという三姉妹の魔女のひとりなんですが――」
「おおっおおっおっ。聞いたことがあるぞ。待てよ――」

カンダタ十八世は、額に手を当てて記憶をたどった。
「——竜王とのことはよく知らんが、たしかザハンに盲目の魔女がいるって死んだじいさんに聞いたことがあるなあ——。だいぶ昔のことらしいが——」
「ザハン？」
「アレンさま」
横からガナルが口をはさんだ。
「このデルコンダルからずっと南にある小島のことでさあ。あそこは、香辛料の産地でして、毎年ハレノフ八世さまが立ち寄るとこなんですよ——」
「そうか——。じゃあ、まずザハンに行ってみよう。それからペルポイだ」
「ささっ、遠慮なくやってくだされ！　さささささっ！　しかし、わが祖先カンダタさまも、たった一度捕まったのが勇者ロトだったたんですからな、考えてみりゃこりゃ大変光栄なことですなあ。がっははは。なんですなその、もしあなたたちが大神官ハーゴンを倒したら、当然『ロトの伝説』が残ったように『ロトの末裔たちの伝説』ってのも残るわけですな。そして、このわしもそのなかの一節に登場するわけですな。勇ましくも心やさしきデルコンダル国王カンダタ十八世は、訪れた勇者ロトの末裔たちを温かく迎えるのであった——なんてねっ！　がっははは、これでわしも世界の歴史に名が残せるってもんだ！　さあさあ、今夜はばんばんやりましょう！　がっははは！」

カンダタ十八世は、上機嫌で地酒をあおった。

3　孤島

洞窟の窓の外には、見渡すかぎりの海が広がっている。
その海を、青白い月の光がキラキラ照らしていた。
ロンダルキア大陸のはるかかなたの東海にある、蠟燭のように斬り立った孤島。
その孤島の洞窟の一室に、セリアが閉じこめられていた。
だが、洞窟のなかとはいえ、ちゃんとした柔らかなベッドが用意されていたし、日に三度きちんと食事も与えられていた。
食事を運んで来るのは、喉がつぶれ言葉が話せない老人だった。
真冬の大灯台で、セリアは喉元に刃先を突きつけられて、若者——ガルドと一緒に白光の渦に巻きこまれて、アレンとコナンの前から姿を消した。
だが、一瞬ののち、セリアとガルドは暗い船底に姿を現したのだ。
ガルドの魔法によって、瞬時にして亜空間を跳んだのだ。
どんな船かはわからなかった。どこに停泊している船かもわからなかった。だが、かなり大きな船であることだけはたしかだった。

セリアは、すかさずバギの呪文をかけて抵抗した。
だが、すさまじい真空の渦は、ガルドの前であっけなくすーっと消えてしまったのだ。
ガルドは、ふっと鼻先で冷たく笑うと、呪文の杖と護身用の短剣を取りあげて船底から出て行った。
やがて船底が揺れ、波をかき分ける音が聞こえてきて、セリアは初めて船が動き出したのを知った。
船底には、食糧から衣料、骨董品や美術品、さまざまなものが乱雑に積まれていた。
やがて、セリアはこの船が海賊船であることを知った。
食事は日に三度、海賊の手下が運んで来た。そのたびに、セリアは海賊たちの荷から見つけた壺のかけらで、床に印をつけた。日数を計算するためだ。
船底での船旅は一三〇日もつづいた。
そして、セリアがこの洞窟に連れて来られて、すでに三〇日になる。
洞窟はどのへんにあるのか、見当もつかなかった。
洞窟に来るまで、船底から一歩も外に出してもらえなかったからだ。
ただ、ロンダルキア大陸のはるかかなたの東海にある、邪神の像のありかの近くではないかと漠然と思っていた。
また、洞窟は海賊たちの隠れ家であることも、薄々感じていた。

だが、この洞窟に閉じこめられてから、ずっと疑問に思っていたことがあった。
それは、どうしてずっとここに閉じこめておくのだろうか、ということだった。
当然、邪神の像のありかに直行するものだとばかり思っていたからだ。
そうでないということは——ひょっとしたらハーゴン側はまだ水の羽衣と月のかけらを手に入れてないからではないか——そうとしか思えなかった。そう思うと、少しは気が楽になった——。
そして、ガルドのことで、ひとつだけ気になることがあった。
ガルドの左手にはめてある白玉の指輪のことだ。
ある日、船底で、ムーンブルクのことを思い出していたときだ。
老魔道士サルキオが生前、呪文の話を聞かせてくれたときのことを思い出し、すぐさまガルドの左手の白玉の指輪を連想したのだ。
——この世に、祈り(いの)の指輪というものがあると聞いております。美しい白玉の指輪で、その指輪をはめると、とてつもない呪文の力を持つといわれておるそうです。しかし、光あらば影(かげ)。とてつもない力を与える代わり、あまり使いすぎると、その者の命をも奪(うば)ってしまう残酷(ざんこく)な指輪でもあるというのです——サルキオは、そういったのだ。
ガルドが姿を現したとき、そして姿を消したとき、白光の渦は白玉の指輪から発し、指輪に消えた。それは信じられない魔法だった。
たしかに、祈りの指輪のように強力なものがなければ、あのように瞬時にして場所を移動する

ことは不可能に思えたからだ。
そのガルドがセリアを船底に残して出て行ってからすでに一六〇日余り。不思議なことに、ガルドは一度もセリアの前に姿を現さなかった——。
「アレン——」
セリアは、そっと胸の薄翠(うすみどり)のペンダントを握(にぎ)りしめた。
不安になったりさびしくなると、こうやってセリアはアレンのことを思い浮かべた。
きっとアレンやコナンは、今ごろ必死にわたしを捜(さが)しているに違いない。そしていつの日か、必ず助けに来てくれる——そう信じて。
そのときだった。セリアは、背後に人の気配を感じてはっと振り返った。
なんとガルドが鉄格子の内側に立っていたのだ。
「ここはどこなのっ？　邪神の像のありかのそばなのねっ？」
すかさずセリアが聞いた。
「そうだ——」
ガルドは、冷たい目で答えた。
「いつまでここに閉じこめておく気なのっ？　邪神の像を手に入れるためにわたしが欲しかったんじゃないの？」
「ふっ——」

ガルドは、思わず苦笑した。
「賢い姫には、すでに察しがついてるはずだ――。邪神の像を手に入れるには、まだ、必要なものがある。姫の他にな――」
そういって、じっとセリアを見つめると、
「ローレシアとサマルトリアの王子が、デルコンダルに現れたそうだ」
「えっ？　デルコンダル？」
「ここから東方にある国だ」
「でも、敵のくせにどうしてそんなことを教えるの？」
「別に他意はない――。教えたからといってどうなるものでもないからな――。しばらくは好きなようにさせておくさ――」
ガルドは、にやりと笑うと、すーっと姿を消した。
「待って！」
思わずセリアが叫んだときは、もう遅かった。
祈りの指輪のことを聞こうと思ったのだ。
「――」
セリアは、溜息をついて、ガルドの消えたところを見ていた。
だが、ガルドの言葉を思い返して、ほっとしていた。まだハーゴン側が水の羽衣と月のかけら

を手に入れてないことがはっきりしたからだ。それに、アレンたちも無事にこの近くまで来ているのだ。

そのとき、どこからともなく、澄んだ美しい笛の音色が流れてきた。

セリアは、はっとして窓の外を見た。海に突き出た岩に腰をおろしてガルドが笛を吹いていたのだ。

思わずセリアは立ちつくし、笛の音に耳を澄ました。

ふと、風の塔の魔女のことを思い出した。ガルチラさまのご子孫が生きのびておれば、必ずや銀の横笛を持っているはず――と、いった言葉を。だが、そのことはすぐ忘れてしまった。

妙に心にしみる美しい音色だったからだ。そして、どこか物悲しい旋律だった。

セリアの瞼に、やさしかった父ファン一〇三世と母シルサの顔が浮かんだ。さらに、愛するアレンの顔も――。

すると、セリアの胸の奥から急に熱いものがこみあげてきた。

今まで船底やこの洞窟で何度も両親やアレンのことを思い出したが、涙を流したことはなかった。

だが、その美しい音色に、自然と涙が頬を伝ったのだった――。

4　魔女

白い帆(ほ)は、いきおいよく風をはらんでいた。

季節風をとらえたラーミア号は、デルコンダル島のはるか南方にある小島ザハンを目指して、順調に航海をつづけていた。

そして、デルコンダルの港を出航してから二十八日目、水平線のかなたに夕日を浴びた美しいザハンの島が見えてきた。

小島とはいっても、かなりの大きな島だった。島を歩いて一周するには三日もかかるとガナルが説明した。香辛料の産地であるこの島の人口はおよそ三〇〇〇人、その半分以上の人が香辛料の積み出し港であるザハンの町に住んでいるというのだ。

岬の木々や岩肌(いわはだ)がはっきり肉眼で見えるところまで来たときには、すでに夕闇(ゆうやみ)が迫(せま)っていた。入江に入ったときだった。甲板(かんぱん)に立っていた三人は、思わず顔を輝かせて、同時に歓声をあげた。

港には、大型帆船(おおがたはんせん)が五隻、さらに大きな母船一隻、計六隻が帆をおろして停泊していたのだ。それらの船の帆柱(マスト)の上で、ラーミア号と同じ、女性の騎士像(きしぞう)をあしらったハレノフ家の旗がなびいていたのだ。ハレノフ八世の率いる船団だった。

「おーい！」

アレンとコナンは、必死に船団にむかって手を振り、ガナルは喜び勇んで銅鑼を鳴らした。すると、ラーミア号に気づいた船団の船乗りたちも、それに応えるように一斉に銅鑼を鳴らし始めたのだ。美しい夕暮の港に、銅鑼の音が響き渡った。

ラーミア号が、桟橋に着くと、ハレノフ八世とレシルが出迎えてくれた。

ルプガナの港を出航したのは昨年の竜の月、それからすでに二二〇日になろうとしていた。

ハレノフ八世とレシルは、セリアのいないのに気づき、

「セリアさまはどうなされましたのじゃ？」

と、心配そうにハレノフ八世がたずねた。

「それが――」

とたんに、アレンもコナンも顔を曇らせた。

「敵にさらわれてしまいました――」

「えっ？」

ハレノフ八世とレシルが、思わず絶句した。

母船のハレノフ八世の部屋の食卓には、オリーブ油と酢とトマトをベースにした小海老と野菜の冷たいスープ、白身の魚と玉葱のガーリック風味の揚げもの、小魚と季節の野菜をまぜたサラダ、車海老の鉄板焼き、海老の揚げものなどの豪華な料理や、南国のさまざまな果物が並べられ

た。
アレンは、ルプガナを出航してからのことをハレノフ八世とレシルに話して聞かせた。冬の嵐のこと、ラダトームでのこと、竜王の子孫のこと、大灯台でのこと、そしてデルコンダルでのことなどを――。
「そうですか――」
「それにしても、可哀相――。セリアさま――」
ハレノフ八世もレシルも、大きな溜息をついた。
アレンもコナンも、料理にあまり手をつけようとしなかった。
「さあ、どうぞ――」
ハレノフ八世は、気を取りなおして料理を勧めた。
だが、コナンは、じっとテーブルの上の料理を見つめていた。
「どうなさいました、コナンさま――？　お口に合いませんか？」
ハレノフ八世が心配してたずねると、
「明日、セリアの十七回目の誕生日なんだよね――」
そういって、コナンはまた溜息をついた。
「そうか――」
アレンは、コナンにいわれて初めて気づいた。

「ムーンブルクが襲われてからちょうど一年か――」
「二年つづけてセリアのやつ、さびしい誕生日を迎えるんだぜ――」
コナンは、潤んだ目をそっと拳で拭うと、涙を悟られまいとして料理をがつがつ食べ始めた。
そんなコナンを、レシルは複雑な表情で見つめていた。
コナンが、セリアを心配するのはわかる。自分も、セリアのことを心から心配している。
だが、目の前のコナンを見ながら、セリアがアレンを愛しているのをコナンは知っているのに、それでもまだコナンの瞳にはセリアの姿しか映ってないのだろうか――そう思って、レシルはちょっと哀しくなった。と、同時に、セリアが大変なときに、セリアに嫉妬するなんて、なんて嫌な人間なんだろう――そう思って、そんな自分を恥じた。
そこへ、ガナルが町の長老を連れて入って来た。
ザハンの町に来た目的を聞いたハレノフ八世は、盲目の魔女のことを聞くには長老が一番いいだろうと思い、ガナルに連れて来るよう命じていたのだ。
「やあ、長老、わざわざ足を運ばせてすみません――。本来ならこちらからお伺いしなければならんのですが――」
ハレノフ八世は、腰の曲がった今年九十九歳だという長老に丁重に挨拶をし、椅子を勧めた。
「あれは――わしがまだ子供のころじゃった――」
長老は、おもむろに話し始めた。

「大きな嵐があってのぉ――。ほら、あの島じゃ――」
長老が窓の外を指した。
入江のはるかむこうの水平線に、小さな黒々とした島影が見えた。
「岩だらけの島なんじゃが――、あの島に船が乗りあげて大破したんじゃ――。船乗りたちは、荒れ狂う海に放り投げられたんじゃが――、必死に島にしがみついてのぉ――、島の洞窟に逃れたそうじゃ――。ところが、洞窟には、盲目の魔女が棲んでおってのぉ――、寒さに震えて死にかけた船乗りのために――、その魔女は命より大事だという――、立派な美しい織り機を燃やして助けてくれたそうじゃ――。そういう話を子供のころ聞かされたことがあるんじゃよ――。じゃが――」
そういって長老はひと息ついた。
「今もいるかどうか、わからん――。九〇年も前の話じゃからな――。そのあと噂も聞かんし――、近づく者もおらんからな――」

その夜――。
アレンたちは、さっそくザハンの沖合にある島へむかった。
島はローレシア城の宮殿ほどの大きさで、周囲を大きな暗礁がおおっていた。
ラーミア号で近づけるところまで行くと、アレンとコナンは積んであった小舟を漕いで、島に

上陸した。
洞窟の入口はすぐ見つかった。島の中腹に大きな穴がぽっかり開いていたのだ。
二人は、たいまつに火をつけて、洞窟のなかへ入った。
すると、ほどなく奥からかすかに明かりが見えた。
「明かりだ――」
アレンとコナンは、顔を見合わせると、慎重に奥へすすんだ。
奥に広い空間があった。そこで、黒いマントをまとった老婆が床に座り、目の前の床の灰に目をやっていた。明かりは、その灰からだった。灰が、蠟燭のような柔らかな不思議な光を放っていたのだ。
「あの――」
アレンが声をかけようとすると、おもむろに老婆は顔をあげた。
「お待ちしておりました――。勇者ロトとアレフの血をひきし者たちよ――」
しわがれた声だが、親しみがこめられていた。魔女だ。
二人の姉と同様、目はつぶれて、頬はげっそりと落ち、手も指も骨ばっていた。
「わたしはずっとここで、あなたさま方の来るのをお待ちしておりました――。精霊ルビスさまのお言葉に従って――」
「実は、邪神の像のことを聞きたくてやって来たんだ」

アレンは、魔女の二人の姉に会ったことを話した。
「そうですか——。姉たちが——」
魔女は、嬉しそうに微笑むと、
「邪神の像は——ロンダルキア大陸のはるかかなたの東海の——巨大な岩の海底洞窟に納められていると聞いています——」
「巨大な岩の——？」
「はい——。でも、その岩へは、だれも近づくことができないのだそうです——。邪神に魂を売った者以外は——」
「どうして？」
「岩の周囲を、邪神に呪われた岩礁と沸騰した恐ろしい海流が取り巻いているからだそうです——。ですから、船はそこを通ることができません——。小さな舟で岩礁を避けて通ろうとしても、たちまち岩礁にぶつかって、粉々に砕け散ってしまうとか——。もちろん、沸騰した恐ろしい海流なので、泳ぐこともできません——。でも——ただひとつだけあるのだそうです——。岩に渡る方法が——。それは——月のかけら——」
「月のかけら？」
「はい——。月のかけらの力を借りて、岩礁と海流の邪神の呪いを、清らかな潮でおおい流してしまえば渡れるのだそうです——」

「そうか――。そうだったのか――」
「ところで――わたしたちのことはお聞きになりましたか――？」
「竜王に仕えてたって話かい？」
魔女は、頷（うなず）くと、
「わたしは、姉たちと別れてから、アレフガルドへ行きました――。しかし、どこにも安住の地が見つかりませんでした――。そして、わたしはやっと大灯台にたどり着いて、そこを安住の地に決めたのです――。ところが、三〇年ほどしたとき、突然邪教徒（とつぜんじゃきょうと）の祈禱師（きとうし）たちが現れて、わたしを追い出そうとしたのです――。わたしは、必死に抵抗しました――。ところが祈禱師たちはわたしの命を奪おうとしました――。この通り、目が不自由ですから、抵抗といっても、たかが知れてます――。わたしの背中を鋭い刃先が斬り裂（さ）きました――。わたしは、覚悟（かくご）いたしました――。そのときでした、突然わたしを柔らかな光が――いえ、わたしは目が不自由ですから、光かどうかはっきり分かりませんが、わたしにはそう感じられたのです――。その柔らかな光がわたしをつつんだと思うと、わたしの体が宙に浮いて、そのまま空を飛んだのです――。ほんの一瞬のできごとでした――。つぎの瞬間、わたしはここにいたのです――。背中の傷もいつの間にか癒（い）えていました――。すると、精霊ルビスさまの声が聞こえてきたのです――。『――いつの日にか、勇者ロトとアレフの血をひきし者たちが、ここを訪ねて来るときがあるでしょう。その日まで、そなたは生きつづけなければならない運命にあるのです。そして、そなたの姉たちも――。

それぞれの使命を持って生きつづけなければなりません。そなたは、勇者ロトとアレフの血をひきし者たちのために、聖なる織り機を守りつづけなければなりません――。そして、わたしの言葉を勇者ロトとアレフの血をひきし者たちに伝えるのです――』そうお言葉を残すと、ルビスさまの声は消えたのです――。はっと気がつくと、わたしのそばに聖なる織り機があったのです――」

魔女は、そういってひと息ついた。

「ところが――。そうあれは、九〇年も前のことです――。嵐にあってこの島に船が乗りあげて大破したことがあったんです――。やっと助かった船乗りたちは、この洞窟に逃れてきたのです――。ところが、寒さに震えて船乗りたちは死にかけていたのです――。わたしは悩みました――。燃やすものは、ルビスさまから預かった聖なる織り機しかなかったのです――。わたしは、散々悩んだ末、大事な聖なる織り機を船乗りたちのために燃やしました――。どうしても見過ごすわけにはいかなかったのです――。運よく、船乗りたちは一命をとりとめました――。そのあと――わたしは、ルビスさまに詫びるために、自らの命を絶とうとしました――。そのとき、またルビスさまの声が聞こえたのです――。『そなたの使命は、勇者ロトとアレフの血をひきし者たちを待つことだといったはずです――。わたしの言葉を伝えるために――』。いいえ。わたしには、その資格はありません――。わたしは、あなたさまのお言葉さえ守れないだめな人間なのです――。わたしがそういうと――。『勇者ロトとアレフの血をひきし者たちが訪れるまで、生きつ

づけなければならないのが、そなたの運命――。たとえ、聖なる織り機が燃えてしまっても、灰が残ったはず――。その灰は、ただの灰ではありません――。そなたには見えないかもしれないが、それは光の灰です――。その光の灰を他の織り機に振りかければ、聖なる織り機と同じ働きをするでしょう――』そうおっしゃって、ルビスさまの声は消えてしまったのです――」

魔女は、いい終わると、

「雨露（あまつゆ）の糸をお持ちですか――」

「雨露の糸？　ああ。ドラゴンの角（つの）の北の塔で、あなたの姉さんからもらったんだ！　ここに入っている！」

アレンは、革袋のふくらみをバンと叩（たた）いた。

「ルビスさまからのお言葉です――。雨露の糸と、この聖なる織り機――」

魔女は、そっと両手で光の灰をすくうと、

「これを持って、テパの村へ行きなさい――」

「じゃあ、これで水の羽衣を織ってもらうんだねっ？」

魔女が頷いた。

「よかった！」

コナンが顔を輝かせた。

「ということは、ハーゴンがまだ邪神の像を手に入れてないっていうことだっ！」

「そういうことだっ！」
アレンも嬉々として、革袋から布を出して、魔女の手の下に広げた。
サラサラサラ――まるで音を立てるように、キラキラ輝きながら、光の灰は魔女の手からアレンの布に落ちた。
「これで、やっとわたしの役目は終わりました――。もう二度とお目にかかりますまい――」
魔女は満足そうに微笑んだ。
「ありがとう――」
革袋に光の灰を仕舞うと、アレンとコナンは礼をいって立ち去った。
とたんに、洞窟のなかはまっ暗な闇につつまれた。やがて、
「精霊ルビスよ――」
闇のなかに、か弱い魔女の声が流れた。だが、穏やかな声だった。
「これで、安心して、アレフさまのところへ行けます――。そして、姉たちのところへも――」
そして、それっきり声がしなくなった――。

5　裏切り

「な、なにっ？　ガルドが王女を捕まえたまま姿を消したじゃとっ？」

大神官ハーゴンの恐ろしい声が、大理石の神殿に響き渡った。
中央祭壇の前に、悪魔神官と近衛司令官のベリアルと、さらに二人の後方で近衛連隊長バズズ、アトラス、アークデーモンが、ひれ伏していた。
祭壇の奥の大理石に、巨大な黒い影がゆらゆら揺れながら映っている。大神官ハーゴンの仮の姿だ。
「どういうことなのじゃ、悪魔神官っ？」
「ははーっ！」
悪魔神官の顔は青ざめていた。
「じ、実は——」

二〇日ほど前、ガルドが悪魔神官のところに現れたのだ。
『王女は奪った。だが、渡すわけにはいかない』
『な、なにっ？　どういうことだっ、ガルドっ！』
驚き慌てた悪魔神官は、思わず声を荒げた。だが、ガルドは、
『いつもの気まぐれさ——』
と、冷たい目で笑っただけだった。そして、
『あんたの知らないことを教えに、わざわざやって来たのさ。今まで世話になったからな。たし

かにあんたのいった通り、邪神の像を得る者は、この世でただひとり、ムーンブルクの王女をおいて他にいない。だが、その王女といえども、水の羽衣がなければ、一歩たりとも邪神の像に近づけないのさ。今、ロトとアレフの血をひく者どもが、必死に捜している最中だ』

そういって、姿を消したのだ——。

「水の羽衣となっ——？」

悪魔神官の話を聞いたハーゴンがいった。

「はっ！」

「王女が開かずの扉の呪いを解いただけでは、邪神の像に近づけぬと申すのかっ⁉」

「はっ！　邪神の像のあるところは、だれも見た者がございませぬゆえ、たしかなことは——！

ただ、ガルドはうそをつくような男ではございませぬっ！」

「だが、それはそれっ！　王女は王女っ！　そちはあれほどわしの前で大見栄(おおみえ)をきったではないかっ！　王女を連れて来るとなっ！」

「も、申し訳ありませぬっ！　配下の者どもが今ガルドの行方(ゆくえ)を捜しておるところでございますっ！　どうか、今しばらくのご辛抱(しんぼう)をっ！」

するとさっきから口許に笑みを浮かべながら冷ややかな目で見ていたベリアルが、

「悪魔神官どのっ！」

鋭い目でいった。
「はやい話が、裏切られたということですなっ？」
「そ、それは――」
悪魔神官が、口ごもった。
「小賢しい人間どものやることはようわかりませんなっ！　少なくともわれわれ魔界の者にはそのようなことは絶対にあり得ないっ！　こんなことでは、議長としての能力が疑われたとしても、仕方ありませんなっ！　このような醜態、議長として絶対にあってはならぬことっ！　いかが思われますっ、大神官さまっ！」
「お、お待ちくださいっ、大神官さまっ！　やつにはやつの考えがあってのことかと思われますっ！　今ごろ水の羽衣を捜しておるのかも知れませぬっ！」
「はっははははっ！」
とたんに、ベリアルは声をあげて笑った。
「裏切られておりながら、まだそのような戯言っ！　この責任、どうとるつもりなのかなっ、悪魔神官どのっ？」
「うっ――！」
悪魔神官は、唇を震わせながらベリアルをにらみつけた。
「悪魔神官よっ！」

ハーゴンがいった。
「はっ――！」
「ベリアルのいう通りじゃ！　今のままでは、議長としての示しがつかぬっ！　しばらく本部を離れて、下界で頭を冷やしてくるがいいっ！」
「だ、大神官さまっ？」
悪魔神官は、愕然とした。
「ど、どうかそれだけはっ！　ただちにガルドを捕らえて王女を取り戻しますっ！　もちろん、水の羽衣もこの手で――」
「黙れいっ！」
ハーゴンの怒鳴り声が響き渡った。
悪魔神官は、言葉をのんでひれ伏した。
「見苦しいぞっ、悪魔神官ともあろう者がっ！」
「し、しかしながら大神官さまっ！」
「失せいっ！」
「大神官さまっ！」
悪魔神官は、哀願するようにハーゴンの巨大な黒い影を見た。
長年に渡ってハーゴンに忠誠をつくし、ハーゴンのために働いてきたのだ。

今になって、ハーゴンに罵声を浴びせられるとは、夢にも思わなかったのだ。
「ええいっ、失せいっ！　失せいっ！」
「うぬぬぬぬっ！」
悪魔神官は、視線を落とし唇を噛みながら、わなわなと肩を震わせた。
「悪魔神官どの！」
ベリアルは鋭い目で促し、すかさずバズズたちが悪魔神官を取り囲んだ。
早急に立ち去らなければ、叩き出すつもりなのだ。
「く、くそっ！」
悪魔神官は、ベリアルをにらみつけると、その場から逃げるように立ち去った。
「ベリアルよっ！　あとはそちたちに任せたっ！　一刻もはやく邪神の像を手に入れるのじゃっ！　大冥界の大魔神との約束の日は近いっ！　急がねばならぬのじゃっ！」
「ははっ！」
ベリアルたちは、ひれ伏した——。

第七章　テパの村　満月の塔

聖なる織り機の光の灰を魔女に授かってから三日後、ラーミア号の点検を終え、水と食糧を補給すると、アレンとコナンとガナルの三人は、ハレノフ八世やレシルたちに見送られて、ペルポイを目指してザハンの港を出航した。

また、ハレノフ八世の船団は、ラーミア号がザハンを出航した数日後にデルコンダルにむけて出発し、デルコンダルに寄港したあと、ローレシア大陸の北海を回る北航路で、ルプガナに帰る予定になっていた。

前方に斬り立った断崖絶壁のロンダルキア半島が見えてくると、ラーミア号は半島を右に見ながら海岸線にそって西北にむかった。

やがて、断崖絶壁がきれると、ペルポイの港のある入江が見えてきた。

ザハンを出航してちょうど三〇日目、暦は一角獣の月から、犬頭神の月に変わろうとしていた。

1　水門の鍵（かぎ）

ペルポイの港は、小さな漁港だった。
港の周囲には四、五〇軒（けん）ばかりの廃虚（はいきょ）が並（なら）んでいる。かつての町の跡（あと）なのだ。
ラーミア号を桟橋（さんばし）につけると、さっそく見張り台から二人の兵士が駆（か）けつけて、三人の身元を調べようとした。だが、アレンたちが名乗り長老に会いたいと告（つ）げると、兵士たちから警戒（けいかい）の色が消えた。
そして、若い兵士が愛想よく「案内しましょう」と、申し出たのだ。
アレンとコナンが、ガナルを船に残して、兵士のあとをついて行こうとすると、
「おれも行きまさあ――」
と、慌（あわ）ててガナルが甲板（かんぱん）から飛びおりた。
「デルコンダルでは黙（だま）っておりましたが、実は――」
ガナルは、ちょっといい澱（よど）んだが、
「昔（むかし）、おれたちもラゴスにやられたんでさあ。二の腕（うで）に髑髏（ドクロ）の入（い）れ墨（ずみ）のあるやつにね」
「えっ？」
アレンとコナンは、驚（おどろ）いた。

「やはり四〇年ほど前でした。ハレノフ八世さまの船団がベラヌールに寄港したとき、船乗りになりてえって男がやって来て――。まったく同じ手口で――」
そういって、ガナルは苦笑しながら頭を搔いた。
「なんだ、そうだったのかあ」
コナンは、吹き出した。
若い兵士のあとについて廃墟の町の通りを抜けると、港の背後にそびえている岩山に突きあたった。そこに、二層建ての強固な石造りの門があった。
石の門に入ると、ひんやりと空気が冷たかった。
そこから地下に階段がのびていた。いくつもの踊り場を通り、さらに下におりた。三人は、思わず足をとめてその光景に目を見張った。
地下に町があったのだ。三層四層建ての家の間を、迷路のような路地がいくつものびていて、宿屋、武器屋、酒場、食堂、衣料店、食料品屋、肉屋などがびっしりと軒を並べていた。初めて見る光景だった。
この狭い地下の町に、一五〇〇人もの人たちが暮らしているのだ。
一〇〇歩ほど行くと、ちょっとした広場に出た。ここが町の中心だった。
「ここからどっちへむかって歩いても、一〇〇歩ほどで突きあたってしまいます」
兵士はそういって、広場に面した四層建ての家の階段をのぼり始めた。

長老の家は、三階にある二間ばかりの狭い家だった。
アレンとコナンが名を名乗ると、玄関に出た長老はさすがに驚いた。だが、奥の部屋に案内すると、
「いやあ、町を見て驚かれたでしょう？」
今年八〇歳になるという長老はそう語りかけた。そして三人に椅子を勧め、
「一五〇年ほど前まで、このペルポイの町は、石炭の産地として栄えておったのですよ。港は石炭を積み出す船で大変な賑わいだったそうです。ところが、よく海賊やロンダルキア山脈の魔物に襲われましてねえ。町はそのたびに、大変な被害を受けていたのですよ。自警団を組織して抵抗したんですが、荒くれ者の海賊たちには歯が立たなかったのです。もちろん、魔物にも——。そこで、海賊から命や財産を守るために、この鉱山のなかに町を造り、みんな移り住むようになったのです。その方が守りやすいですからね。それ以来、一歩も町のなかに海賊や魔物を入れたことがないのですよ。ところが、石炭を掘りつくしてしまって、今ではご覧の通り、すっかりさびれてしまいました——」
と、さびしそうに笑った。
「実は——」
アレンは、旅の目的を告げ、泥棒のラゴスのことをたずねた。
「ラゴス——？」

長老は首をかしげた。
「テパの村の水門の鍵を盗んだやつです」
長老は、また首をかしげた。
「二の腕に、髑髏の入れ墨があるそうです」
「聞いたことがありませんなあ、そのような泥棒は――。この町の者は、ほとんどが代々この土地に住んでおった者ばかりでしてね。よそ者が来れば、すぐわかるんですが――。ああっ、そうだ。道具屋のスコラに聞いてみたらどうですかな？　昔、あちこち旅をしておったという噂です。この町に来て、道具屋を開いてかれこれ三十五年になりますが、彼だったら知ってるかも知れませんぞ。客もたくさん出入りしますからねえ。ほら、あの店ですよ」
長老は、そういって窓から広場のむかいにある古い道具屋を指した。
道具屋は、間口が狭いが、奥行きの深い店だった。
三人が入って行くと、店の奥で帳簿をつけていた六〇歳ぐらいの恰幅のいい主人が顔をあげた。
その主人の顔を見て、ガナルは思わずはっとなった。
太って体型まで変わっているが、その顔には、はっきりと面影が残っていた。
ガナルは、すかさず主人の二の腕を見た。
「お聞きしたいことがあるのですが――」
アレンがラゴスのことをたずねた。だが、

「さあ——。そのような泥棒のことは——」

主人は首をかしげた。

すると、ガナルが鋭い目でいった。

「おれたちゃただテパの水門の鍵が欲しいんでさあ——！」

アレンとコナンは、驚いてガナルを見た。

ガナルは、じっと主人をにらみつけたまま目を離さなかった。

「テパの——？」

一瞬、主人はうろたえた。だが、

「うちではそのようなものは扱っておりませんが——」

とっさに笑顔で答えた。

「他のやつはごまかせても、おれの目はごまかせねえっ」

ガナルは、いきなり主人の左の二の腕をガッとつかんだ。

「な、なにをするんです！」

主人は必死に手を払おうとして体をよじったが、ガナルはがっちりつかんで離そうとしなかった。

「ベラヌールの港じゃ、たしかニコルって名乗っていたな。コソ泥ラゴスさんよ——」

主人の顔色がさっと変わった。

「な、なにをいってるんですかっ？」
「これが証拠だっ！」
バリッ——！　いきおいよくガナルが主人のシャツの袖を肩口から引き裂いた。
主人の二の腕に包帯がぐるぐる巻いてあった。
だが、ガナルは容赦なくその包帯も剥ぎ取った。
「あっ？」
アレンとコナンは、驚いて声をあげた。
主人の二の腕には、焼けただれたあとが残っていた。
「うっ——！」
顔を引きつらせながら、主人は慌てて右手でそのあとを隠した。
だが、右腕の動きがぎこちなかった。右腕が不自由なのだ。
「焼き消したって、おめえの罪は消えるわけじゃねえっ——。水門の鍵はどこだっ？」
ガナルは強引に、うなだれた主人の顔を自分の方にむけさせた。
「わ、わかった——。夜、港で待っててくれ。必ず持って行く。お、奥には女房や孫がいるんだ——」
主人は、奥を気にしながら声を殺して哀願した——。

その夜、ラゴスはひとりで港に現れた。
ガナルがラーミア号の船室に呼び入れると、
「たしかに、わたしがラゴスです――」
ラゴスは、うなだれていった。
「わたしは天涯孤独の身なんです。子供のころから盗みでもしなくちゃメシにありつけませんでした。そしていつのころからか大人になったら世界一の盗賊になろうと思っていたんです。二〇歳のとき、ある貿易商にテパの村の水門の鍵を盗んできたらたんまり礼をするっていわれました。命がけの大仕事でしたよ。何しろあそこへ行く途中にゃ魔物がウヨウヨしてますからね。うまくいったのはわたしにとっちゃ奇跡みたいなもんでした。ところがその貿易商のやつときたら鍵を受け取ると礼をくれるどころか、わたしを半殺しの目にあわせると屋敷から叩き出したんです。テパの村にゃものすごい武器がたくさんあるって噂が流れてましてね、たぶんあの貿易商のやつは鍵と交換に、その武器を手に入れるつもりだったんでしょう。わたしもカッときてある夜、やつの屋敷へ忍びこむと、鍵と金貨を盗み出したんです――ところが」
といって、ラゴスは不自由な右腕を見た。
「鍵を盗んでしばらくすると、この右腕が突然きかなくなってしまったんです。きっと罰があたったんですよね。それで泥棒稼業から足を洗うと、名前を偽ってこの町に住みつきました。そしてその貿易商からいただいた金貨を元手に道具屋を始めたんです。商売は思いのほかうまくいき

ました。やがてこの町の娘と結婚し、子供が生まれ孫ができ――お願いです。水門の鍵はお返ししますからわたしの素性を町の人たちにいうのだけは――」

いつの間にか、ラゴスの目に涙が浮いていた。

「さっきもいったはずだ――。おれたちは水門の鍵が欲しいんでさあ――。おまえがどこでなにをしようが、今さら関係ねえ――」

ガナルが、答えた。

「すまない――」

ラゴスは涙を拭いた。

「ぼくたちは、その鍵で水門を開けたいんだ」

「満月の塔に行きたいんだ」

アレンがいい、コナンがいった。

「そうなんですか！　いやーそれはよかった。わたしは堅気になってからずっと考えていたんです。いつの日かテパへ行く人が現れたら鍵を渡そうって――。その日が来なきゃわたしの過去は永遠に消えないって。だから鍵は大事に仕舞っておいたんです」

そういって、ラゴスは懐からおもむろに水門の鍵を取り出した。

赤銅色の立派な鍵だった。ちょうど手のひらにすっぽり納まる大きさだ。その把手の中央に美しい赤い石が埋めこまれ、さらにその下に楔形文字が刻まれていた。

2　テパの村

翌朝、アレンたちは長老とラゴスに見送られてペルポイの港を出航した。

もちろん、ラゴスの過去のことはだれにも話さなかった。

ロンダルキア大陸を右に見ながら、海岸線にそって西北にすすむと、ふたたび斬り立った断崖絶壁がつづき、その後方に雪におおわれたおどろおどろしいロンダルキア山脈がそそり立っていた。

アレンは、暇があると何時間でも剣の稽古をした。波の荒い日も、雨の日もつづけた。闘いに天候は関係ないからだ。

また、コナンも呪文の習練に余念がなかった。

ギラの呪文の火力と威力は倍増し、さらにギラの呪文より強力な電撃魔法ベギラマや、一瞬にして敵に死をもたらすザラキの呪文も習得していた。

ときおりガーゴイルやバピラスといった、空の魔物が群れをなして襲ってきた。

だがそれも、腕をあげた二人にとっては上達の度合を計る丁度よい機会に過ぎなかった。

アレンが甲板上で跳躍し、左右から襲いかかった二匹のバピラスを一瞬で両断すれば、コナンも負けじと上空のガーゴイルにザラキの呪文を浴びせかけた。

死の呪文は巨大な鳥人族の血液を瞬間に固まらせ、魔物はつぎつぎと海面に落下した。
二人の腕は、確実に上達していた。
ペルポイを出航して二十七日目、ラーミア号は斬り立った断崖絶壁の海岸線に接近すると、山奥まで食いこんでいる峡谷を捜して、奥へとすすんだ。
峡谷は、複雑に入り組んでいて、奥へすすむほど崖と崖の間が狭まってきた。
そして、三十六日目、ラーミア号はこれ以上先にすすめないところまで来た。
その先はさらに峡谷が狭まり、巨大な岩や石が露出した川床が、奥へ奥へとつづいていた。
アレンとコナンは、ラーミア号にガナルを残すと、川床を上流にむかって歩き出した。
このはるか上流の谷間にテパの村があると、ラゴスが教えてくれたからだ。

数時間歩き、ひと休みしようとしたときだった。
「うわわっ!?」
突然、コナンが悲鳴をあげた。
川底から飛び出したまっ赤な手が足首をがっちりと捕まえていた。指の太さは人間の腕ほどもあり、手のひらに当たる部分は人間の胴体ぐらいの大きさだ。
この一帯に棲息するブラッドハンドだった。
コナンは即座にギラの呪文をかけようとした。

「待てコナン！」
剣を抜いたアレンが慌ててとめた。
今のコナンのギラの威力では魔物と一緒にコナンの足まで吹っ飛ばしかねないと思ったのだ。
アレンの剣が一閃し、どす黒い魔物の体液が干上がった川床に飛び散った。三本の指を失ったブラッドハンドはすばやく地中に姿を消した。だがそのときには、二人の周囲には五〇匹ほどのブラッドハンドが出現していた。
「アレン、しばらく時間を稼いでくれっ！」
コナンはそういうと、いきなり自分の剣を放り投げた。
細身の長剣はクルクルと回転して少し離れた川床に突き刺さった。
「――」
アレンは、コナンが何を考えてるのか理解できなかった。
だがそんな間にもブラッドハンドはつぎつぎと襲いかかり、武器を手放してしまったコナンを守るためにアレンは必死で防戦した。
「ベギラー」
コナンは精神を集中させると、胸の前で印を結び、やがて右手を空にかざした。
「マー」
晴れた空にたちまち黒雲が巻き起こりあたりが暗くなった。電光がきらめき、大木ほどの太さ

がある稲妻が川床に突き刺さっていたコナンの剣を直撃した。

バリバリバリッ！　すさまじい音が轟き、鉄の焦げたような異臭が鼻をついた。

「終わったぜ」

ニヤリと笑ってコナンがいった。ブラッドハンドは一匹残らず黒焦げになって死んでいた。

「こいつの本体は地面のなかなのさ」

まだうっすらと煙をあげている剣を鞘に戻しながら、

「だから、直接そいつにベギラマをかけなければ——」

地表に現れる手の部分をいくら殺してもブラッドハンドを倒すことはできない。以前、魔物について書かれた本で読んだのだとコナンは笑いながら説明した。

その後も、何種類かの魔物が二人を襲ってきた。

近くの山に棲む凶暴な首狩り族や、魔力を吸い取るパペットマンたちだ。だがアレンとコナンにとってどの魔物も大した相手ではなかった。大灯台で苦戦したあのゴールドオークでさえも、剣と魔法の波状攻撃の前に悲鳴をあげて逃げ去ったのだ。

峡谷の川床を歩き出して、九日目の夕方、前方の谷間に小さな集落が見えてきた。

テパの村だった。テパの村の入口まで行くと、峡谷のさらに上流に斬り立った断崖絶壁がそびえ、そこに巨大な隧道の入口が見えた。

テパの村は、四方を斬り立った山に囲まれた戸数二〇ばかりの小さな村だった。
村には、城の堀のような運河がめぐらされていた。だが、水は涸れていた。
運河にかかる橋を渡って村に入ると、十数人の村人たちが二人を待ち構えていた。
見張り役が峡谷の川床をのぼってくる二人の影を見て、慌てて長老のところに飛んで行って報告したのだ。数十年振りに旅人がやって来たのだから無理もなかった。
不思議なことに、村人たちの顔には警戒の色がなかった。
むしろ、待ち望んでいたかのように、二人に熱い視線をむけていた。
一〇〇歳にもなるかと思われる白髪痩身の長老が、じっと二人を見ると、
「もしや、勇者ロトとアレフの血をひきし方々ではありませぬか？」
と、たずねた。
アレンとコナンは、驚いて顔を見合わせると、
「はい――。ローレシア国の王子アレンです――」
「ぼくはサマルトリアのコナンです――」
と、丁重に名乗り、
「でも、どうしてぼくたちのことを――？」
アレフが、たずねた。
「わたしたちは、精霊ルビスのお言葉に従い、神々の武器や防具を造る職人として、代々この村

でひっそりと暮らしてきたのです――」
長老の声は、年齢からは想像できないほどしっかりしていた。
「かつて、精霊ルビスが、異界から心正しき者たちを従えてこの世界にアレフガルドを創造いたしました――。そして、精霊ルビスは、魔界からの侵略に備えて、非力な人間たちを守るために、その者たちに神々の武器の造り方を教えたのです――。棍棒や青銅の剣といった原始的な武器ではなく、もっと強固で破壊力のある流白銀の剣や、ドラゴンの鱗から造る鎧などを――。やがて、精霊ルビスの危惧した通り、魔界からの侵略が始まりました――。しかし、その者たちの造った神々の武器が、魔界からの侵略を退けたのです――。すると、精霊ルビスはその者たちに、こうおっしゃったのです――。『そちたちは、世間から身を隠しなさい――。そちたちが造る神々の武器は、このままではいずれ人間たちが自分の権力と欲望のために使おうとするでしょう――。人間同士の争いに使われぬように――。そして万一また魔界からの侵略があるときに備えて、その技術を後世に伝えるのです――』と。こうして、その者たちは、人里離れた、外界から完全に切り離されたこのテパの地にやって来て、生活を始めたのです――。それが、われわれの祖先なのです――。そして、われわれも祖先のいい伝えを守って、今日まできたのです――」
「そうですか――。実はぼくたちは、大神官ハーゴンを倒すために旅をつづけているのです。そして、ハーゴンを倒すためにはどうしても邪神の像を手に入れる必要があるのです。ところが、ハーゴンもまた、大魔神をこの地上界に呼ぶために邪神の像を手に入れようと必死なのです――」

アレンは、連れ去られたセリアのことを、さらに邪神の像を手にいれるためにはなにが必要かを話した。
「ですから水の羽衣と月のかけらの二つが必要なんです。この村のドン・モハメという人なら水の羽衣が織れるんでしょ？」
コナンの言葉に長老は頷き、
「おっしゃる通りドン・モハメなら水の羽衣を織れることでしょう。しかし月のかけらは満月の塔にあるのです。あの塔に渡ることだけは――」
と、顔を曇らせた。
「心配ありません！」
コナンが、胸を張った。
「水門の鍵ならここにあります」
「えーっ？」
さすがに、長老や村人たちが驚いた。
コナンが、赤銅色の水門の鍵を革袋から出して見せると、
「おおおっ！」
村人たちからどよめきが起こり、やがてそのどよめきが大きな歓声に変わった。
「そうでしたか――。水門を閉じられて困っておりました――。あれからすでに四〇年――。も

う見つからないと諦めておりました――」
長老は、思わず潤んだ目をそっと拭った。
すると、三〇歳前後の若い男が二人の前にすすみ出て、
「ドン・モハメの孫でございます――。さあ、ご案内いたしましょう」
親しみをこめてそういった。

3　開門

ドン・モハメは、今年一二〇歳になる小柄な老人だった。
ドン・モハメの孫と長老に案内されて、道具屋と鍛冶屋の前を通り、右に折れると、運河のそばに石造りの古い家があった。
その家の奥の工場で、ドン・モハメは黒ずんだ古い手織り機を黙々と磨いていた。
目は鋭く、背筋はピンとのびていた。見るからに、頑固一徹な職人といった感じだ。
手織り機は、数百年も前からドン・モハメの家に伝わる由緒あるものだった。この手織り機で、ドン・モハメは一〇歳のときから、防具に使う特殊な織物を織ってきたのだ。
着く早々、長老が嬉々として水門の鍵のことを告げると、
「勇者ロトとアレフの――？」

ドン・モハメは、驚いてアレンとコナンを見た。だが、
「あ、ありがたいことじゃ――」
礼をいおうとしたが、急に涙が滲(にじ)んできて、あとは言葉にならなかった。
「生きておってよかった――」
やっと涙を拭うと、ドン・モハメは絞(しぼ)り出すような声でそう呟(つぶや)いた。
「実はねえ、じいさん――。二人に水の羽衣を織ってやって欲しいんだ――」
ドン・モハメが落ち着くのを待って、孫がいった。
「水の羽衣――?」
ドン・モハメは、また驚いてアレンとコナンを見た。
「ここに雨露(あまつゆ)の糸と、聖なる織り機の光の灰があります――」
アレンは、革袋から出した雨露の糸と聖なる織り機の光の灰の入った袋(ふくろ)を差し出した。
「光の灰――?」
「はい――」
アレンは、ザハンで魔女に聞いた話をすると、
「そうですか――。やってみましょう。わしで役立つことなら――」
ドン・モハメはそう答えると、
「毎日磨いておったかいがあるというものじゃ――」

と、長老を見て笑った。

さっそくアレンが布の紐を解いて、キラキラ輝く光の灰を手織り機に撒くと、突然手織り機が目のくらむようなまばゆい光を工場いっぱいに放った。

やがて、その光が消えると、手織り機は美しい織り機に形を変えていた。

織り機の足や梁には見事な薔薇の模様が彫ってあり、上の梁には美しい人魚の像が飾られていた。

「こ、これが聖なる織り機か――」

ドン・モハメは、あ然として見惚れていた。だが、我にかえると、

「さあ、もとに戻らないうちに一緒に織るのじゃ――」

と、孫に命じて、とても一二〇歳とは思えない動きで準備を始めた。

そして、アレンとコナンと長老の三人は、ドン・モハメの家を出ると、運河の取水口のそばにある止水塔へ急いだ。

水門を開けるためだ。そこの止水栓を開けると、断崖絶壁のむこうにある湖の水門が開くような仕組みになっているのだ。

もともと、この止水塔は、豪雨や雪解け水で水かさが増したとき、水門の扉を開閉して水量を調節するために造られたものだ。

いつの間にか、西の空に太陽が沈みかけていた。

運河の橋を渡ると、上流の止水塔の前に一〇〇人近くの村人が集まってアレンたちの来るのを待っていた。老婆や、幼児を抱えた女たちや、小さな子供までいる。水門が開くと聞いて集まって来たのだ。

「あれが村の全人口ですよ」

長老はそういうと、止水塔のむこうの断崖絶壁に掘った隧道の入口を指して、

「ほら、あの隧道のはるか先に水門があるのです。なかをどんどん行くと、半日ほどで水門の扉にぶつかりますが、そこから先はどこへも行けません。その厚い扉のむこう側は湖の水でいっぱいなのですからね。ですから、その先に行くには、水門を開けて小舟で隧道を抜ける方法しかありません。水門から先は広大な湖でして、その湖の島に、満月の塔がそびえておるのです――」

と、説明した。

止水塔は、アレンの背丈の四倍ほどの高さで、灯台のような形をした石造りの頑丈な建物だった。

長老に案内されて、外階段を駆けのぼって上にあがると、船の舵輪のような大きな鉄の止水栓があった。

止水栓を支えている柱の上に、青銅の水神の像が飾られてあり、その像の下に鍵穴があった。

「そこに鍵を入れ、左に回してください!」

アレンは、長老の言葉に従って、慎重にその鍵穴に赤銅色の水門の鍵を差しこんだ。

コナンと長老が、固唾をのんで見守っている。

鍵はぴたりと納まった。ちょっとやそっとの力では抜けそうになかった。

アレンが鍵を左に回すと、カチャ――と音がした。

「あとは止水栓を左に一回転すれば終わりです！」

アレンとコナンが、止水栓を握って渾身の力をこめて左にまわすと、突然足元の止水塔のなかがはげしく音を立てて振動した。

なかの止水栓の装置が作動したのだ。

見守っていた村人たちから、大きなどよめきが起きた。

ちょうどそのとき、断崖絶壁のはるかむこうの、湖の水をとめていた水門の分厚い鉄の扉が、ギギギギギギギッ――と、軋みながらゆっくりとあがったのだ。

と、同時に、ゴオオオオーッ――すさまじい飛沫をあげて、怒濤の渦が、まっ暗な隧道にいきおいよく流れ出たのだ。

アレンたちは、止水塔の上から隧道の入口を見つめていた。

また、村人たちも同様に、隧道の入口を見ていた。

すると、ゴォォォォ――と、かすかに地鳴りのような音が隧道のなかから聞こえてきたのだ。

さらにその音が大きくなった。そして、ドドドドドドドッ――地響きを立てながら、大量の水が砂煙をあげて、隧道の入口から飛び出したのだ。

「やったあっ！」

アレンたちが歓声をあげ、村人たちからも大歓声があがった。

その目の前の川床を、水はまるで巨大な生き物のように、轟音をあげ、渦を巻き、よじれながら濁流となって下流に走っていく。

運河の取水口にも濁流が押し寄せ、いきおいよく運河に流れこんでいく。

その、想像を絶するような光景に、アレンたちは圧倒されていた。

長老や老人たちは目に涙を浮かべ、徐々に水かさを増す運河を見つめていた。

やがて濁流は静かな流れに変わり、ゴーゴーという水音も聞こえなくなった。

テパの運河は四〇年前の景観を取り戻したのだ。

「ありがとうございます――。な、なんとお礼をいったらいいのか――」

長老はそういったっきりあとは言葉にならなかった。

やがて、村人たちから、ふたたび大歓声が起こった。

いつの間にか、テパの村を闇がすっぽりとおおい、上空には星が輝いていた――。

4　月のかけら

その夜――。

アレンとコナンは、長老の案内で、村の若者二人が漕ぐ小舟に乗り、満月の塔にむけて隧道をさかのぼった。
隧道の幅は四尋ほどもあり、なかは複雑に曲がっていた。
水量は豊かで、舟から立ちあがると、天井から突き出た岩に頭がぶつかりそうだ。
長老がかざしたたいまつの明かりが、水面にゆらゆら揺れながら映っている。
櫓を漕ぐ音だけが、静まり返った隧道のなかに谺した。
やがて、前方がほのかに明るくなった。水門だ——。小舟は、速度をあげた。
水門を抜けると、突然目の前が開け、広大な湖に出た。
そのはるか前方の島に、秋の皓々とした満月に照らされた、七層建ての巨大な塔がぶきみにそびえている。満月の塔だ。
さらに、その後方には、険しい山脈がそそり立っていた。
「われわれが、そしてわれわれの祖先が、神々の武器を造るためには、それ相応の力が必要だったのですよ——」
長老は、満月の塔を見つめながらいった。
「なぜなら、神々の武器は、銅や鋼鉄とは違う、もっと強固な、もっと強靭な、もっと硬質な、神秘の鉱石から造るからです——。そのためには、人間が使用しているものとは比較にならないほどの強烈な熱の力が——、灼熱の熔岩、燃え盛る太陽に匹敵するような、とてつもない高温が

必要だったのです——。そこで、われわれの祖先は精霊ルビスの啓示を受け、ホビット族の鍛治屋たちの協力を得て造りあげたのが、あの満月の塔なのです——。ご存じのように、人は潮が満ちるときに生まれ、潮がひくときにその生涯を終えまする——。そして、大洋のうねり、海の干満の原動力となっておるのは、月の満ち欠けなのです——。あの塔のなかがどのような構造で、どのような原理で作動するのか、わたしどもには知る術もございません——。ただ——分かっておるのは、この塔が月の持つ強大な力を集め、それを熱に変えることができるということです——。人間が創り出すどのような炎にも溶けない神秘の鉱石も、この塔から出される熱をあてれば、まるで蜜蠟のように自在に形を変えることができるのですよ——。しかし——、四〇年前、水門の鍵を盗まれ、その満月の塔の熱気を防ぐために造られた隧道と運河の水門が閉じられてしまった——。と、同時に、自動的に、満月の塔も働きをやめてしまったのです——。水門が開き、村人が熱気から完全に隔てられないかぎり、塔は始動しないように造られておったのですよ——。それにしてもよかった——。あなたたちのお陰ですよ——。この四〇年間、われわれは神々の武器ひとつ造れず、困っておりました——。もし永久に鍵が戻らなかったら——そう思うとたまりませんでしたよ——。われわれの祖先がずっと気の遠くなるほどの長い間、精霊ルビスのお言葉を、精霊ルビスが与えてくれた使命を守ってきたのに、わたしたちの代で途切れてしまうところだったんですからね——」

長老が話し終えたとき、小舟は島の満月の塔に接近していた。

島は、深い枯れ草におおわれていた。三人は、若者二人を小舟に残して上陸すると、その枯れ草を掻き分けながら満月の塔にむかった。

「あの最上階に、月のかけらがあります――。この満月の塔の装置を作動させるには、その月のかけらに月光を浴びせなければならないのです――」

途中、長老は満月の塔を見あげながらいった。

満月の塔は、風の塔やドラゴンの角の塔と同じように、何百万という気の遠くなるような石を積み重ねて造られていた。

三人は、入口のすぐ右側にある長い階段をのぼった。

風の塔やドラゴンの角の塔と違い、階段をのぼると、その先が通路になっていて、二〇歩ほど先にすぐ上にのぼる階段があった。

階段と通路の左側は厚い石壁に遮られていて、そのなかがどのような構造になっているのか、想像すらつかなかった。

三階の階段をのぼったときだった。突然、異様な腐敗臭が鼻をついた。

「くそっ、やつらだっ！」

コナンは、そう叫んで鼻と口を押さえた。

案の定、待ちかまえていたのは三匹の腐った死体だった。腐敗臭を振りまきながら、魔物は階段からじっとこちらの様子をうかがっていた。アレンとコナンは長老を通路の隅に残すと、腐っ

た死体に接近した。悪臭はいよいよひどくなり、二人とも手で鼻と口を押さえねばならないほどだった。通路は二尋ほどの広さしかなく、上へ行くにはどうしても魔物を倒さねばならなかった。

「グワーッ！」

腐った死体は叫び声をあげると、いきなり飛びかかって来た。

「たーっ！」

すかさずコナンが印を結んで、ギラの呪文を唱えた。

火炎は狭い階段を吹き抜け、魔物の体が炎につつまれた。同時にアレンが剣を構えて突進した。目にもとまらぬ早業で左右の二匹を切り捨てると、そのまま正面をひと突きにした。

ブシュッ！　体液が飛び散り、強烈な臭気に目がひりひり痛んだ。

仰向けに倒れた三匹目の魔物を飛び越え、アレンは階段を駆けあがった。

「長老早く！」

コナンは、すさまじい戦いに呆然としている長老の手を引き、アレンにつづいた。

さらに上の階にすすむと、天井の暗がりで何かが光った。

見あげると人間の頭ほどもある巨大な眼球が、じっと三人を見おろしていた。

ヌラヌラした本体から、まるで動物の腸のような触手が無数に生え、そしてその一本、一本がアレンたちを招き寄せるようにぶきみにうごめいているのだ。

廃墟や洞窟などの暗がりに棲む魔物、悪魔の目玉だ。
「このやろーっ！」
コナンがまたギラの呪文をかけた。
強烈な衝撃と火炎が、悪魔の目玉を捕らえた。
「やーっ！」
たまらずに天井から落ちてきた魔物を、アレンは一刀のもとに両断した。
上の階にすすめばすすむほど魔物の数は増えていった。腐った死体の同族であるグールや、すばやいはぐれメタル、そしてあのゴールドオークなどがつぎつぎと襲ってきた。
だが、アレンとコナンは長老を守りながらも、魔物たちを片っ端から倒していった。
そして、やっと最上階の七階にたどり着いて、
「あーっ？」
アレンとコナンが、目を見張った。
七階は大きな部屋になっていた。その中央に、ひとかかえもある大きな半球形の石があった。
高さは、アレンの腰ぐらいまである。
青みがかった半透明の、神秘的な美しい石だ。
アレンとコナンが、誘われるようにその美しい石に近づいた。
そのとき、四方の窓から怪鳥の群れが突入してきたのだ。

「うわあっ！」
すばやく身をかわしたコナンは長老の手を引くと部屋の隅に移動し、アレンは剣を構えて魔物の中央に突っこんだ。
入って来たのはガーゴイル、バピラス、ホークマンの混成部隊でその数は合わせて二〇匹ほどだった。
ここへ来るまでの各階で、アレンたちは無数の魔物を倒してきた。そして魔物たちの血の臭気がさらに別の敵を引き寄せたのだ。
コナンは長老をかばいながらつづけざまにギラの呪文を唱えた。目の前に迫った数匹のガーゴイルが、たちまち炎につつまれ落下した。
そして七匹目のガーゴイルが床に落ちたとき、アレンのまわりには一〇匹以上の魔物の死体が転がっていた。
アレンとコナンは、長老の無事をたしかめると、ふたたび美しい石を見た。
二人には、この石は満月の塔の芯のように思われた。七階の床に顔を出しているのは、その芯の先端で、芯は塔のなかを貫き、地底にまでつづいているのではと思われた。
その石のてっぺんに、手のひらほどの大きさの、丸い平らな鏡が埋めこまれていた。
「これが、月のかけらです——」
長老が、いった。

「これが――?」
アレンとコナンは、その美しさに息をのんだ。
深い翠の海のように透き通った美しい鏡だ。
その鏡のなかに、金色の満月の像が光沢を帯びて浮かびあがっている。
「伝説では、文字通り月の石だとされ、母体である月との親和力により、潮の干満を操る力を持つとされております――」
そういうと長老は部屋の隅に行き、天井からさがっている長い鎖を引いた。
ギギーッ。錆びた金属が擦れ合う音がした。と、同時に半球形の石の真上にあった天窓が開き始めたのだ。石と同じくらいの大きさの丸い天窓が開き終わると、夜空には満月が顔を見せていた。
天窓が開くのを待っていたかのように、満月の光が月のかけらを照らした。
光はだんだんと強くなり、まるで滝のように月のかけらに降り注いだ。
流れ落ちる光は三人の体を金色に染め、部屋全体が月の光に満たされた。
その光から滝のようないきおいが消えると、突然、ピカーッ――と、月のかけらが目のくらむようなまばゆい光を放ったのだ。数百、いや数千の稲光が一斉に光ったよりもさらに強烈なすさまじい光だった。
「うわあっ!」

一瞬アレンとコナンの体が宙に浮き、数歩後ろまで吹き飛んだ。
爆発(ばくはつ)したのかと思うほどの、はげしい衝撃波を感じたのだ。
まぶし過ぎて、とても目を開けていられる状態ではなかった。
満月の塔の最上階から発した光は、はるか上空を、さらには広大な湖の一帯を、まるでま昼のように明るく照らした。
はるかかなたの異国からでも見えるのではないか思われるほどの大規模なものだった。
だが、やがてその光が消えると、青みがかった半透明の美しい石が、見る見るうちにまっ赤な灼熱の太陽の色に変わったのだ。
すると、満月の塔が、かすかに振動を始めた。
「お陰さまで、満月の塔が、昔のように動き始めました――」
長老は、ほっと肩で息をつくと、嬉(うれ)しそうに微笑(ほほえ)んだ
「これで、われわれも昔の生活に戻れます――。この満月の塔が造り出す熱が、特殊な回路を通って、湖底から隧道(トンネル)をへて村の運河へと流れていき、それぞれの作業場に送られるのです――」
長老は、そういうと、月のかけらに手を乗せて、なにやら無心に呪文を唱えた。
すると、石に埋めこんであった月のかけらが音もなく外れた。
石の表面は埋めこんであった跡もなく、美しい光沢を放っていた。
アレンとコナンは、驚いて見ていた。

「テパの村の血をひく者のみが、自由に取り外しできるのですよ――」
長老は、そういって微笑むと、
「一旦動いてしまえば、この月のかけらがなくても大丈夫――。どうか、これを持って行き、王女を助け、邪神の像を手に入れてくださいませ――」
丁重に月のかけらをアレンに手渡した。
そのとき、窓際でヒューッ――と、風が鳴った。アレンが、はっと見て、
「あっ？」
思わず目を疑った。
「き、貴様っ？」
窓の手すりに、ガルドが悠然と立っていたのだ。
口許に笑みを浮かべ、冷たい目でじっとアレンを見ていたのだ。
「セリアはどうしたっ？　セリアを返せーっ！」
コナンが叫んで、頭上で印を結んだ。
と、同時に、アレンが剣を抜いて疾風のように突進した。
「たーっ！」
アレンの剣が唸りをあげた。
切っ先がガルドの頬をかすめ、風圧に長い髪が揺れた。

つぎの瞬間、ガルドの長身はアレンの前から消え、振りむいたときには反対の窓側に平然と立っていた。
「王女なら無事だ――」
ガルドはそういってニヤッと笑った。
「どこだ？　セリアはどこにいるんだ!?」
コナンが印を結びながら詰め寄った。アレンも剣を構えゆっくりと間合いを計った。
ガルドはそんな二人を無視して、クルリと窓の方をむいた。
「助けたければ海底洞窟へ来るんだな、邪神の像が隠された――」
ガルドは独り言のようにいった。
「こいつー！」
コナンが右手を突き出しベギラマの呪文を唱え、アレンも同時に跳躍した。
しかし、強烈な電撃は何もない空間を焦がしただけで窓から塔の外へと消え、アレンの剣もむなしく空を斬っただけだった。
「王女を助けたくばこの場所へ来い、待ってるぞ！」
どこからともなくガルドの声が響いた。
そして、あ然としている二人の頭上で一枚の紙片がヒラヒラと舞っていた。
「ちっきしょーっ！」

アレンは、宙に舞う紙を握りつぶすようにつかんだ。
その紙は、ロンダルキア大陸の東海の海図だった。
そのほぼ中央の一点に、邪神の像のありかを示す×印がついていた——。

ドン・モハメが孫と工場に閉じこもってから、すでに四日がたっていた。
昼も夜も、機を織る音が絶えることがなかった。
その間、アレンとコナンの二人は、ドン・モハメの家にある工場の扉の前で、水の羽衣が完成するのをじっと待っていた。
なぜ、ガルドが邪神の像のありかを教えたのか——？
一体、ガルドはなにを企んでいるのか——？
満月の塔から戻ってきて二人は、いろいろ考えた。
ハーゴンたちにとっても、邪神の像を手に入れるためには、水の羽衣が必要なのだ。
それなのに、ガルドはもうじき完成する水の羽衣に、見むきもせず、わざわざ邪神の像のありかを教えて消えたのだ。
それとも、水の羽衣は必要ないのだろうか——？
だとしたら、どうして未だに邪神の像を手に入れてないのだろうか——？
いくら考えても、二人にはガルドの企みを測れなかった。

とにかく、セリアの居所がわからない以上、水の羽衣が完成したら、邪神の像のありかにむかうしかないのだ。

だが、セリアが無事だと聞いてほっとした。それが、二人を元気づけた。

そして、五日目の明け方——。

二人が壁にもたれながら、うとうとしかけたときだった。

表の扉を叩く音がして出てみると、長老とガナルが立っていた。

「ガナル?」

アレンとコナンが叫んだ。

「川がつながったんで来てみたんでさあ——」

ガナルはそういって笑った。

ガナルは長老の家を訪ねて、ドン・モハメの家に案内してもらったのだ。

外は霧が深かった。霧にかすむ運河のむこうに、止水塔のそばに停泊しているラーミア号の帆柱が見えた。そのときだった。

「できたっ!」

と、ドン・モハメの孫の声がして、工場の扉がいきおいよく開いた。

アレンたちは、思わず工場に飛びこんだ。

聖なる織り機はすでに、もとの黒々とした手織り機に姿を変えていた。

ドン・モハメの目は、まっ赤に充血し、頰はさらにこけていた。
だが、その顔には仕事をやり遂げたあとの満足感があった。
「さあ、見てくだされ――」
ドン・モハメは、織りあがったばかりの水の羽衣を広げた。
半透明で薄水色の、気品にあふれた美しい羽衣だった。
袖口から背中にかけてのゆったりとしたふくらみは、鳥の翼を連想させ、幾重にも重ねられた裾は、波と飛沫を連想させた。
「この水の羽衣を身にまとえば、どんな炎や高熱からも身を守ることができますのじゃ――。たとえ、それが灼熱の熔岩であったとしても――」
そういってドン・モハメは水の羽衣をアレンに手渡した。
「ありがとう――」
アレンは、心から感謝した。
水の羽衣は、空気のように軽く、絹よりもなめらかだった。

5 策謀

「なにっ？　まだやつの行方がわからぬだとっ？」

大神官ハーゴンの近衛司令官ベリアルは、目の前に跪いている連隊長のバズズやアトラスやアークデーモンを見おろしながら、露骨に不快な顔をして舌打ちをした。
その顔を見て、バズズたちは黙ってうなだれた。
この日、ベリアルはハーゴンに中間報告をする約束になっていたのだ。
だが、バズズたちから一向に報告がないのに業を煮やしたベリアルが、ハーゴンの神殿にある自分の部屋に、バズズたちを呼びつけたのだ。
いつもは冷静なベリアルも、このときばかりは苛立っていた。
ベリアルは、バズズたちをにらみつけると、肩で大きく溜息をついて、
「それにしても、なにを考えておるのだ、あのガルドはっ――。なにが欲しくて王女を隠しておるのだっ――」
と、忌ま忌ましそうに吐き捨てた。そして、怖い目で宙をじっとにらみつけて、つぶやいた。
「まさかあやつ――邪神の像を――」
「そんなバカなっ」
すかさずバズズがいった。
「やつが邪神の像を手に入れてどうするのです？　きっと、悪魔神官が報酬をしぶったんじゃないですか？　それで仲間割れを起こしたんですよ。いかにも愚かな人間どもがやりそうなことよ。のお、アトラスどの。はっははは」

バズズは、隣のアトラスと顔を見合わせて笑った。
「バズズッ——！」
ベリアルは、笑い声を遮るように声を荒げた。
「はっ——」
バズズたちの顔から笑いが消えた。
「水の羽衣の方はどうなっておるのじゃっ？」
「そ、それはその——」
とたんに、バズズは口ごもった。
「ロトとアレフの血をひく者どもが手に入れてから、奪い取った方が手間が省けると思いまして——」
「ばか者っ！」
ベリアルは、鋭い声で一喝した。
「呑気なことをいっておるときではないっ！」
「はっ——。申しわけございませぬ——」
思わずバズズたちはひれ伏した。
「急がねば大神官さまは待ってはくれぬぞっ！　わしを悪魔神官の二の舞にさせるつもりかっ？手分けしてガルドを捜せいっ！　水の羽衣もなっ！」

そのときだった。どこからともなく、
「ふっふふふふ――」
ぶきみな笑い声が響き渡った。
「うっ？　な、何者だっ？」
ベリアルたちは、思わず立ちあがって洞窟のあたりを見回した。
「その必要はない――」
そういいながら、すーっと若い男が姿を現した。ガルドだ。
「き、貴様っ？」
バズズたちは思わず身構えた。
「いいことを教えてやろう――」
ガルドは、にやりと笑った。
「ロトとアレフの血をひく者どもが、水の羽衣を手に入れて、邪神の像のありかにむかっている――」
「な、なにっ!?」
さすがのベリアルたちも顔色を変えた。だが、
「所詮(しょせん)、無駄(むだ)なことよっ！」
すかさずバズズがいった。

「いくらそやつらが邪神の像のありかにむかっても、あの海底洞窟には入ることはできぬのだからなっ！」
「それが、入る方法を手に入れたのさ——」
「な、なんだとっ⁉　うそじゃなかろうなっ⁉」
「ふっふふふ。単純な魔物どもにうそをついてどうなる——」
「お、おのれっ！　人間の分際でっ！」
バズズは怒り（いか）に震え（ふる）て飛びかかった。
鋭い爪が唸りをあげ、魔物の巨体（きょたい）がガルドに迫った。
が、爪も牙（きば）も空を切り裂いただけだった。
すでにそこからガルドの姿は消えていたのだ。
「うっ？　く、くそっ！　小癪（こしゃく）なっ！」
バズズは、慌ててガルドの姿を捜した。
だが、二度とガルドは姿を現さなかった。
「バズズよっ！」
ベリアルが、鋭い目でいった。
「ガルドのやつがなにを企んでおるかわからぬが、おそらくやつも邪神の像のありかに行くはずっ！　やつが王女をだれにも渡していなければなっ！　そして、そこにロトとアレフの血をひく

者どもが水の羽衣を持って行く！」

「わかりました！　ここはこのわしにお任せくだされっ！」

バズズは、怒りに震えながら答えた。

「必ずや、王女と水の羽衣を奪い、邪神の像を持って帰りましょうぞっ！」

第八章　邪神の像

長老やドン・モハメ、村人たちに見送られテパ川をくだったラーミア号は、一〇日後、海の峡谷から波の荒い外洋に出た。
そして、斬り立った断崖絶壁と険しいロンダルキア山脈を左に見ながら、海岸線にそって南東へとむかった。
日増しに寒くなり、天候が悪くなった。冷たい雨のつづく日もあれば、雪の降る日もあった。海の荒れる日も多くなった。冬が駆け足でやってきたのだ。
途中、ペルポイの港に寄港し、水門を開けたことをラゴスに知らせ、食糧と水を補給すると、ラーミア号はふたたび南東へむかった。
ロンダルキア大陸の南の半島を過ぎると、ラーミア号は北に針路を変えて、ロンダルキア大陸とデルコンダル島の中間点を目指した。
そして、テパの村を出航してから七〇日目、ラーミア号は、ガルドが置き去った海図に印されている×印の近くまで来ていた。

暦は竜の月から、寒さの一番厳しい王の月に変わっていた。

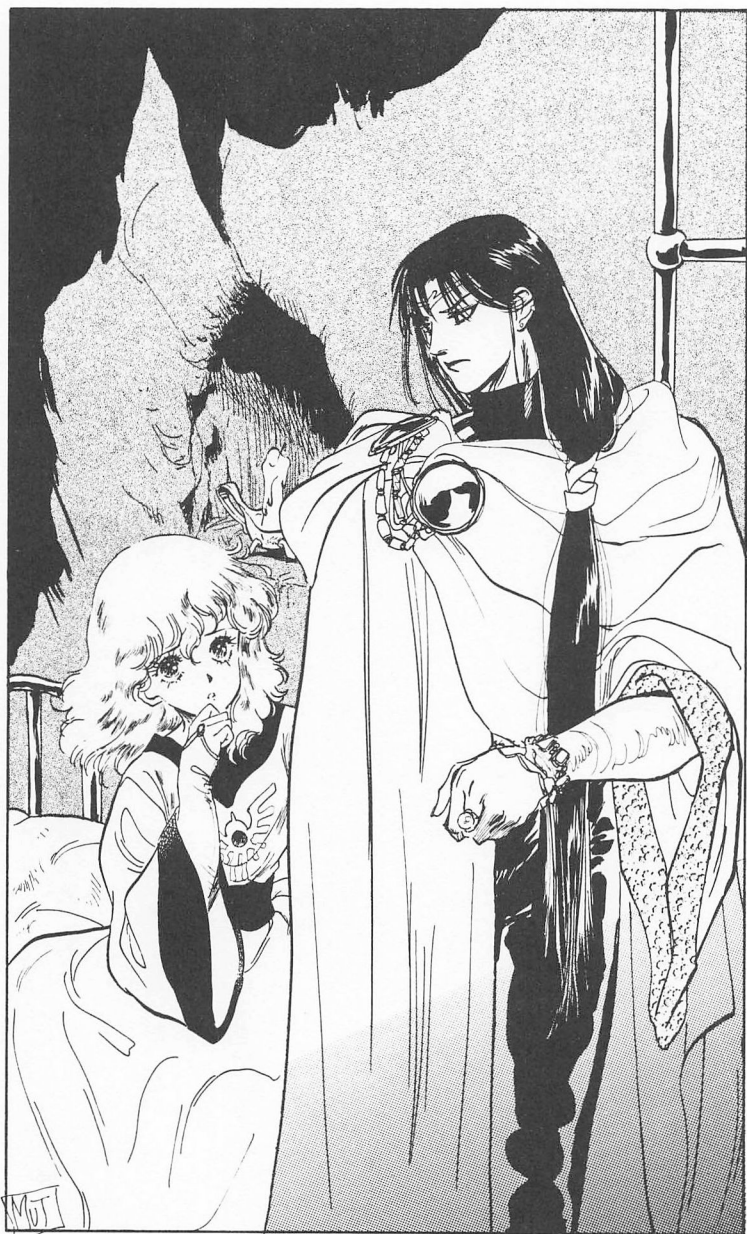
1　動揺

洞窟の窓の外を、静かに粉雪が舞っていた。
昼なら、ときおり岩に砕け散る波の音にまじって、海鳥の鳴き声が聞こえてくるが、夜になると波の音だけになる。
その波の音にまじって、澄んだ美しい笛の音が聞こえてきた。
洞窟のなかで、ベッドに腰をかけながら窓の外の粉雪を見つめていたセリアは、はっとして窓に顔を近づけた。
以前、海に突き出た岩に腰かけてガルドが笛を吹いていたことがあったからだ。
ガルドの姿はなかったが、すぐそばで吹いていることだけはたしかだった。
セリアは、ガルドが敵であることも忘れて、心にしみる美しい音色をじっと聞いた。
この洞窟に閉じこめられてからすでに二〇〇日、大灯台でさらわれてからかれこれ一年近くになろうとしていた。
その間、セリアがガルドの笛の音を聞いたのは、今夜で三度目だった。
最初は、アレンたちがこの洞窟の東方にあるデルコンダル島まで来ているとガルドに聞かされ

たときだった。
二度目は、九〇日ほど前の月の夜だった。そのときは、今夜と同じように、セリアの前に姿を見せず、笛の音だけが聞こえてきたのだ。
そのたびに、セリアはやさしい両親の顔と愛しいアレンの顔を思い浮かべた。
セリアには、ガルドに聞きたいと思っていたことが二つあった。笛と指輪のことだ。
だが、あれ以来一度もセリアの前に姿を現さなかった。
そして、今度ガルドが目の前に現れるときは、ガルドが水の羽衣と月のかけらを手に入れたときではないかと、密かに恐れていたのだ。
やがて、静かに笛の音がやみ、セリアは溜息をついてベッドに腰をおろした。
いつの間にか、また両親やアレンのことを思い出して、涙を滲ませていた。
顔を伏せて、瞼をそっと指で拭いたときだった。すぐそばで風が巻く気配を感じ、ふと顔をあげて、
「あっ？」
思わず息をのんで、脅えながら後ろの壁に身を寄せた。
ちょうどガルドが目の前にすーっと姿を現したのだ。左手に、さっきまで吹いていた銀の横笛を持っていた。ガルドは、冷たい目でセリアにいった。
「明朝、ここを発つ――」

セリアが恐れていたことが的中したのだ。
「や、やっぱり――」
セリアは、怖い瞳で必死にガルドをにらみつけた。
「アレンたちはどうしてるのっ？　どこにいるのっ？」
「あの二人なら、邪神の像のありかへむかっている――。水の羽衣と月のかけらを手に入れてな――」
「えっ？　アレンたちがっ？」
セリアは、驚いた。一瞬自分の耳を疑ったのだ。だが、
「そ、それじゃ、アレンたちから水の羽衣と月のかけらを奪うつもりなのね!?」
セリアは、さらに怖い瞳でガルドをにらんだ。
「ま、そういうことだな。さすがにものわかりがはやい――」
そういうと、ガルドの姿がすーっと消えかけた。
「待って！」
セリアは、大声で叫んだ。
「――？」
ガルドの姿がもとに戻った。
セリアは、ガルドの左手に持っている銀の横笛と、指にはめてある美しい白玉の指輪をじっと

見つめた。
「その笛――どこで手に入れたのっ!?」
「この笛か――」
ガルドは、笛を見た。そして、おもむろに答えた。
「生まれたときから持っていたのさ――」
「生まれたときから!?　じゃあ、あなたガルチラの子孫なのね!?　そうなんでしょ!?」
「ガルチラ――?」
「かつて勇者アレフと一緒に旅をした剣の達人よ！　風の国を建国した人よ！」
ガルドは、怪訝な顔をした。
「知らないな、そんな男――」
「そ、そんな――」
セリアは、風の塔の魔女に聞いたガルチラの話をした。
風の国に恐ろしい悪性の疫病が流行したとき、ガルチラが肌身離さなかったという銀の横笛を、若い王妃と王子に託して、二人を安全な地に送ったという話を――。
「魔女はいったわ！　もし子孫が生きのびていれば、きっと銀の横笛を持ってるはずだって！」
「ふっ――。関係ないな、そんな話――」
「じゃあ、風の塔に行ってみてよ！　魔女に話を聞いてみてよ！　それから――！」

セリアは、ガルドの左手の白玉の指輪を見た。
「その指輪、祈りの指輪でしょ⁉」
「な、なにっ——？」
ガルドの目に、一瞬驚きの色がはしった。
「どうして知ってるっ？」
とたんに、ガルドは顔色を変えた。
「昔、聞いたことがあるの。その祈りの指輪はとてつもない呪文を引き出す力を持っているって！　その指輪を一度使うと、その魅力に取りつかれてやめられなくなるって！　そして、いずれその者の命をも奪ってしまう残酷な悪魔の指輪だって！　あなたが一瞬にして遠い場所に移動できるのは、その指輪があるからなのよ！　そうでしょ⁉　いずれあなたはその指輪に命の精を奪われて死ぬんだわ！」
「黙れっ！」
ガルドは、そう叫ぶと、いきなりセリアの襟元を乱暴につかんだ。
セリアは、驚いてガルドを見た。冷徹非情なガルドが、こんなことで激昂するとは思いもよらなかったからだ。ガルドは、すさまじい形相でセリアをにらみつけていた。だが、セリアの表情に気づいてはっと我にかえると、おもむろに手を離した。
ど、どういうことだ——？　ガルドは、心のなかで叫んだ。

ガルドは、自分自身にとまどっていた。今の自分の行動が信じられなかったからだ。今までどんな敵と対峙したときでも、怒りこそ覚えても、常に冷静沈着だった。
「ね、ねえ――」
恐ろしい顔で呆然としているガルドを見て、いおうかどうかセリアは一瞬ためらった。だが、思いきっていった。
「どうして⁉　どうしてハーゴンのためにその指輪を使うの⁉　ハーゴンのために命を捨てるつもりなの⁉」
「お、おれは――」
ガルドは、セリアから目をそらすと、
「ハーゴンのためにやっているのではない――」
感情を押し殺していった。
「えっ？」
「自分のために邪神の像が欲しいだけだ――」
「ど、どういうこと――？」
だが、ガルドは答えようとはしなかった。
ガルドは孤児だった。嬰児のまま道に捨てられていたのだ。

だが、運よく通りがかりの旅の老魔道士に拾われた。
最初、老魔道士はそのまま通り過ぎようとしたが、産着にはさんであった銀の横笛が目にとまったのだ。
また、嬰児の顔には、ただならぬ相が出ていた。その相を見て、いずれは大変な魔力を持つであろうと老魔道士は直感したのだ。
さらに驚いたことに、嬰児の紅葉のような手に、噂で聞いたことのある祈りの指輪がしっかりと握られていたのだ。
老魔道士は、迷うことなくこの嬰児を育てることにしたのだ。
その老魔道士が、ガルドが六歳のとき病に倒れると、ガルドを拾ったときの話を打ち明け、「その祈りの指輪は、とてつもない魔力を引き出す力を持っておる——。だが、同時に、使う者の命の精を吸い取る——。どんなことがあろうとその指輪に頼ってはならぬ——」と、いい残して死んだのだ。
それ以後、ガルドはひとりで生きてきた。
だが、十五、六歳のころには、すっかり祈りの指輪の魔力の虜になっていたのだ。
ガルドの強靱な肉体と生命力は、祈りの指輪によって想像以上の魔力を引き出すことはあれ、命の精を吸われることはなかった。少なくとも、ガルドはそう思っていた。
ところが、十八歳のとき、デルコンダルの町で、一〇〇歳になるという旅の女魔道士がガルド

を呼びとめて、「数年のうちに、おまえの命の精がその祈りの指輪に吸い取られて死ぬであろう――」と、予言したのだ。「万にひとつ、奇跡的に生きのびることがあるとすれば、それはその祈りの指輪が効力を失い、ただの石になるときであろう――」と。
ガルドは、そのとき、生まれて初めて死の影に脅えた。
と、同時に、永遠の魔力をなんとしても手に入れたいと思ったのだ。

「それより――」
ガルドは、セリアを見た。
「どうしておれにかまう――。おれがどうなろうと、おまえには関係ないことだ――」
「そ、それは――笛よ――」
「笛――？」
「あなたの美しい音色よ――。あなたの笛の音には、不思議な力があるわ――。きっとそれは、あなたの血のなせる業――」
「血――？」
「あなたの体には、きっと――」
セリアは、ガルチラの血が流れているのよ――と、いおうとしてやめた。そして、
「悪魔に魂を売るような――そんな血じゃないわ――。笛の音を聞いていればわかるわ――。そ

んな人じゃないって――」
セリアは、じっとガルドを見つめた。
ガルドも、セリアを見つめていた。だが、ふっと恥じらうように目をそらした。
「ねえ、短剣を返して――」
セリアは、船底で取りあげられた護身用の短剣のことをいった。
「短剣――?」
ガルドは、怪訝な顔をした。
ガルドがセリアから短剣を取りあげたのは、セリアが自決することを恐れたからだ。最後の手段として、セリアが邪神の像を手に入れることを拒んで、自らの命を絶つことだって考えられたからだ。邪神の像を手に入れる前にセリアが死んだら、それこそすべてが終わりなのだ。
「あなたが心配するようなばかな真似はしないわ。大事な思い出の品なの――」
ガルドは、真意を測りかねてじっとセリアを見た。
だが、なにも答えずに、すーっと姿を消してしまった。

2　海底洞窟

X海域――ガルドが海図に残した邪神の像のありかを示す×印の一帯を、アレンとコナンはそ

う呼んでいた。

ラーミア号がこの海域に入ると、とたんに天気が猫の目のように変化した。

もともと冬の海は変わりやすい。だが、この海域の天候は異常だった。雪が降ったかと思えば、急に日が差し、にわかにかき曇ると、すさまじい稲光が空を斬り裂いた。風は、身を斬るように冷たかった。

アレンたちは、三人目の魔女がいった「巨大な岩の洞窟」を必死に捜した。

まだ、ひょっとしたらセリアがその洞窟にいるかも知れないとも思ったのだ。

だが、丸一日捜しても、発見できなかった。見渡すかぎり水平線がつづいていた。

「騙されたんじゃねえかっ！　くそっ！」

一日中船首で望遠鏡を見ていたコナンが、腹を立てて帆柱を蹴った。

夕方になると、また雲行きが怪しくなった。何層もの赤みがかったぶきみな雲が、恐ろしいいきおいで西へ流れていた。

日が暮れ、夜の闇がすっぽりと海域をおおうと、空と海の区別すらつかなかった。

ラーミア号は、わずかな船の明かりを頼りに、ゆっくりと周回した。

「どうする？　これじゃなんにも見えないぜ」

船首からアレンとガナルがいる船尾の甲板に戻って来てコナンがいうと、

「下で温かいものでも飲んで、休んでてくだせえ」

と、ガナルがいった。
操舵をガナルに任せて、アレンとコナンが下の甲板におり、船室へむかおうとしたときだった。
突然、すーっと上空が明るくなったのだ。
二人が、驚いて見あげると、ちょうど東の空の雲の切れ間に満月が顔を出したのだ。
そのときだった。
「み、見てくだせえっ！」
ガナルが大声をあげて、船首の先の水平線を指さした。
月の光が、海上を美しく照らしている。そのむこうの水平線に、白い炎のようなものがボーッとかすんで見えた。
アレンは、急いでコナンから望遠鏡を奪って見た。
白い炎のようなものの正体はよくわからなかったが、その中央に親指のようにそそり立っているぶきみな岩影が見えた。
「あれだっ！　きっとあの岩に洞窟があるんだ！」
アレンは、思わず叫んだ。
ラーミア号は速度をあげ、岩影にむかって前進した。
親指のような奇怪な島の形が肉眼ではっきり見えるところまで近づくと、三人は思わず目の前の光景に息をのんだ。

白い炎のように見えたものは、泡を立てながら沸騰している海流の湯気だった。

波に隠れた岩礁の群と沸騰した海流が、奇怪な岩の周囲を広範囲におおっていた。

岩礁の海底から噴き出した熔岩の熱が、海流を沸騰させているのだ。

まさに、ザハンの盲目の魔女がいった、邪神に呪われた岩礁と海流だった。

ラーミア号は、岩礁の手前で停泊するしかなかった。

ラーミア号から奇怪な岩までは、まだかなりの距離があった。

奇怪な岩をおおっている岩礁の広さは、その岩を町の中心にそびえる大聖堂の塔にたとえると、ちょうどローレシアの町やルプガナの町の城壁ぐらいの広さがあった。

アレンは、ザハンの魔女がいった『岩に渡るためには、月のかけらの力を借りて、岩礁と海流の邪神の呪いを、清らかな潮でおおい流してしまえば渡ることができる――』という言葉と、満月の塔でテパの長老がいった『伝説では、文字通り月の石だとされ、母体である月との親和力により、潮の干満を操る力を持つ――』という言葉を思い出しながら、船室から持って来た、深い翠に透き通った美しい月のかけらを、上空の満月にかざした。そして、

『月のかけらよ――！　清らかな潮で、邪神の呪いをおおい流したまえ――！』

と、心のなかで祈った。

すると、満月の光を浴びた月のかけらが、突然、ピカーッ――と目のくらむようなまばゆい光を放ったのだ。数百、いや数千の稲光が一斉に光ったよりもさらに強烈な光だった。満月の塔で、

月のかけらが放った光と同じ光だ。
アレンは、全身にはげしい衝撃波を受けて一瞬吹き飛ばされそうになったが、必死に月のかけらをかざしつづけた。
月のかけらから発した光は、はるか上空から、見渡すかぎりの遠くかなたの海上まで、ま昼のように明るく照らした。
やがて、その光が消えると、ゴオオオオッ——地鳴りのような轟音が四方の水平線から聞こえてきた。
そして、その音がさらに大きくなって、どんどん近づいてきた。
ゴオオオオオオッ——耳をつんざくようなすさまじい轟音が、すぐそばまできた。
とたんに、ラーミア号がはげしく揺れながら宙に持ちあがった。
「うわあっ！」
アレンは、慌てて甲板の手すりにしがみついた。
すると、目の前の奇怪な岩がどんどんどんどん沈み始めたのだ。
アレンたちは、必死に手すりにつかまりながら呆然と見ていた。
だが、沈んでいくように見えたのは目の錯覚だった。
はるか遠くの小さな波のうねりが徐々に速度をあげ、大きなうねりになり、巨大な怒濤となって岩礁に囲まれた奇怪な岩にむかってきたのだ。

その怒濤が岩礁の手前で頂点に達したとき、ラーミア号が宙に大きく持ちあげられたのだ。
四方から押し寄せた大波は、小山のように盛りあがると岩礁を襲った。
それはまるで牙をむいた野獣のようだった。
横波を受けたラーミア号は大きく傾き、そのまま波頭に乗って空中に浮きあがった。
前後左右から、波は途切れることなく襲ってきた。
「うわあっ！」
アレンは必死に手すりにしがみついた。
やがて、大きな揺れが収まると、ラーミア号は奇怪な岩のすぐ目と鼻の先にいた。
そして、その岩の三分の一が海中に沈み、岩を取り囲んでいた岩礁の群も沸騰した海流も姿を消し、穏やかな波に変わっていたのだ。
アレンたちは、しばらくの間、呆然として見回していた。
奇怪な岩に、大きな洞窟の入口があり、その入口のところがちょうど桟橋のような地形になっていた。
そこにラーミア号を寄せると、アレンとコナンはガナルを残し、たいまつをかざしながら洞窟の奥へと入って行った。
すると、正面に下へおりる長い階段があった。
この階段をおりると、下は迷路のように複雑に入り組み、ところどころ岩肌が崩れ落ちていた。

まるで、廃鉱の坑道のような洞窟だった。
さらに奥にすすんだときだった。前方から、ボコッ、ボコッ、ボコッ——と、ぶきみな音が聞こえてきた。角を曲がって、思わず立ちどまった。
恐ろしいまっ赤な熔岩の川が、泡を弾きながらゆったりと流れていたのだ。
ギーン！　突然、ぶきみな金属音が響き、アレンはまっ赤な光に照らされていた。
目の前には、見たこともないひとつ目の魔物が立ちふさがっていた。
光はその魔物の目玉が発していたのだ。
大きな樽ほどもある胴体からは、昆虫のような節のある四本の足が生え、表面は鏡のようになめらかだった。手には幅広の巨大な剣を握っていた。
「なんだ、こいつは？」
アレンは初めて見る敵に剣を構え直すと慎重に接近した。怪物はときおりキリキリという低い金属音を立てるだけで、まったく無言のまま立ちつくしていた。
何の殺気も感じられないのが一層ぶきみだ。
「オレに任せろよ！」
相手の出方をうかがっていたアレンを押し退けるように前に出たコナンが呪文を唱えた。
ギラの火球が胸を直撃し白い火花が散った。
つぎの瞬間、怪物はいきなり手にした剣を振りかざして二人に襲いかかってきた。

信じられないほどの早業だ。

アレンは敵の第一撃をかわすと、ひとつ目の中心にむかって鋭い突きを入れた。

ビキーン！　切っ先がまっ赤な目の中心を捕らえ、いいようもない振動がアレンの全身に広がった。怪物の目から赤い光が消え体が硬直した。

つづいて、全身から薄紫色の煙が立ちのぼり怪物の動きがとまった。

バチッバチッ、まるで豆が弾けるような音とともに静止した怪物の目から火の粉が飛び散った。

「どうなってるんだ？」

額の汗を拭いながらコナンが呟いた。

謎の怪物は、それきりピクリとも動かなかった。

二人は、階段を見つけて、さらに下の階におりた。

熔岩は、いたるところでぶきみな音を立てていた。

川のようにゆったりと流れているところもあれば、池のように溜まっているところもあった。

さらに奥へすすんだときだ——。

グオーッ！　背後から聞こえたすさまじい唸り声に、二人は同時に振りむいた。

が、そのときすでに相手の牙は目の前に迫っていた。

「ウワッ」

とっさに左右に避けたアレンたちの頭上を、魔物の巨体が通過した。

艶やかな毛皮に全身がおおわれ、口には大振りの短剣ほどもある二本の牙が光っていた。
魔物はデルコンダルの闘技場でアレンが戦ったキラータイガーだった。
猫族特有のしなやかさで着地した魔物は、ふたたびアレン目がけて飛びかかった。
が、キラータイガーの体は空中でまるで見えない壁にぶつかったかのように静止し、そのままドサリと床に落下した。四肢は凍りついたように固まり凶暴な瞳は焦点を失っていた。コナンがザラキの呪文を使ったのだ。

先へすすむにつれ魔物の襲撃はますますはげしくなった。
ガイコツの魔物、スカルナイトは剣を振りかざし集団で押し寄せてきた。
不定形の怪物、ガストは毒を吐き散らし、群れをなしたドラゴンフライは空中から攻め寄せた。
だが、どの魔物も二人の前進を阻むことはできなかった。
アレンとコナンの通ったあとには、おびただしい数の魔物の死骸が散乱していた。

地下四階へおりたあたりから周囲の気配が変わり始めた。あれほど頻繁に襲ってきた魔物たちがまったく姿を見せなくなったのだ。
そして気温が徐々にあがり始め、二人は煮えたぎる熔岩の川の前に出た。
川には岩でできた橋がかかっており、そのむこう岸に地下五階へおりる階段が見えた。

その階段の前に立っている魔物を目にしたとき、いいようのない戦慄(せんりつ)がアレンの全身を駆(か)け抜(ぬ)けた。冷酷(れいこく)な光をたたえた両目は鬼火(おにび)のように輝き、厚い鱗(うろこ)におおわれた全身には力がみなぎっている。今まで戦ったどの魔物とも異なるすさまじい殺気に、アレンとコナンは背筋が凍るような悪寒(おかん)を感じていた。
魔物は二人の顔を見て、さも嬉(うれ)しそうに笑った。
魔物は、バズズだった。

3　バズズ

「待っておったぞ、ロトとアレフの血をひく者どもよ！」
剣を構えて近づいたアレンたちにバズズは話しかけた。
「おとなしく水の羽衣を渡せ。そうすれば苦しまずに楽にあの世に送ってやろう」
低く、静かな、それでいてゾッとするほどの殺気に満ちた声だった。
アレンは本能的に相手の力量を悟(さと)った。
「何物だ？」
「ふっ！　おまえら人間に名乗る名など持たぬわ！」
コナンの言葉に魔物は馬鹿(ばか)にしたように舌打ちをして答えた。

「そうか、やはりおまえは魔界から来たんだな？」
自分の考えをたしかめるようにたずねるアレンに答えず、バズズの巨体が宙に舞った。
その大きさからは考えられない身軽さだ。
二人はとっさに身をかわした。鋭い爪がアレンの肩とコナンの頬をかすめた。
アレンは、避けながら剣を振るい魔物に斬りつけた。だが、かすりもしなかった。今までの魔物なら必ず手応えがあったはずのアレンの一撃は、何の苦もなくかわされてしまったのだ。
「くそっ！」
アレンは、剣を構え直すと相手をにらみつけた。
「ムーンブルクを襲撃したのはおまえたちかっ!?」
「いかにもっ！　そして、国王と王妃を手にかけたのはこのわしだっ！」
アレンとコナンは、一瞬あ然として顔を見合わせた。
「許さんっ！」
アレンは、一気に跳躍した。
「ファン一〇三世と王妃の敵だっ！」
まっこうから振りおろされた剣をバズズはかろうじてかわした。
ビシッ！　鈍い音とともに数枚の鱗が飛び散った。切っ先が魔物の肩をかすめたのだ。
「おのれ！」

バズズは、怒(いか)りに燃えてアレンにつかみかかろうとした。そのとき、
「たーっ！」
コナンが、印を結んだ手を頭上にかかげて叫んだ。
渾身の力をこめて腕を振りおろすと指先から燃え盛(さか)る火球がほとばしった。宙を飛んだ火球は、バズズの背中に命中し爆発した。だが魔物は一瞬動きをとめただけだった。毒々しい赤褐色(せきかっしょく)の鱗にはほんの少し焦げ跡(あと)が残っていた。
「ちきしょーっ！」
間髪(かんぱつ)を入れずコナンは額の前で印を結び、ザラキの呪文を唱えようとした。
「目ざわりなやつめっ！」
バズズは矛先(ほこさき)を変え、コナンを強襲(きょうしゅう)した。
「うわあっ！」
逃げようとしたコナンは床のくぼみに足を取られて転倒(てんとう)し、その頭上に魔物の鋭い爪が迫った。
が、バズズの爪がコナンを捕らえるより早く、アレンが魔物に斬りかかった。
バズズは持ち前のすばやさで体を反転させると刃先をかわした。そのとき、運悪く魔物の爪がコナンの足をえぐったのだ。
「くっ！――」
コナンは苦痛にうめいた。

「コナン!?」
慌てて駆け寄ろうとしたアレンに、体勢を立て直したバズズが襲いかかった。
アレンは最初の一撃を剣で払いのけ、そのまま床を蹴って跳躍した。
バズズの頭上を越え階段の側に着地した。とたんにアレンの体が大きく傾いた。階段の縁の岩が崩れ落ちたのだ。
「うわあああああっ！」
アレンはそのまま階段を転がり落ちた。骨が軋み激痛が全身を襲った。
地下五階まで落ちたとき、アレンは半ば気を失いかけていた。
気力をふりしぼり何とか体を起こすと、階段を駆けおりてくるコナンとそれを追うバズズの姿が見えた。
「アレン大丈夫か！」
コナンに抱え起こされたアレンの目に、煮えたつ熔岩の川とそこにかかった岩の橋が映った。
橋のむこうには、石でできた一枚の扉が見えている。
かなりの大きさのある扉にはぶきみな絵が描かれていた。
「あの扉のむこうに邪神の像が——？」
やっとのことで立ちあがったアレンが扉を見ながら呟いたとき、バズズが襲ってきた。
呪文をかけようとするコナンを一撃で突き飛ばしバズズはアレンに牙を剝いた。

アレンは必死で体を捻り攻撃をかわした。鋭い爪が空を切り床をえぐった。
バズズは戦いを楽しむように、ゆっくりと近づいてくる。
「フハハハ！　なかなか楽しませてくれるではないかっ」
バズズは残忍な笑みを浮かべると、舌なめずりをした。
そのとき、魔物の背後に回ったコナンの呪文が炸裂した。
バズズの背中を強烈な深紅の衝撃波が襲った。
しかし、バズズはぶきみな笑みを浮かべてコナンを一瞥しただけだった。
ベギラマの呪文もバズズには効果がなかった。
アレンはあっという間に、熔岩の川に追い詰められた。頭のすぐ後ろから、ボコッ、ボコッと熔岩のぶきみな泡を立てる音が聞こえた。
「ふっふっふ！　さあとどめだっ！　死ねっ！」
バズズが、五本の巨大な爪を大きくかざしたとき、
「うりゃあーっ！」
コナンが、一か八かで、自分の剣を思いっきりバズズの背中を目がけて投げつけた。
だが、振りむきざま、バズズはコナンの剣を軽く弾き返したのだ。そのときだった。
「アオッ！」
バズズがのけぞって、カッと大きく目を見開いたのだ。

黒々とした血が、ブシューッ——と、バズズの顔の前に飛んだ。
バズズは、苦しそうに悶えながら、恐ろしい形相でアレンをにらみつけた。
バズズがコナンの剣を弾き返したとき、アレンの剣がバズズの心臓をひと突きにしたのだ。
アレンはやっと立ちあがった。体に力が入らなかった。だが、ありったけの力を振り絞ってバズズに斬りかかった。たちまち、バズズの体の十数カ所からいきおいよく血が噴き出した。
バズズは、たまらずガクッと片膝をついた。そこを、アレンが渾身の力で剣を振りおろした。
ガクンッ——鈍い音が洞窟に響いた。
だが、アレンはひと振りでバズズの首を撥ねることができなかった。
アレンは、バズズの強靱な肉体にあ然とした。すると、
「ガアオオオオーッ！」
すさまじい咆哮をあげながら、血まみれのバズズがよろよろっと立ちあがったのだ。
そして、最後の力を振り絞ってアレンに襲いかかろうとして、一〇本の鋭い爪をかざしたときだった。ブオーッ——突然、まっ白な火炎がいきおいよくバズズをつつみ、鋭い衝撃が襲ったのだ。
「グアオオオーッ！」
バズズは、断末魔の悲鳴をあげ、数歩後ろによろけると、全身を硬直させてはげしく痙攣した。

アレンとコナンは、はっとなった。以前、大灯台でガルドが使った呪文だからだ。
「く、くそ――！　ガ、ガルド――！　う――裏切り者めがっ――！」
バズズはうめくように呟いた。
無念そうに宙をにらんだ両目から、急速に精気が失せていった。大木が倒れるように傾いたバズズは、そのまま熔岩の川に落下した。
灼熱（しゃくねつ）の飛沫（しぶき）が飛び散り、魔物の巨体はゆっくりと沈んでいった。
その直後、ピカーッ――突然、まっ白な光が洞窟をおおった。
その光が消えると、セリアの喉元（のどもと）に剣の刃先（はさき）を突きつけたガルドが姿を現した。

4　宿敵

「セリア！」
アレンとコナンが、同時に叫んだ。
「アレン――」
セリアは、アレンを見つめ、なつかしそうに呟いた。
「ガルドッ！」
アレンは、剣を構えた。

「どういうことだっ⁉　おれたちに加勢するなんて？」
ガルドは、じっと冷たい目でアレンを見つめていった。
「おれはハーゴンのために邪神の像が欲しいのではない――」
「なにっ⁉　どういうことだっ⁉」
「永遠の魔力を手に入れるためだ――」
「永遠の魔力――⁉　それと邪神の像と何の関係があるんだっ⁉」
「魔界の力を得るためだ。そのためには、そこの扉のむこうにある邪神の像がぜひとも必要なのだ。もっともそうなれば、魔物どもも黙っていないだろうがな」
ガルドはそういうと、バズズの落下した熔岩の川に目をやった。
「だから殺れるときに殺っておいたまでだ。さあ、おとなしく水の羽衣を渡せ」
セリアの喉元にピタッと刃先を押しつけた。
「うっ――！」
「さあ、渡せっ！」
「できることなら、人間の血は流したくない――」
「く、くそっ――！」
「アレン――！」
コナンも、どうしたらいいかわからないのだ。

「ちっきしょーっ――」
アレンは、渋々肩にさげている革袋に手をかけた。
「だめっ！」
思わずセリアが叫んだ。
「だめっ！　やめてっ！」
「で、でもセリア――」
「わたしは、わたしはどうなってもかまわないわ。だから絶対に水の羽衣を渡さないで」
「な、なにをいうんだ、セリア!?」
「少なくとも、わたしがいなければ、邪神の像はだれの手にも渡らないのよ！　ハーゴンだって大冥界から大魔神を呼べないわ！」
「もういいっ！」
いきなりガルドが叫んだ。
「こうなったら腕づくでかたをつけた方が早い――」
ガルドが、祈りの指輪をはめた左手を、セリアの胸の前で、力を入れてぐっと握りしめると、指輪の白玉がピカッと小さく光った。
すると、とたんにセリアの全身からすーっと力が抜けて、セリアは気を失ったようにその場に崩れ落ちた。

「な、なにをしたっ⁉」
アレンは思わず叫んだ。
「心配するな。眠らせただけだ――」
「く、くそっ！」
アレンは、剣を握り直して、身構えた。
「――！」
ガルドは、おもむろにアレンの前に出た。
アレンとガルドは、互いに間合いを取りながら、じっとにらみ合った。
コナンは、固唾をのんで見守りながら、そっとセリアの方に行こうとした。
セリアのところに行けば少なくともガルドから守れると思ったのだ。だが、
「寄るなっ！」
ガルドは、アレンをにらんだままコナンに鋭く怒鳴った。
コナンが、思わずピクッとして立ちどまった。
「それ以上近寄ったら、王女がどうなっても知らんぞっ！」
「くそっ――」
コナンが、唇を噛んだ。そのとき、
「たーっ！」

アレンがすさまじいいきおいでガルドに斬りかかった。
同時にガルドも突進する。
二人の体が交錯した――。
甲高い金属音が響き渡り、火花が散った。
互いに位置を入れ換えてにらみ合う二人の前で、数本の髪の毛が宙を舞っていた。
アレンの剣が、わずかだがガルドの頭をかすめたのだ。
「だいぶ腕をあげたな――」
ガルドは、にやりと笑った。
アレンの右腕からすーっと赤い血が流れた。ガルドの剣もアレンをかすめていたのだ。
アレンは、間合いを取りながら聞いた。
「なぜあのとき――なぜテパで水の羽衣を奪おうとしなかったっ!? なぜ、邪神の像のありかを教えたんだっ!?」
「別に他意はない――。いずれにせよ、邪神の像はおれが手に入れる。ただ――」
ガルドは、気を失って倒れているセリアを見やると、
「――邪神の像を手に入れたら、王女を返してやろうと思ったのだ」
「ふっ――。たいした親切心だぜっ!」
アレンは、ふたたび猛然と斬りかかった。

同時に、ガルドも剣をかざして突進した。
はげしく空を斬る音が四度五度——二人は、またすばやく離れた。そのとき、カチャン——と、ガルドの懐（ふところ）から銀の横笛が落ち、ころころ転がってコナンの前でとまった。
ガルドの顔色がさっと変わった。
「そ、その笛は——⁉」
アレンの左足から、赤い血が流れていた。だが、その痛みよりもアレンは笛に気をとられていた。アレンは、とっさに風の塔の魔女の話を思い出したのだ。
「こ、こんなものっ！」
コナンは、ガルドにむかって笛を蹴った。
ガルドは、顔にむかって飛んできた笛をつかむと、冷酷な目でじっとコナンをにらみつけた。
コナンは、その目を見てぞっと背筋が凍る思いがした。
「大事なものらしいなっ⁉　まさか、ガルチラの子孫なんじゃないだろうなっ⁉」
アレンが、大声で聞いた。
「ガルチラッ⁉」
コナンがアレンを見た。
「ふっ。またそのことか——。知らないな、ガルチラなんて男っ——」
ガルドは、身構えながら笛を袖（そで）で拭いて懐に仕舞（しま）った。

「ふん！　こんなやつがガルチラの子孫なものかっ！　本当にガルチラの子孫だったらぼくたちと戦う訳がないじゃないかっ！」
コナンが、ガルドにむかって叫んだ。
ガルドは、その言葉を無視してアレンに斬りかかった。
カキーン――ふたたび剣と剣がぶつかり合う乾いた音が洞窟に響いた。
その瞬間、突然アレンの前からガルドの姿が消えた。
アレンは、すぐさま背中に気配を感じて、振りむきざま鋭く剣を突き出した。
だが、ほんの一瞬早く、ガルドの剣が稲妻のようにアレンの横を通過したのだ。
しまった――！　一歩遅れをとったアレンが、慌てて身構えた。
そのとき、アレンの足元に、旅の道具や月のかけら、月の紋章などが散乱した。
「あっ!?」
アレンは、愕然とした。
ガルドの狙いは最初から革袋だった。
アレンの背負った革袋に水の羽衣があると読んでの攻撃だったのだ。
床に落ちた品々の中に水の羽衣があるのを見て、ガルドはニヤリと笑みをもらした。そして、すかさず顔の前で左右の腕を交差させ、祈りの指輪をはめた左手を強く握りしめたのだ。
つぎの瞬間、指輪がキラッと光ったかと思うと、ブオーッ――と、突然まっ白な火炎がアレン

をつつみ、すさまじい衝撃が襲ったのだ。
「あ――っ！」
アレンは、後方に吹っ飛び、岩肌に叩きつけられて床に転がり落ちた。
まっ白な火炎につつまれたとき、全身に鉄の棒でなぐられたような衝撃が走った。
アレンは、必死に起きあがろうとした。だが、頭が痺れて思うように動けなかった。岩肌に叩きつけられたとき、軽い脳震盪を起こしたのだ。口からは血が流れていた。
「ふっ――」
ガルドは、鼻先で軽く笑うと、水の羽衣を拾おうとした。
「チキショーッ！　こうなったら！」
コナンは、とっさに胸の前で印を結んだ。なんとしても水の羽衣を守ろうと思ったのだ。ここで奪われたら、すべてが終わりなのだ。ふと、そう思ったのだ。たとえ命に代えても――と。
炎の精霊よ――！　与えよ、力を――！　われに全生命の力を――！
呪文を唱えながら、コナンは印を結んだ手に全身の力を集中させた。
炎の精霊よ――！　われに全生命の力を――！
ぶるぶるぶるっ――と、コナンの全身がはげしく震え出した。
コナンは、さらに渾身の力を集中させた。
すると、ピカーッ――鋭い光が印を結んだ手から発して、ちょうど水の羽衣を拾いあげたばか

りのガルドに炸裂したのだ。
矢のような稲光が一瞬にして、ガルドの全身を走り抜けた。
「うおおっ！」
とたんにガルドが悲鳴をあげて、全身をはげしく痙攣させた。
水の羽衣が、痙攣した五本の指からするりと抜けて舞うように床に落ちた。
炎の精霊よ――！　われに全生命の力を――！
コナンは、最後に残ったありったけの力を集中させた。
ガルドの全身に、ふたたび鋭い稲光が走った。
それを見ていたアレンが、必死に立ちあがると、剣をかざしてガルドへ突進し、
「うりあああっ！」
渾身の力で、剣を振りおろした。
そのとき、突然ピカーッと祈りの指輪が光り、まばゆい白光が洞窟をつつんだ。
一瞬ののち、光は消え、ガルドの姿も消えた。
だが、剣を握りしめたアレンの手に、たしかな手応えが残っていた。
剣の刃先から、まっ赤な鮮血がしたたり落ちていたのだ。

5　熔岩

「や、やった——」
コナンは、そう呟いて、ふらふらっとその場に崩れ落ちた。
「コナン⁉　しっかりしろっ！」
アレンが、慌てて抱(だ)き起こした。
コナンは、精気の失せたまっ青な顔をしていた。
コナンの体がやたら重かった。全身から力が抜け、まるで人形のようにグッタリとしている。
ガルドが姿を消すと同時に、セリアが我にかえった。頭の芯(しん)に鈍い痛みがあるものの、意識はしっかりしている。
「セ、セリア——」
コナンは、うめくように名を呼び、その声にセリアは慌てて駆け寄った。
「は——早く——じゃ、邪神の像を——」
セリアとアレンの顔を見ながらそういうと、コナンはガクッと気を失った。
「アレン⁉」
泣きそうな顔で自分を見つめているセリアに、アレンは無理に微笑(ほほえ)んで見せた。

「大丈夫さ、コナンは——」
そういうのがやっとだった。アレンにも、もちろんコナンの状態が普通でないことは分かっていた。だが今は一刻も早く邪神の像を手に入れて、この場を離れなければならないのだ。
もし今、さっきのような魔物に襲われたら——。
コナンの体をそっと横たえたアレンは、不吉な思いを振り払って立ちあがった。
慌ててセリアがよろけるアレンの腕を取った。激痛は全身に広がり、アレンは息をするのも苦しかった。
二人は無言のまま邪神の像の隠された扉にむかった。
邪神に呪われた開かずの扉には、おどろおどろしいぶきみな絵が全面に描かれていた。恐ろしい魔物たちが荒れ狂う地獄のような絵だった。
セリアは、ムーンブルクを襲撃した魔物たちを思い出した。
だが、この扉には把手もなにもなかった。どうしたらこの石の扉が開くのか、アレンには見当もつかなかった。セリアとて同じだった。
「どうしたら開くの？」
セリアは、扉に触ろうとしたが、一瞬とまどった。絵が気持ち悪いからだ。
だが、思いきってそっと右手をあてて軽く押してみた。すると、不思議なことに、手の触れた部分がポーッと鈍く光ったのだ。

「あっ!?」
セリアが、驚いて手を離そうとした。だが、絵にぴたりと吸いついて離れなかった。
光はどんどん広がり、やがて絵全部をおおってしまったのだ。
すると、セリアの手が簡単に離れた。手が離れると、絵をおおっていた光も消えた。同時に、絵も消えていた。邪神の呪いが解けたのだ。
そのときだった。ゴォォォォッ——と、はげしい地響きがして、石の扉がゆっくりと横に開くと、突然すさまじい熱風が吹きこんできた。そして、想像を絶するような恐ろしい光景が現れたのだ。
アレンとセリアはあまりのすごさに息をのんだ。言葉にならなかった。
巨大な熔岩の隧道だった。両側に壁のような熔岩の滝があって、はるか上から、飛沫を散らしながら、ぶきみな音を立てて流れ落ちてくるのだ。それが奥までつづいているのだ。
滝と滝の間の、わずか二尋ばかりの狭いところでは、熱風が渦を巻き、熔岩が荒海のように飛沫をあげながら波打っていた。そのなかにいくつもの岩が露出していて、奥へむかって飛石のようにつづいている。その先に、小さな岩のほこらが、熔岩の飛沫と熱風の陽炎に揺れて、かすかに見えた。
そこに行くには、熔岩の荒波を飛び越えて、熔岩の飛沫の雨を抜けなければならないのだ。
竜王の子孫は、邪神の像は恐ろしい熔岩に囲まれているといったが、これほどまでとは思いも

しなかったのだ。

セリアは、水の羽衣をまとうと、

『精霊ルビスよ――。どうかわたしをお守りください――』

心のなかで祈ると、アレンを見て意を決して、熔岩の隧道に飛びこんだ。

とたんに、水の羽衣から美しい水煙が出て、セリアの全身をおおった。

不思議に、熔岩の熱さも、熱風も、なにも感じなかった。

セリアは、露出した岩から岩へと飛んで、波打つ熔岩を越え、絶え間なく降りそそぐ熔岩の飛沫のなかを奥へ、奥へとすすんだ。

最後の岩を飛んで対岸に着くと、目の前に階段があった。その上に岩のほこらがあった。

ほこらは礼拝堂だった。その中央の祭壇に、美しい青の円球があった。ちょうど人間の頭を二まわり大きくしたのと同じぐらいの大きさだ。祭壇には、それ以外なにもなかった。

セリアは、無意識のうちにその青い円球に近づき、そして、そっとその円球に両手をあてた。手はぴたりと円球に吸いついた。

セリアは、驚いた。邪神に呪われた開かずの扉の絵に触ったときと、まったく同じ感触だったからだ。あの絵となにか関係があるのかしら――？　ふと、セリアはそう思った。

すると、セリアの両手をあてたところから黄色の光が出て、その円球をおおい、青から黄色に色が変わった。

そのとき、突然、円球に三つの赤い光が浮かびあがった。そして、その三つの赤い光のところから、円球全体に稲光のような鋭い亀裂が走ったのだ。

その直後、円球は爆発したように弾け飛んで消えてしまった。

そして、円球から現れた像を見て、

「あっ!?」

セリアは思わず顔をそむけそうになった。

それはゾッとするほど凶々しい像だ。

翼を持ち、蛇のような体の破壊神が、三つ目の髑髏の上でとぐろを巻いていた。まっ赤な破壊神の口は、まるで生きているかのようにヌラヌラと光って見てた。

人間の首ほどの大きさのあるこの像こそ、破壊の神を象ったといわれている邪神の像だったのだ。

「こ、これが——」

セリアは、忌まわしそうに邪神の像を見つめた。

これが——これがわたしにしか手に入れられない邪神の像——?

これのために、ムーンブルクが襲撃され、町や城が焼かれ、多くの人々が殺され、大事な両親まで殺されたの——?

これのために、一年もの間、閉じこめられたの——?

これのために、多くの人々が血を流したの——?

これのために、世界が危機を迎えてるの――？

セリアの脳裏（のうり）に、ムーンブルクが襲撃されてから今日までのことが、つぎつぎに浮かんでは消えた。いつの間にか、セリアの瞳に涙が滲んでいた。

でも――。これがあれば、ハーゴンを倒せるんだわ――。

これがあれば、もとの平和な世界に戻せるんだわ――。

これがあれば――。

セリアは気を取り直して、涙を拭うと、邪神の像を両手で抱えた。

ずしりと重かった。とたんに邪神の像の三つの目の赤い光が消えた。

セリアは、もと来た熔岩の道を、引き返した。

「こ、これかっ、邪神の像はっ！」

セリアが無事アレンのところまで戻ると、アレンは邪神の像を見て目を輝かせた。

セリアも、力強く頷（うなず）いた。

「おい、コナン！　邪神の像だぞっ！」

アレンとセリアは、急いでコナンが横になっているところへ戻った。

だが、コナンを見て、二人は愕然とした。

コナンは、まっ青な顔をして目をつむったまま、なんの反応も示さなかった。

「コナン⁉　どうしたコナン⁉」
アレンは、慌ててコナンを抱き起こして、はげしく揺すった。
だが、やはり同じだった。
「コナーン！」
アレンは、今にも泣き出しそうな顔で叫んだ。

ラーミア号は、曇り空の下をデルコンダルにむけ、滑るようにすすんでいた──。
そして船室の寝台に横たわったコナンは、死んだように眠りつづけていた。
邪神の像を手に入れると、アレンは気を失ったコナンを背負って海底神殿を脱出したのだ。魔物に出会わなかったのが唯一の好運だった。
途中、セリアは傷だらけのアレンと意識を失っているコナンに何度も回復の呪文をかけた。アレンには効き目があったがコナンに対してはなんの効果もなかった。
船にたどり着き、コナンを寝台に寝かすとアレンはそのまま意識を失った。
緊張の糸が切れ、疲労が一度に襲ってきたのだ。
眠りから覚めたとき、目の前に心配そうなセリアの顔があった。ずっと二人の看病をしていたのだ。
「コナンは？」

体を起こしたアレンに、セリアは黙って首を振った。
見ればかたわらの寝台では、寝かせたときの姿のままでコナンが横たわっていた。
それが海底神殿から脱出して四日後のことだった。
以来、何日たってもコナンの意識は戻らなかった。積んであった薬草も底をつき、アレンたちには手の施しようがなくなっていた。今はただ一刻も早くデルコンダルに着くのを祈るだけだった。
そして一〇日目の夜がきた――。
月のない、まっ暗な夜だった。
アレンとセリアが、眠りつづけているコナンを見守っていると、
「アレンさまっ！」
甲板からガナルの叫び声がした。
「船でさあ！」
「な、なにっ!?」
アレンとセリアは、急いで船室から飛び出し、舵輪のある船尾の甲板に駆けつけた。
「あすこでさあ！」
ガナルがアレンに望遠鏡を渡しながら、船首の先の水平線を指した。
アレンは、望遠鏡を覗いた。明かりをたくさんつけた大型船だった。だが、暗すぎてその程度

のことしかわからなかった。もちろん、帆柱の旗も判別できるわけがなかった。
「海賊じゃないだろうな？」
「なんともいえませんが、とにかく信号を送ってみまさあ」
ガナルは、舵輪のそばにかけてあった灯火具を持って、船首へ飛んで行った。
ルプガナで、ラーミア号の修復工事の最中、アレンたちはガナルから帆のあげ方や、海図や星図の見方、羅針盤での方位の測り方などの基礎知識を教わったとき、信号のことも教わった。
ガナルが『言葉と同じでさあ。なんでも会話できる。身内の船なら、冗談までいえまさあ』といっていたのを、アレンは思い出した。
ガナルが、必死に灯火具を振りながら信号を送っていた。
そして、やっとむこうが気づいて信号を送ってくると、ガナルが嬉々として叫んだ。
「アレンさま！　旦那さまの船でさあ！」
「えっ!?　ハレノフ八世のっ!?」
アレンとセリアは、驚いてガナルのところに駆け寄った。
「だけど、今ごろルプガナじゃないのかっ!?」
「間違いないんでさあっ！」
ガナルは、信号を送りながらいった。
「旦那さまの船には、腕のいい魔道士が乗ってるんでさあ！　船乗りたちの病気ならなんでも治

してしまいまさあ！」
やがて、船が望遠鏡でよく見える距離まで接近すると、アレンは望遠鏡を覗いた。
見覚えのある大型船だった。船首には、女性の騎士像（きしぞう）が飾（かざ）られていた。帆柱（マスト）の上では、ラーミア号と同じハレノフ家の旗がなびいていた――。

6　紋章

「数日もすれば、意識も戻るでしょう――」
医術の心得のあるという老魔道士は、ハレノフ八世の部屋のベッドに運びこまれたコナンに特別に煎（せん）じた薬草を飲ませると、心配そうに見ていたアレンたちにそういって微笑んだ。
「よかった――」
アレンはセリアと顔を見合わせてほっとした。
一緒にいたレシル、ハレノフ八世、ガナルも同様に胸をなでおろした。
「しかし――。奇跡としかいえませんですのお――」
老魔道士は、言葉をつづけた。
「話からすると――おそらくこのお方は、メガンテの呪文を使ったのでしょう――」
「メガンテ？」

アレンが怪訝な顔をすると、
「はい――。己の命と引き換えに、敵の命をも奪ってしまうという、そりゃあ恐ろしい呪文ですのじゃ――」
「命と引き換えに？　そんな呪文まで使って――」
アレンは、死人のようにまっ青な顔で眠りつづけているコナンを見た。
たしかに、あのときコナンの呪文で助かった――。もし呪文をかけてくれなければ、もちろん邪神の像は手に入れられなかったし、自分たちだってどうなっていたかわからない――。だが――
それにしても、自分の命と引き換えにだなんて――。
「しかし――よくここまで生きておれたものよ――」
そういってコナンに毛布をかけようとした老魔道士が、コナンの左胸のポケットから転がり落ちそうになっている美しい水色の石に気づいて、
「これは――？」
と、石を取って珍しそうに見た。
親指の爪ほどの大きさの、六角形の宝石だ。
レシルは、弾かれたようにはっとなった。そしてまた、ハレノフ八世も。
「もしやこれは――命の石――？」
一同は、怪訝そうに宝石に注目した。

アレンは、ふと『勇者アレフの伝説』に出てくる命の石のことを思い浮かべた。
勇者アレフが誕生した日、どこからともなくやって来た僧侶がその石を置いて立ち去ったという話を。そして、生まれて間もない勇者アレフが、その石を握りしめたまま水も何もない砂漠の岩山で一〇日も生きのびていたという話を――。
「もともと深山に住む妖精たちのもので、命の源となる力を与えるという、不思議な石ですのじゃ――。おそらく、この石がこのお方の命を救ってくれたのでしょう――」
ハレノフ八世とレシルは、驚いて聞いていたが、老魔道士がそっとコナンのポケットに命の石を戻すと、ハレノフ八世は、黙ってやさしくレシルの肩に手を置いた。
この石はもともと一対の石で、レシルの亡き父がレシルの誕生祝いに異国から買って来たものだ。いわば、形見のようなものだ。その大事な石のひとつをコナンが持っていたことの意味を、ハレノフ八世が理解したからだ。
「――」
レシルは、恥じらって顔を伏せた。
もちろん、二人のことを、アレンたちは気づかなかった。
「なにかあったら、叩き起こしてくだされ」
老魔道士はそういうと自分の部屋へと戻った。
看病するというレシルを残して、アレンたちは隣の部屋で、ザハンで別れてから今までのこと

を話した。
「御苦労なされましたなぁ」
アレンとセリアの話を聞いてハレノフ八世は涙を流した。
そして今度は自分たちがなぜあの海域にいたかを語り始めた。
ハレノフ八世の船は、一七〇日ほど前、アレンたちと別れてからザハンの港を出航し、デルコンダルへむかった。
そのあと、北航路を通ってルプガナに帰港する予定だったが、嵐にあってデルコンダル沖の暗礁に乗りあげてしまったのだ。他の船団はルプガナに帰ったが、修復のためにずっとデルコンダルに停泊していたのだ。
そして、春の訪れとともにルプガナを出航する船団とベラヌールで合流するために、一〇日前デルコンダルを出航したばかりだったのだ――。
ひと通り話が終わると、
「それでは、これからどうなさいます？」
と、ハレノフ八世がたずねた。
「一応、ベラヌールへ行こうと思います。精霊ルビスの神殿があると聞きましたから」
「おおっ、まさに渡りに船とはこのことですな。これは楽しくなりますな」
ハレノフ八世は、嬉しそうに笑った。

「ええ。コナンもああいう状態ですし――。ロンダルキアへ渡る前に、もうひとつ、ルビスの守りが欲しいんです」
「ルビスの守り？」
「それがあれば、邪神のまやかしを打ち破ることができるそうです」
アレンは、デルコンダルのカンダタ十八世にもらった月の紋章の話をすると、
「月の紋章!?」
ハレノフ八世は、顔色を変えて身を乗り出した。
「五つの紋章を集めて、精霊ルビスの神殿に行けば、ルビスの守りを授かることができるらしいんです」
「そ、それは、ひょっとしたら、石の破片じゃありませんかっ!?　そうそう、これぐらいの大きさの!?」
ハレノフ八世は、テーブルにある飲みかけのお茶のカップの蓋(ふた)を指した。
「知ってるんですかっ!?」
「知ってるもなにも、わたしが持ってますよっ！」
ハレノフ八世は、慌ててコナンが眠っている隣の部屋から美しい彫物(ほりもの)がほどこしてある立派な木箱を抱えて戻って来ると、
「こ、これですよ！」

と、四枚の湾曲した石の破片を取り出した。
「あっ!?」
アレンは、思わず目を輝かせた。
それらは、月の紋章とほぼ同じ大きさだった。そして月の紋章と同じように、表面にはそれぞれ、太陽の絵、水のしずくの絵、星の絵、心臓を表す桃の形をした絵と楔形文字が彫られ、鮮やかな美しい色が塗りこんであった。
「太陽と、水と、星と、命の紋章です！　水の紋章は、わたしが四〇年ほど前、ルプガナの山奥で手に入れたものですが、他の三つは代々わが家に伝わっておったものです！　きっと先祖たちが航海中にどこかで手に入れたものでしょう！」
ハレノフ八世は、そういいながら四つの紋章を合わせると、手のひらにすっぽり入るほどの球形に近い形になった。五分の一、あと一カ所を埋めれば完全な球形になるのだ。
「待っててくださいっ！」
アレンは、いきおいよく飛び出して行った。そして、ラーミア号から月のかけらを取ってすばやく戻って来た。
「おおっ、それが月の紋章ですか！　さあ！」
ハレノフ八世は、未完成の球形をそっとアレンに渡して、セリアやガナルと一緒に固唾をのんで見守った。

アレンが、最後の一枚の月の紋章をそっとはめこむと、ピタッと納まった。完全な球形になったのだ。そのときだった。五つの紋章の継目からまばゆい光が発してその球形をおおったのだ。やがてその光が消えた。

アレンたちは、思わず目を見張った。

球形が厚い石から薄い半透明の石に変わり、内側から発した虹色の光が、表面の絵と楔形文字をさらに美しく鮮やかに浮かびあがらせていた――。

その夜から、アレンたちはハレノフ八世の船に移り、ラーミア号を曳航してもらったのだ。

そして、五日目の昼のこと――。

その日は、珍しくよく晴れていた。

甲板にいたアレンのところに、嬉々としてセリアが飛んで来たのだ。

「コナンの意識が戻ったわっ！」

「ほんとかっ!?」

アレンは、セリアと一緒にハレノフ八世の寝室に駆けつけた。

コナンは、まだ喋ることも顔を動かすこともできなかった。やっと目を開けて天井を見ているだけだったが、意識だけは、はっきりしていた。

「心配したぜ、コナン――」

アレンの目に涙が滲んできた。
コナンの枕許で、やつれ果てたレシルが瞳を潤ませていた。ほとんど寝ずにずっとベッドの横でコナンの看病をしていたのだ。アレンとセリアがレシルの体を心配して代わろうとしたが、頑として譲らなかったのだ。
「レシルが寝ずに看病してくれたんだ。感謝しろよ――」
アレンがいった。
「おまえのお陰で、邪神の像を手に入れることができた――。だが――二度と変な呪文なんか使うな――。約束しただろ――。一緒にハーゴンを倒すって――」
コナンは、かすかに微笑むと、そっと目を閉じた。そして、また深い眠りに落ちた――。

第九章　いざロンダルキア

一番寒さの厳しい王（キング）の月も終わり、不死鳥（フェニックス）の月になると、青空が覗（のぞ）く日も多くなり、風や波も日増しに穏（おだ）やかになってきた。

ハレノフ八世の船は、ラーミア号を曳航（えいこう）しながら、順調に航海をつづけていた。

春は、確実に一歩一歩近づいていた。

その春の気配とともに、コナンの体力も徐々（じょじょ）に回復し、不死鳥（フェニックス）の月の十三日、レシルが十七歳（さい）の誕生日を迎（むか）えたときには、甲板（かんぱん）に出て散歩ができるようになっていた。

アレンたちにとって、今までの航海で、最も平穏（へいおん）で楽しい航海だった。

だが、アレンは剣（けん）の腕（うで）を磨（みが）くことを忘れなかった。時間は、たくさんあった。

そして、ハレノフ八世の船に奇跡的（きせきてき）に出会ってから七〇日あまり、ベラヌール島が見えてきたころには、コナンの体は完全にもとに戻（もど）った。季節は、花が咲（さ）き、緑が色づく、さわやかな春を迎えていた。

また、アレンの十八回目の誕生日（たんじょうび）も、間近に迫（せま）っていた。

1 約束

帆は、春風を大きくはらんでいた。
その上空を、朝のやわらかな日差しを浴びて、数羽の海鳥が舞っている。
ベラヌールの島が見えてから、急に海鳥の姿が増えてきたのだ。
船は、ベラヌール島を右に見ながら、順調にすすんでいた。
コナンが船首の甲板に残って、風に吹かれながら海を見ていると、レシルがやって来て、
「もう少しでベラヌールの港が見えてくるんですって——」
涼し気な瞳でにっこり微笑むと、コナンの横に並んで海を見た。
コナンは、レシルの横顔をまぶしそうに見た。夏にザハンで再会したときは、さほど感じなかったが、今、横にいるレシルは少女のあどけなさは残っているものの、目を見張るほど美しい娘に成長していたのだ。
「ありがとう——。お陰で元気になれたよ——」
コナンは、改めて礼をいった。
コナンが歩けるようになるまで、レシルは献身的に看病してくれた。いくら感謝しても、しきれないほどだった。

「あの――これさ――」
コナンは、胸のポケットのボタンを外して、美しい水色の命の石を取り出した。
「命の石だと知ってて、ぼくにくれたの？」
「いえ――。魔道士に聞くまでは知らなかったわ――」
そういってレシルが微笑むと、
「でも、ずっと持っていてくれて、嬉しかった――。ほら――」
と、胸に隠れていたペンダントを出して、悪戯っぽく笑った。
同じ命の石で作ったペンダントだった。
コナンがルプガナを出航してから、ペンダントにして肌身離さず持っていたのだ。
「二つの石は対なの――。わたしが生まれたとき、亡き父が残してくれたんです――」
「そ、そんな大事なものを――」
コナンは、驚いてレシルを見ていた。
ルプガナを出航するとき、「お護りだと思って大事にしてください――」といってレシルが顔をまっ赤にしてうつむいた。そのときから、コナンは、レシルが好意を寄せているのを感じていた。またザハンで再会したときも、今回看病してもらったときにも感じていた。もちろん、コナンには、そんなレシルの気持ちが嬉しかった。
だが、大事な形見のひとつをくれるほど、思ってくれているとは知らなかったのだ。

「迷惑だったかもしれないけど——」
「迷惑だなんて。この石のお陰で命が助かったんだ——」
「そうね。それで十分よね——。それで——」
レシルは、悲しそうに微笑むと、
「だってコナンには——好きな人がいるんだもの——」
そういって、憂いに満ちた瞳で遠くを見つめた。
「レシル——」
コナンは、一瞬とまどった。
強い風が吹き抜け、レシルの長い髪がひときわ大きくなびいた。
セリアのことを知っていて、それでもなお好意を寄せてくれていたのか——そう思うと、コナンは急にレシルがいじらしくなった。
「セリアのことなら、もういいんだよ——」
レシルが、怪訝そうに見た。
「ほんとだよ。たしかに、セリアを好きだ。いや好きだった——。でも、いくら逆立ちしてもアレンにはかないっこないし——。それにぼくは、アレンが好きだから——。アレンなら、セリアをきっと幸せにしてくれると思うから——」
コナンは、そういって笑うと、

「それよりさ、レシル――。ベラヌールに着いたら、買物につき合ってよ」
「えっ？」
「ぼくも、この命の石、ペンダントにするよ――」
「ほんと？」
「ああ。レシルだと思って、ずっと大事にするよ。ベラヌールに着いたら、すぐルビスの神殿に行くけど、そのあとで――。それに、レシルに何かプレゼントしたいんだ。誕生日の――」
「嬉しい！」
レシルは、綺麗な白い歯を見せて笑った。
「約束ねっ！」
左手の小指を差し出してコナンを見つめた。
「うん――」
コナンとレシルは、指切りをした。
だが、指切りをすると、離れかけた二人の小指がとまった。
「レシル――」
コナンとレシルは、じっと見つめ合った。
そのときだった。帆柱にのぼって帆の点検をしていた船乗りのひとりが、嬉々として大きな声で叫んだ。

「おーい！　ベラヌールが見えてきたぞっ！　ベラヌールだーっ！」
コナンとレシルは、思わず前方を見た。
その声を聞いて、アレンとセリアが他の船乗りたちと一緒に船室から甲板に飛び出してきた。
右前方に、ベラヌールの外港が見え、さらにその後方に、春の日差しを浴びたまっ白なルビスの神殿が見えた――。

2　ルビスの神殿

ハレノフ八世の船はベラヌールの外港の前を通過し、大きな河口に入っていった。すると、前方に湖に浮かんだ美しいベラヌールの港と町が見えてきた。
その小高い丘の上に、白亜の精霊ルビスの神殿がそびえている。
人口二〇〇〇〇人のベラヌールの町は、もともとベラヌール湖にある無人島だった。
だが、この島に大きな吊橋が対岸から架けられ、島の中央の小高い丘に精霊ルビスの神殿が築かれると、島は神殿を中心に急激に発展したのだ。
その後、神殿の町としてだけではなく、ベラヌール島の交易や文化の中心としても発展をとげ、今では南海一の都市になったのだ。
また、同じような地形が縁で、アレフガルド国のリムルダールの町とは、昔から姉妹都市の関

係にあった。
ちょうど一年前、アレンたちはデルコンダルにむかう途中、このベラヌールに寄港したことがあった。そのときに地元の船乗りから、かつて竜王がアレフガルドを襲ったとき、この町より援軍を派遣し、竜王の魔物からリムルダールの町を守ったという歴史があると、聞いていたのだ。
港には、数隻の貿易船が停泊していた。
ハレノフ八世の船と曳航されてきたラーミア号が桟橋に横づけになると、アレンとコナンとセリアの三人は、ハレノフ八世やレシルたちに見送られて、町の中央にそびえる精霊ルビスの神殿へむかった。
アレンは、ロトの鎧とロトの兜を身につけ、ロトの剣を背中にさげていた。ハレノフ八世の船に移ってからずっと外していたのだが、久し振りに身につけると、心が引き締まる思いがした。邪神の像は縫い直したアレンの革袋に、五つの紋章はコナンの革袋に入っていた。
ベラヌールの町は坂と階段の町だ。
石畳の坂道をすすむと、すぐ階段にぶつかり、階段をのぼると、また坂道があり、その前にまた階段がある。さらに、坂道からは、いくつもの路地が横にのびていた。
両側には、さまざまな店がびっしりと軒を並べ、出航を待つ船乗りたちや訪れた巡礼者たちの買物客で賑わっていた。
コナンは、アレンとセリアに遅れがちだった。町に入ると宝石屋がないかどうか気になって、

ついよそ見をしてしまうからだ。レシルと一緒に買物をする姿を想像すると、コナンの心が妙に弾んだ。

だが、アレンたち三人を、港からずっとつけている怪しい男がいた。

フードつきの黒マントをまとった男だ。顔を隠すように頭をさげ、フードを深くかぶっているので、顔はよく分からないが、上目遣いの目は異様に鋭かった。

しかし、三人は気づいてなかった。

三人が、道具屋の横の路地の前を通過すると、その路地から怪しい男がすっと現れて港からつけて来た男と合流した。そして、さらにもうひとりが別の路地から加わった。

同じように、フードつきの黒マントをまとっている。

その数が五人に増えると、男たちはすばやく裏通りに飛びこみ、買物客を押し退けてさらに奥の路地を曲がった。そして、狭くて急な、曲がりくねった石畳の坂道を駆けのぼって行った。

最後の階段をのぼって、アレンたち三人は目を見張った。

荘厳華麗な白亜の神殿は、見る者を圧倒するように空にむかってそびえ、その塔の先端にちょうど太陽がさしかかっていた。昼を少し回ったばかりなのだ。

神殿の正面には、大きな扉があった。その扉からなかに入ると、大理石で造られた美しい広大な礼拝堂に出た。

この礼拝堂を、美しい彫刻がほどこされた二〇本の巨大な大理石の円柱が支え、正面の祭壇にむかって、一〇〇〇席以上もの椅子が整然と並んでいた。
礼拝堂には、祈りを捧げる人や、堂内の彫刻や装飾を見物する多くの人々がいたが、ひっそりと静まり返っていた。
金色の鉄柵に囲まれた祭壇には、精霊ルビスの像が祀られていた。
三人が祭壇の前に行くと、神官が静かに近づいて来て、
「勇者ロトの血をひきし方々ですね？」
くぐもった声でたずねた。
頭がつるつるで青白い顔をした、年齢不詳の薄気味悪い神官だ。
三人が頷くと、
「お待ちしておりました――」
「どうして知ってるのですか？」
アレンが、怪訝な顔で、やはり小声でたずねると、神官は静かに微笑んで、
「どうぞ、こちらへ――。この地の大司祭、スカルフ七十七世がお待ちしております――」
といい、礼拝堂の奥の扉にむかって、さっさと歩き出した。
三人は、訝りながらも黙ってついて行った。
扉から出ると、下へおりる階段があった。

下の階におりると、また階段があった。神官は、黙ってどんどん階段をおりると、暗い地下室に入って行った。そこは広い物置部屋になっていた。
「大司祭は、どうしてこんなところにいるんだっ？」
たまらずアレンがたずねた。
神官はまた静かに微笑むと、何も答えずに黙って、隅にある天井からぶらさがっている鉄の鎖を引っ張った。
すると、目の前の壁が左右に大きく開いた。隠し扉になっていたのだ。その奥は、無数の燭台の明かりに照らされた広い礼拝堂であった。
三人は、驚いて互いに顔を見合わせた。
地下の礼拝堂は、上の広大な礼拝堂の一〇分の一ほどの大きさだったが、左右二本ずつの計四本の巨大な大理石の円柱が高い天井を支えていた。
正面に、精霊ルビスの祭壇が祀られていた。
その前で一〇人ほどの神官を従えた小柄な老神官が、背もたれの高い椅子に座って、鋭い目でじっと三人を見つめていた。スカルフ七十七世だ。
「勇者ロトの血をひきし者たちか――」
「はい――。ルビスの守りをいただきに参りました――」
アレンが丁重にいった。

「ルビスの守り――？」
コナンは、革袋から五つの紋章を取り出そうとすると、
「だが、その必要はないっ！」
スカルフ七十七世は、おもむろに立ちあがった。
「いずれにせよ、おまえたちはこれより先には行けないのだっ！」
三人は、さっと顔色を変えた。
「ど、どういうことですっ!?」
すかさずアレンがたずねた。
「ふっふふふ――！」
スカルフ七十七世はぶきみな笑みを浮かべながら、祭壇に祀られている精霊ルビスの像を持ちあげると、いきなり床に叩きつけた。像は粉々に割れて床に飛び散った。
「な、なにをするんだっ!?」
アレンは、老神官の思いもよらぬ行動に驚いた。
「こ、これは邪教の!?」
精霊ルビスの像の後ろにはぶきみな魔神の像が祀られていたのだ。
「フハハハハッ！　いかにもこの像はわれらが崇める大魔神だ！」
スカルフ七十七世はそういうなり両腕を顔の前で交差させると、バリバリバリッ――、突然　大

司祭の全身からいきおいよく電光と白煙がほとばしった。白煙が消えたとき、スカルフ七十七世の姿はなかった。
なんとそこに立っていたのは、ハーゴンに地上へ追放された悪魔神官だった。
「ハーゴンの配下か!?」
ローブの胸の魔鳥の紋章を見て、アレンが叫んだ。
「その通り、わしの名は悪魔神官。この神殿はすでにわれらの手に落ちておる――。大司祭を始めルビスに使える者どもはすべて捕らえた」
まっ白な仮面をかぶった悪魔神官は、先端にまっ赤な宝玉のついた杖を構えて三人をにらみつけた。
すると、アレンたちを案内して来た神官を始め、他の神官たちもその正体を現して、すばやく三人を取り囲んだ。いずれも悪魔神官の部下である、妖術師や祈祷師たちだ。そのなかに港から尾行して来た男たちもまじっていた。
地上へ追放されてすぐ悪魔神官はこのベラヌールへとやってきた。邪神の像を手に入れたアレンたちが必ずここへ立ち寄ると読んだからだ。そして、神殿の神官たちをそっくり自分の部下と入れ換え、自らは大司祭スカルフ七十七世になりすましていたのだ。
「悪魔神官さまに命じられ、見張りをつづけていたかいがあったというもの！　おとなしく邪神の像を渡し、われらの手にかかれ！」

黒いフードをかぶっていた妖術師の一人がそううそぶくと、邪教徒たちは手に手に杖を構え、ジリジリとアレンたちに迫って来た。

3　いかずちの杖

「貴様ら三人の骸をハーゴンさまへの手土産にしてくれるわっ！」
仮面の奥で悪魔神官の目が異様な光を帯びた。
「殺れいっ！」
悪魔神官の号令に配下たちが一斉に襲いかかった。
だが、そのときすでにアレンは剣を構えて跳躍していた。
血飛沫が宙に飛び、四人の妖術師が悲鳴をあげてその場にうずくまった。
同時にすばやく印を結んだセリアが、バギの呪文をかけた。
たちまち数人が真空の渦にのまれ壁際まで吹っ飛んだ。
「おのれっ！」
何とかバギをかわした三人の祈禱師が、セリアに杖を向けた。だが、いくら呪文を唱えても何の変化も起こらなかった。
「クソッ！　クソッ！」

焦った祈禱師たちは何度も杖をふるって呪文を唱えた。
「無駄だっ！　おまえたちの呪文はすでに封じられている」
コナンがニヤリと笑った。他の妖術師や祈禱師たちも、いつの間にかコナンのかけたマホトーンで呪文を封じられていたのだ。
「このっ役立たずめらがっ！」
激怒した悪魔神官は、杖を構え直すと祭壇を駆けおりた。
アレンたちは以前、ラーの鏡のほこらで魔術師を倒した。そして、そのとき敵のなかには自分たちと同じ普通の人間もまじっていることを知ったのだ。
以来、アレンとコナンは魔物以外の敵と戦うときは、できるだけ相手を殺さないようにと心がけてきたのだ。
「こうなったらわし自らの手で引導を渡してやるわっ！」
悪魔神官はそういうなり杖を振りあげた。
先端の宝玉が光り、すさまじい突風が巻き起こった。アレンたち三人を襲った突風は、祈禱師たちをも巻きこみ、神殿のなかを吹き荒れた。
「うわあっ！」
アレンは思わず剣を落としそうになり、必死に体勢を立て直した。
海底神殿でガルドがかけた呪文に、勝るとも劣らないすさまじい攻撃だった。

「見たかっ！　いかずちの杖の威力を」
悪魔神官は倒れた部下たちには構わず、さらに杖を振るった。
さっきのより強烈な渦に襲われ、三人の体が宙に舞った。
「きゃーっ！」
「うわあっー！」
壁に激突したセリアが気を失い、アレンとコナンも床に叩きつけられた。
「コ、コナン——マホトーンだ——！　マホトーンでやつの呪文を——！」
「無駄だよ——！　いかずちの杖はそれ自体が魔力を秘めているんだ！　たとえあいつの呪文を封じこめても同じことなんだ——！」
懸命に体を起こしたアレンの言葉に、コナンは以前サマルトリア王家に仕える魔道士から聞いた、いかずちの杖の威力を思い出しながら答えた。
「その通り、この杖の力は風と雷雲の精霊によって与えられたものっ！　さ、まずはおまえからあの世に送ってやろう！」
悪魔神官はさらに杖を振るい、突風はアレンの体を天井に叩きつけた。
「うわっ！」
落下したアレンは床に激突し、剣が手から離れた。
「おのれっ！」

コナンはつづけざまにギラとベギラマの呪文を使ったが、火炎と電光はいかずちの杖が起こす真空の渦の前に脆くも消滅した。

「往生際の悪いやつめっ！」

悪魔神官は渾身の力をこめて杖をかざした。そのとき――

「ターッ！」

意識を取り戻したセリアが、背後からバギの呪文をかけたのだ。

鋭い真空の渦が、悪魔神官の背中に命中し鮮血が飛び散った。そしてそのすきを逃さず、アレンは床に落とした剣にむかって跳躍した。剣をつかんだアレンは、そのまま一回転して立ち上がり悪魔神官に斬りかかった。

「グフッ」

悪魔神官の手からいかずちの杖が床に落ち、乾いた音を立てた。

「わ、わしが、このわしがこんな青二才どもに――！」

だが、つぎの瞬間、パカッ――悪魔神官の仮面がいきおいよくまっ二つに割れたのだ。そこには皺だらけの醜い老人の顔があった。悪魔神官はまるで枯木が倒れるように、神殿の床に崩れ落ちた。

「ハ、ハーゴンさま――」

無念そうに見開かれた目があらぬかなたを見つめ、悪魔神官は絶命した。

邪教集団数千人の上に立ち、ハーゴンの片腕とまでいわれた男のみじめな最期だった。

4　異空間

「聞けみなの者よ——」
大司祭スカルフ七十七世は、地下の神殿に居並ぶ数十人の本物の神官たちを前におごそかな声で告げた。とても長い間幽閉されていたとは思えないしっかりした声だった。
悪魔神官を倒したあと、気を失っていた敵のひとりを尋問したアレンは、地下牢に閉じこめられていた大司祭スカルフ七十七世と神官たちを救出したのだ。
祭壇の上には、さっきまで置かれていた魔神の像の代わりに、五つの紋章が並べられている。そのさらに奥の壁には、まっ黒な穴がポッカリと口を開け、大きく歪んだ気流が渦を巻いていた。悪魔神官が、部下とともにこの神殿へ攻めこむのに使った魔法の通路だ。
本物の大司祭たちを幽閉したあと、悪魔神官は部下に命じて、通路の手前にもう一つ壁を造らせていたのだ。もちろん参拝に来る人々の目を欺くためである。
だが、今や暗黒の通路はゆっくりと閉じつつあった。悪魔神官の死によって通路を支えていた邪悪な力が消滅したからだ。
スカルフ七十七世は言葉をつづけた。

「ロトとアレフの血をひきし方々は、今よりこの暗黒回廊を使ってハーゴンの本拠地、ロンダルキアへと赴かれる。見ての通り暗黒の通路の入口は徐々に狭まりつつあり、遠からず完全に閉じてしまうであろう。われら精霊ルビスに仕える者は、その前に何としても五つの紋章をルビスの守りに変えなくてはならん――」

たとえ、この通路を抜けロンダルキアに行き、ハーゴンにまみえることができたとしても、ルビスの守りなくしては勝利はあり得ないのだ。

「ハーゴンの神殿は幻の城、偽りの楽園。ただルビスの守りだけがその悪しき力を破れるのです」

閉じつつある通路を見てはやるアレンたちを押しとどめ、大司祭スカルフ七十七世はいにしえより伝わる儀式を行おうとしていたのだ。

伝説の儀式、それはこのアレフガルドに危機が訪れたとき、選ばれた勇者の手にルビスの守りを授けるためのものだった。

五つの紋章を得た勇者が必ずこの地を訪れる。それがスカルフ家の先祖に精霊ルビスが与えた予言だったのである。以来、永年に渡って大司祭や神官たちは、この地ベラヌールで布教と修養の日々を送ってきたのだ。できるなら予言が現実となる日が来ないよう願いつつ――。

やがて、スカルフ七十七世はおごそかに祈りの言葉を唱え、神官たちがそれに唱和した。

聖なる神々を讃える声が神殿に満ち、五つの紋章は温かな光を放ち始めた。

そして、光がフッと消えたとき、そこにはすでに紋章はなく小さな首飾りが輝いていた。

このアレフガルドを創造した、精霊ルビスの守りである。
アレンがルビスの守りをセリアの首にかけ、大司祭に礼を述べると、
「お気をつけて。ハーゴンの力を決して侮ってはなりませぬぞ」
と、スカルフ七十七世がいい、ひとりの神官がセリアの前にすすみ出た。手には、あのいかずちの杖を持っていた。
「こ、この杖をあたしが——？」
「お持ちなされ。悪を討つのに役立てれば、この杖によって命を奪われた人々の魂も浮かばれましょう」
スカルフ七十七世は、戸惑うセリアに諭すようにいった。
「さ、急がれよ。港にいるお仲間には、知らせを走らせましたゆえご心配にはおよびませぬ」
暗黒の回廊はさらに狭まっていた。三人は手を取り合ってその前に立った。
「どうしたのコナン？」
ふと、寂し気に後ろを振り返ったコナンに、いかずちの杖を手にしたセリアがたずねた。だが、
「なんでもないよ。さあ、行こうぜ！」
コナンは、明るく笑った。
コナンはレシルのことを思い出していたのだ。神殿から戻ったら、一緒に買物に行こうと約束したときのレシルの笑顔を——。

三人はもう一度スカルフ七十七世たちに会釈し、いきおいよくまっ暗な通路に飛びこんだ。
「ルビスの御加護があらんことを――」
大司祭の声がはるかかなたで聞こえ、アレンは意識が遠のくのを感じていた。
そして、アレンたちの姿が闇のなかに消えると同時に、神官たちの目の前で暗黒の回廊は完全に消滅した。そこにはただの神殿の本来の石壁だけが残されていた。

5　大迷宮

そこに時間はなかった、空間もなかった。過去も未来も現在も、上下の区別も何も存在しなかった。暗黒回廊のなかは文字通り完全な闇の世界だった。
アレンには自分が落下しているのか、それとも上昇しているのかさえの区別もできなかった。すべての感覚がまったく役に立たなくなっていたのだ。
アレンは今まで感じたことのない恐怖に全身を捕らえられていた。ただ、しっかりとつかんだセリアとコナンの手の温もりだけが、アレンに勇気を与えていた。
そして、闇の通路は何の前触れもなく終わりを告げた。五感が戻り、三人の周囲は通常の空間に変わった。アレンたちは背中からいきおいよく地面に叩きつけられた。
あの闇のなかに踏みこんで、ここの地面に叩きつけられるまで、たった一〇、いや五数える間

の、できごとだった。
「いてえ〜〜〜っ！」
腰を押さえながら、やっとコナンが身を起こした。
「セリア、大丈夫か？」
アレンも身を起こし、隣に倒れていたセリアを助け起こした。
「こ、ここはどこなの？」
三人は、目を凝らして周囲を見回した。目がやっと闇に慣れると、
「どっかの洞窟らしいな――」
アレンが、呟いて立ちあがった。
そこは、地中の巨大な岩と岩が重なり合い、自然にできあがった細長い空間だった。
どこを見ても地中から露出した岩肌ばかりで、闇の通路はどこにもなかった。あの祭壇の暗闇が異空間の入口だとすると、出口にあたるそれらしきものがまったく見あたらなかった。
洞窟の隅が、かすかに明るかった。よく見ると、そこには階段があった。明かりは階段の上から差しこんでいるのだ。
三人は、さっそく階段を駆けのぼった。階段は、左へ曲がりながらつづいていた。一歩のぼるたびに、明るさが増してきた。そして、洞窟の外に飛び出して、
「あっ⁉」

思わず、立ちつくした。

目の前に、荒涼とした岩と石の砂漠が広がり、そのむこうに中腹まで雪におおわれた険しい山脈がそびえていた。ロンダルキア山脈だ。すでに季節は春だというのに、そのロンダルキア山脈から、身を切るような冷たい風が吹いてくる。

アレンは、太陽の位置を確認した。太陽は、まだ西にちょっと傾いていただけだった。ふと、精霊ルビスの神殿の前に立ったとき、神殿の塔の先端に太陽が差しかかっていたのを思い出した。その高さとあまり違わないところに、まだ太陽がある。

アレンは、信じられない顔でつぶやいた。

「ぼくたちは、一瞬にして、ロンダルキアに飛んだんだ」

三人は、さっそくロンダルキア山脈を目指して歩き始めた。

そして、西の砂漠に太陽が沈もうとするころ、三人は山脈の断崖絶壁のすぐ目の前まで来ていた。山脈は、見渡すかぎりの斬り立った岩山で、草木一本なかった。もちろん、地を駆ける獣も、空を飛ぶ鳥もない。

三人は、小さな丘のような斜面をのぼりきって、思わず立ちどまった。

目の前の崖の、切り立った岩肌にぶきみな浮き彫りが施されていたのだ。

三つ目の髑髏の頭に羽の生えた魔物が、とぐろを巻いている恐ろしい彫刻だ。

「邪神の像だ！」

コナンが叫んだ。
大きさこそ違え、その浮き彫りは邪神の像とそっくりだったのだ。アレンは「邪神の像がないとロンダルキア山脈の洞窟には入れない」といった竜王の子孫の話を思い出した。
「よし！　ここで邪神の像をかざしてみよう！」
アレンは浮き彫りの前に立つと、革袋から取り出した邪神の像を高々とあげた。
邪神の像の三つの目から鋭い光がほとばしった。その光は岩肌の浮き彫りの目にピタッと重なった。
すると、ゴゴゴゴゴゴーッ――突然はげしく地面が揺れた。
「きゃあっ！」
セリアが、アレンの腕にしがみついた。
地面が波打って揺れ、立っているのが精一杯だった。
その揺れが小さくなると、細かな岩をバラバラ落としながら、その口の部分の巨大な岩が、ガガガガガーッ――とぶきみな音を立てて、ゆっくりと、ゆっくりと左右に開き始めたのだ。三人は、呆然として見ていた。恐怖とか不安より、その迫力に圧倒されたのだ。
やがて地響きが終わると、まっ暗な闇が大きく口を開けていた。
三人は、たいまつを灯して、慎重に洞窟の奥に入って行った。
洞窟のなかは、複雑な迷路になっていた。三人が、上にあがる階段を捜しながら奥へ奥へとす

すんだときだった。突然、闇のなかに、鋭い稲光が走り、三人を強襲した。コナンとセリアは、すばやく左右に避け、アレンは宙に跳んでかわした。
闇のなかに、ぶきみな笑いをあげながら、まっ白な仮面が浮かびあがった。ハーゴンの密偵として教団のなかでは知られている、地獄の使いだった。
地獄の使いは杖をかざして呪文を唱えようとした。だが、それより一瞬早くセリアはいかずちの杖を振りおろしていた。
すさまじい真空の渦が杖の先端の宝玉から巻き起こり、セリアは予想を越えた反動に思わずたじろいだ。
「ギャ――ッ!?」
地獄の使いは突風に弾き飛ばされ岩肌に激突した。
仮面がポロリと落ち、素顔が現れた。地獄の使いの正体は皺だらけの老婆だった。
「す、すごいわ！」
セリアは、いかずちの杖のあまりの威力にあ然とした。
三人は暗い迷宮をさらに奥へとすすんで行った。
かなりの距離をすすんだとき、突然背後で唸り声が響いた。
「――!?」
アレンたちが振り返った瞬間、一番後ろを歩いていたセリアが悲鳴をあげた。

「セリア！」
コナンがセリアの体をかばうように前に出た。
襲ってきたのはキラータイガーだった。魔物の爪がコナン目がけて空を斬った。
そのとき、一番前にいたアレンがコナンの頭上を越えて跳躍した。魔物の巨体とアレンの体が交差し、岩壁にまっ赤な血が飛び散った。
「大丈夫か？」
着地したアレンが二人にたずねた。
その足元には首を斬り落とされたキラータイガーの死体が転がっていた。
その後も奥へむかうにつれ、魔物の攻撃ははげしさを増す一方だった。
「こいつぁ——」
三体のスカルナイトをベギラマで葬ったコナンが、大きく息を吐いていった。
「あの海底神殿よりしんどいぜ」
コナンのいう通り、魔物の数も、またその強さも海底神殿の比ではなかった。
だがあのころに比べ、アレンの剣の腕もコナンの呪文の威力も数段あがっていたのだ。
それに何より今はセリアが一緒だった。いかずちの杖を手にしたセリアの呪文は前にも増して強力になり、たいていの魔物は一撃で吹き飛んだ。
階段を見つけ、上の階にのぼった一行を新手の魔物が待ち受けていた。全身が炎でできた怪物、

ハーゴンが魔界から呼び寄せたフレイムだ。
しかし剣による攻撃も、ギラやベギラマといった呪文も受けつけないこの魔物も、いかずちの杖の威力の前にはひとたまりもなかった。すさまじい真空の渦を浴びせられ、まるで蠟燭(ろうそく)が吹き消されるように消滅してしまったのだ。
「これで少しは悪魔神官に殺された人たちも——」
セリアは、スカルフ七十七世の言葉を思い出して呟いた。
やがて三人は上へとむかう階段の前に出た。今までの階段よりずっと幅(はば)が狭(せま)く、なんとなく古びた感じだった。
「いったいどこまでのぼればいいんだ？」
階段を見あげながらアレンがいったとき、足元で小さな音がした。
ピシピシッ——と、突然床が崩れた。階段の前に、落とし穴が仕掛(しか)けてあったのだ。
「うわぁ——っ」
瓦礫(がれき)と化した床とともに落下したアレンたちは、はげしい衝撃を受けながら地面に叩きつけられた。
激痛と痺(しび)れで、しばらく三人は立ちあがれなかった。
そこは、天井の高い、巨大な空間だった。三人は、やっと立ちあがって、
「あっ!?」

と、息をのんだ。
それは想像を絶するぶきみな光景だった。暗闇のなか、わずかな燐光に照らされてどこまでも墓標がつづいていたのだ。アレンたちが落ちたのは、地下に広がる巨大な太古の墓地だったのだ。
そのときだった。むっとするような腐敗臭が鼻をつき、
「うっ！」
三人は、慌てて口と鼻を手でふさいだ。
あのどろどろに肉が腐った死体の臭いだ。案の定、そばの墓碑の陰から、腐った死体が音もなくぬーと姿を現した。右にも、左にもいた。全部で三体だ。
アレンは顔をしかめて剣を構えた。横ではコナンがやはりしかめっ面で呪文を唱えている。たしかにこの魔物は今のアレンたちにとって恐ろしい相手ではなかった。ただこの悪臭だけはどうにも我慢ができなかったのだ。
アレンが一匹を両断し、コナンのギラが残った二匹を焼きつくした。だが、すぐにまた新手の魔物が墓標の下から現れてきた。
「悪の手で蘇りし骸よ、本来の姿に戻り安らぎの世界に戻れっ！」
セリアが祈りながらいかずちの杖を振るい、強烈な真空の渦は魔物を吹き飛ばした。
だが、腐った死体はつぎつぎと現れ、三人はたまらず後退した。
「しめた、階段だっ！」

地下墓地の隅に上へとつづく階段を見つけたアレンが叫んだ。だが、そこをのぼるとまたもやつぎの敵が襲ってきたのだ。

ギーン！　ギーン！　ぶきみな金属音を立てながら迫って来たのは、海底神殿で戦ったのと同じ謎の怪物だった。まっ赤な一つ目を輝かせ、怪物はアレンに襲いかかった。

「こいつぅー！」

敵の第一撃をかわしたアレンは猛然と斬りかかった。ガーン！　怪物はアレンの剣を、手にした半月刀で受けとめた。その瞬間、アレンは剣から妙な振動を受けた。今まで感じたことのない嫌な衝撃だ。

「クソッ！」

アレンは怪物のつづけざまの攻撃を避け、すきを見てまっ赤な一つ目に突きを入れた。以前の戦いでそこが弱点だと知っていたからだ。

怪物の目から赤い光が消え、その全身から細かい火花が散った。

「やった！」

コナンが歓声をあげた。ところが――。

ピシッ！　なんと引き抜いたアレンの剣が、柄元から折れてしまったのだ。

十六歳の誕生日にローレシアの後継者として父、アレフ七世から授けられた大事な剣を失いアレンは呆然としてたたずんでいた。

「仕様がないさ、いくら名剣でも今まで数えきれないほどの魔物を倒してきたんだから」
コナンはそういって自分の剣をアレンに差し出した。
「おれは滅多に剣なんか使わないからな」
アレンにはコナンの心使いが嬉しかった。
だが、今までのものよりずっと細身で華奢なこの剣でハーゴンと戦えるだろうか？
「こうなったら、早くそのロトの剣を復活させようぜ」
そんなアレンの気持ちを悟ったかのようにコナンがいった。
こうなったら稲妻の剣を見つけ、その力でロトの剣を復活させなくてはならないのだ。
三人は、さらに上の階にのぼった。そして、さらに奥にすすんで、前方の光景に、思わず息をのんだ。
なんと、巨大な空間の、あのおどろおどろした墓場に出たのだ。
三人は、一瞬自分の目を疑った。墓場を出てから二つも階をあがったはずなのだ。
だが、どう見てもあの墓場だった。さっき倒した腐った死体の破片が散乱していた。
「ど、どういうことだ、これは——!?」
三人は、あ然と立ちつくした——。

6　ロトの剣(つるぎ)

数日が過ぎた——。
だが、正確に何日過ぎたかは、アレンたち三人にはわからなかった。
ずっと暗い洞窟をさ迷っていたからだ。巨大な空間の墓場一帯の迷路は、なんとか抜けることができたが、今度は別な迷路に迷いこんでいた。
迷路は、いくつもの通路に分かれていた。だが、どの通路を行っても、必ず突きあたりにぶつかるか、また同じところに戻ってしまう、そのどっちかなのだ。いわば無限の回廊なのだ。そのうえ、魔物たちがつぎからつぎへと襲いかかってきた。
三人は、すっかり疲れ果てていた。
「ねえ、アレンの誕生日——。今日あたりかしら——」
セリアが、思い出したようにいった。
三人が、どっちに行っていいかわからず、階段の一番下の段に腰かけてひと休みしたときだ。
「どってことないよ」
アレンは、明るく笑った。
ベラヌールの港に船が着いた三日後、女神(イシュタル)の月の最初の日が、アレンの十八回目の誕生日だっ

たのだ。

「去年は、ベラヌールで祝ってもらったし――。セリアに比べたら――」

「――」

セリアは、黙って溜息をついた。

十六回目の誕生日の直前に、ムーンブルクが襲撃された。十七回目の誕生日は、孤島の洞窟でひとり迎えたのだ。二年つづいて、不幸な誕生日を迎えているのだ。

「でも、今度の誕生日は、盛大にやってやるよ。ハーゴンを倒してなっ」

アレンはそういってセリアを見つめた。

コナンは、レシルのことを思い出しながら、じっと左手の小指を見つめていた。レシルと買物に行く約束の指切りをした小指を――。

そのときだった。「ふっふふふふふふ」と、ぶきみな低い笑い声がして、

「あっ!?」

三人は、すばやく身構えた。

闇のなかから巨大な魔物がゆっくりと姿を現したのだ。

背丈はゆうにアレンの三倍はある。全身を硬質の鱗がおおい、背中には毒々しい色の翼が生えている。額には鋭い二本の角があり、大木のような尾にも何本かの刺が突き出ていた。はげしい殺気が三人を捕らえた。巨体から発する威圧感は、今まで戦ってきた魔物のなかでも飛び抜けてい

た。

できるっ――！

アレンは、持ち慣れない剣を構え直すと敵の出方をうかがった。

こいつに匹敵するのは、おそらく海底神殿で戦った魔物ぐらいだ――。

アレンの読みは正しかった。目の前の敵は近衛指令官ベリアル直属の部下、連隊長のアークデーモンだった。

「バズズの敵を討たせてもらおうっ！」

「バズズ⁉」

アレンが、聞き返した。

「そうだっ！　海底の洞窟で戦ったはずだっ！」

「そうか、おまえもあいつと同じように魔界から来た魔物かっ！　おまえも一緒にムーンブルクを襲撃したんだなっ⁉」

セリアは、「えっ⁉」となって、さらに険しい顔でアークデーモンをにらみつけた。

「それがどうしたっ⁉　わしら魔界の者にとっては、破壊こそがすべてなのだ！　そのために、魔界から派遣されたのだっ！　愚かな人間どもがどうなろうと、わしらの知ったことではないわっ！」

ブオーッ――。アークデーモンは、いきなりまっ赤な火炎を吐いた。今までのどんな魔物の

ものより強烈な炎だった。三人はすんでのところで火炎を避け、アレンを中心に左右に散った。
右に回ったセリアは、怒りをこめていかずちの杖を振りおろし、左に跳んだコナンも全身の力をこめてベギラマの呪文を唱えた。
「馬鹿め！　その程度の力でわしと戦えるとでも思っているのかっ！」
アークデーモンの巨大な翼がすさまじい突風を起こした。
風はいかずちの杖から放たれた真空の渦とぶつかり、轟音が地下道に谺した。そして、つぎの瞬間、魔物はベギラマの電撃にむかって額の角から電光を放ったのだ。
白青色の稲妻が周囲の岩肌を照らし出し、爆発の衝撃にコナンとセリアの体が壁に叩きつけられた。必殺の気合いをこめた二人の攻撃も、この魔物の前には無力だったのだ。
だがアークデーモンが電撃と真空の渦を防いでいるすきに、アレンは一気に間合いを詰めていた。
「トリャーッ！」
跳躍したアレンはまっこうから魔物の頭部に剣を振るった。
カキーン――。まるで鋼を打ったような甲高い音がし、長剣は簡単に弾き返された。
「ちくしょう」
着地したアレンは唇を噛んだ。少なくとも、自分の剣なら手傷を負わせられた筈だからだ。
「おのれ小癪なっ！」

額を撃たれて怒り狂ったアークデーモンは、つづけざまに火炎を吐いた。
「まずいっ！　いったん退却だ」
ロトの楯で火炎を防ぎ、コナンとセリアをかばいながら、アレンはジリジリと後退した。
「逃さん！」
アークデーモンは、巨体に似合わぬすばやさであとを追ってきた。
三人は必死に通路を走った。右に曲がり、左に折れ何とかアークデーモンを振り切ろうとした。
「しまった！」
いくつ目かの角を曲がったアレンが叫んだ。行きどまりだったのだ。
そのとき、三人の目に左手の壁にある縦長の狭い暗闇が目に入った。人間ひとりが抜けられるほどの通路だ。巨体のアークデーモンには、頭も入れられない狭さだ。
壁に追いつめたアークデーモンが炎を吐くと、間一髪かわして三人は猛然とその通路に飛びこんだ。だが、通路だと思ったのは、窓のようなものだったのだ。三人は、宙に投げ出されて、
「うわあああっ！」
悲鳴をあげながら、まっさかさまに闇のなかに落下した。
アークデーモンは、舌打ちをすると、すばやく踵を返した。
三人が、激痛に耐えながらやっと身を起こすと、そこは地中から露出した巨大な岩と岩が造り出した空間になっていた。その奥の暗闇のなかに、まぶしい光が見えた。

三人は、光にむかって駆け出した。外の明かりだと思ったのだ。だが、光はすぐそばからだった。

岩と岩にはさまれたくぼんだところに、長方形の木箱があった。古めかしいが、木彫のある立派な箱だ。光は、その箱の蓋のすき間からもれていたのだ。

三人は、竜王の子孫がいっていた「稲妻の剣の電撃を浴びせれば――」という言葉を思い出していた。

「まさかこのなかに――」

箱に駆け寄ったアレンが蓋を開いて、

「あっ!? こ、こいつは――!?」

思わず目を見張った。

覗きこんだコナンもセリアも同様に目を見張った。箱には大振りの剣がひとつ入っていた。鋭い刀身が放つほの白い光が、三人の顔を照らし出した。

なめらかに湾曲した片刃の剣で、刀身全体と柄には素晴らしい彫刻がほどこしてあった。城の宝物殿や武器庫でさまざまな剣を見慣れている三人にとっても、初めて目にする見事な細工だった。

「やはり、これが稲妻の剣――」

そういいながら手をのばしたコナンは、剣の柄を握ったとたん、顔をこわばらせた。

剣から形容し難い振動が伝わってきたのだ。同時にアレンも後ろに背負ったロトの剣が、振動し始めるのを感じて体を震わせた。
「アレン！」
コナンが叫び、アレンは慌てて背中の剣を抜いた。
二人はまるで決闘でも始めるかのように剣を構えてむかい合った。
二振りの剣が発する振動は、いまや強烈な波動となって周囲の空気を震わせていた。
バリバリバリッ！　稲妻の剣はロトの剣の刃先がむくなり怪音を発した。
つづいて刃先からはげしい電光がほとばしった。それはまさに稲妻そのものだった。そして、アレンの手にしたロトの剣は、その電光を受けるとピカッと輝いたのだ。
コナンの持つ稲妻の剣から、アレンの持つロトの剣にむかって、奔流となった電光は流れつづけた。
そして――その電光が収まったとき、三人はハッとして二本の剣を見つめていた。
コナンの握った稲妻の剣は、まるで錆びついたようにその光を失っていた。
封じこめられていた力をすべて使いつくした稲妻の剣は、その役目を終えたのだ。
そして、アレンは自分の手にしているロトの剣に目をやってハッとなった。
鏡のような青々とした刃、油がしたたりそうな光沢、華麗なロトの紋章の鍔、美しい宝石が散りばめられた柄――まさにアレンが想像していた通りの剣だった。ほどよい重さで、手にしっく

りと合う。ロトの剣は、やっと往年の輝きと力を復活したのだ。
アレンは、ぐっと力を入れて握りしめた。と、ぶるぶるっ——と剣を持つ手が震えた。手が離れなくなったかと思うほど、ぴたりと柄に吸いついている。
急に、剣から不思議な力が伝わってきた。アレンの全身がはげしく震え、その力がまるで血液のように全身を駆けめぐった。不思議な力がみなぎって、今にも爆発しそうになった。と同時に、胸の奥から新たな熱い闘志がこみあげてきた。その目がぎらぎら燃えていた。
つぎの瞬間、轟音とともにアレンの背後で壁が崩れ落ちた。
アークデーモンが追いついてきたのだ。
「手間をかけさせおって！ だがもはやこれまでっ！」
魔物は勝ち誇って叫んだ。しかしアレンは落ち着いていた。ロトの剣の力が不思議な自信を与えていたのだ。
「死ね——っ！」
アークデーモンが炎を吐き、セリアとコナンがサッと身をかわした。
だがアレンは避けようとはしなかった。まっこうから楯で炎を受けとめると、魔物にむかって斬りかかったのだ。
「トリャーッ！」
気合いとともにアレンの体が宙に舞った。

ロトの剣が小さくきらめいた。そして着地したアレンは、まるで何事もなかったかのように剣を鞘に収めたのだ。
「？？？」
アークデーモンは、カッと眼を大きく見開いた。その顔に、何ともいえない怪訝そうな表情が浮かんだ。
この魔物が生まれて初めて見せる表情だった。
「ア、アレン!?」
セリアが声をかけ、コナンも慌ててアレンに駆け寄った。
二人ともまだ何が起こったのか理解できずにいたのだ。だが、やっとアークデーモンの体に変化が起き始めた。額の二本の角の間にプツプツと泡が噴き出したのだ。まっ赤な血潮の泡だった。
やがて、額から真下にむかってスーッと音もなく赤い筋が一本走ると、
「グゲーッッッッ」
アークデーモンの巨体は、縦にまっ二つに割れ、轟音を立てて左右に倒れた。
その場を立ち去った三人は、ふたたび迷路に迷いこんだ。
ロトの剣に勇気づけられた三人は、根気よく外につながる通路を捜した。
魔物たちは、つぎつぎに襲いかかってきた。鉄の斧を振りかざして集団で襲いかかる蛮族のバ

ーサーカーや、炎と巨大な嘴を武器に頭上から襲いかかる翼竜のメイジバピラス、炎と呪文で襲いかかるシルバーデビル、強力な炎を吐く獰猛なドラゴンたちだ。
さらには、以前戦ったことのあるガーゴイルや、オークキング、はぐれメタルなども執拗に襲いかかってきた。
復活したロトの剣の威力は、三人の戦いを楽にした。また、単にロトの剣が復活しただけでなく、それを握ることによってアレン自身も以前より数段力が増したのだ。
なかには、アレンの姿を見ただけで、殺気を感じてこそこそ逃げ出す魔物もいた。
数日後――。やっと地獄の迷路を脱出した三人は、外に出る階段を見つけ、喜び勇んで長い階段を駆けのぼった。一歩のぼるたびに、寒さが増していった。出口に近づくまでには体の芯まで冷えきっていた。そして、洞窟から飛び出して、
「あっ!?」
顔を凍てつかせて立ちつくした。
異様な夜の光景が広がっていた。荒涼とした雪原を、地鳴りを立てて烈風が吹き抜け、そのむこうに斬り立った険しい雪の山脈が天を突くようにそびえていた。そして、その上空をおおった暗雲が絶えず鋭い稲光を発していたのだ。

7　風の亡霊

ちょうどそのころ――。
大草原にそびえる風の塔を、崖の上からじっと見つめているひとりの若者がいた。
腕や胸元から、白い包帯が覗いている。ガルドだった。アレンたちとの闘いで重症を負ったガルドは、傷が治るまでずっと孤島の洞窟にいたのだ。
その間、ガルドはずっとセリアのいった言葉が気になっていた。ガルチラののことが――。だから、傷が癒えるとまっ先にこの風の塔にやって来たのだ。
ガルドは、手にした銀の横笛を見ると、崖の上からすーっと姿を消した。
やがて、風の塔から美しい笛の音色が静かに流れた。
塔の最上階に姿を現したガルドは、無心に笛を吹きつづけた。
風の塔の上空に、美しい満月が出ている。
ざわざわざわ――ざわざわざわ――。
ほんの少し緑が色づき始めた大草原を、風の渡る音がした。
笛を吹くガルドの長い髪がなびいた。
美しい笛の音色に誘われるように、風が吹いてきたのだった。

するとどこからともなく風に乗ってやさしい声が聞こえてきた。女の声だった。
「——わたしは、この日のくるのをどんなにか待っていたことでしょう——」
「だ、だれだっ⁉」
ガルドは、思わず笛を吹く手をとめて叫んだ。
「昔からこの風の塔に棲んでいた魔女です——。こうして風の亡霊となって、ガルチラさまのご子孫の訪ねて来られるのを、ずっと待っていたのです——」
「ガルチラ⁉　おれがガルチラの子孫だっていうのか⁉」
「はい——。あなたは、まぎれもなくガルチラさまの血をひきし方——。その銀の横笛とその美しい笛の音が、なによりの証拠——」
「ふっ。銀の横笛ならこの世にゴマンとあるさ！」
「ならば——。どこでその旋律を教わったのです——？　その美しい旋律を——？　ガルチラさまがお吹きになっていたのとまったく同じ旋律を——？」
「な、なにっ⁉　同じ旋律っ⁉」
「はい——」
「そ、そんなのは偶然だっ！　おれはだれにも教わっちゃいない！　笛を吹くと勝手に手が動くだけだっ！」
「それが——、それが血のなせる業——。あなたにはガルチラさまの血が脈々と流れているので

す――」
そういって、魔女はガルチラの話を始めた。
勇者アレフとのこと、風の国のこと、王妃と王子のこと、銀の笛のことを――。
そして、精霊ルビスの言葉に従って生きてきた自分のことを話すと、
「ガルチラさまの血をひきし方が、生きのびていたということを知っただけでわたしは満足です――。これで思い残すことはありません――。もう二度あなたの前に現れることはないでしょう――」
そういい残して、魔女の声は風の音とともに遠のいていった。
「ま、待ってくれ！」
ガルドは、慌てて叫んだ。
「ひとつだけ教えてくれ！　この指輪のことを知っているか!?　この祈りの指輪のことを!?」
「――ガルチラさまの王妃の家は、代々魔道士だったとか――。その家系に伝わるものだということを聞いたことがありますが――、それ以上のことは――」
魔女の声は、遠くからかすかに聞こえた。
腰までのびた長い髪が、ふたたびなびいた。
ガルドは、あ然としてその場に立ちつくしていた――。

第十章　死闘・ハーゴンの神殿

古代より天空に一番近いとされてきたロンダルキア――。

下界と完全に隔離され、人間が一歩たりとも近づくことができないとされてきたこの謎の地は、今では邪神を崇める大神官ハーゴンが支配する邪悪の地となってしまったが、四〇〇年ほど前までは、神々の棲む聖なる山として人々から崇拝されてきたところだ。

地獄のような洞窟をやっと抜け、このロンダルキアに足を踏み入れたアレンたちは、邪神の砦・ハーゴンの神殿を捜して旅をつづけていた。

天を突くような断崖絶壁の山と山の間を、荒涼とした雪原が、まるで河のように蛇行しながら奥へ奥へと果てもなくつづき、毎日吹雪と烈風が吹き荒れていた。春の気配は、どこにもなかった。

洞窟を出てから、すでに二〇日近くになろうとしていた。

あと数日で暦は女神の月から王妃の月に変わり、季節は春から初夏に移るのだ。

だが、ロンダルキアでは、永久に冬がつづくのではないかと思われた。

1 幻（まぼろし）の神殿

雪原の急な斜面（しゃめん）をのぼりきると、前屈（まえかが）みにならなければ歩けないほどの寒風が、うそのようにやみ、アレンたち三人はほっとひと息ついた。

だが、安心はできなかった。風がやんだかと思うといきなり吹雪になったり、烈風が地鳴（じな）りを立てて吹き荒れたりするからだ。両側に断崖絶壁の山々が天を突くようにそびえているから、その谷間にある雪原は風の通り道なのだ。

三人は、風のないうちに少しでも前進しようと、足を速めた。

そのときだった。目の前の雪の表面がゆらゆらと、陽炎（かげろう）のように揺（ゆ）れた。

アレンは、一瞬（いっしゅん）目の錯覚（さっかく）かと思った。周囲の雪の照り返しのように見えたのだ。

だが、陽炎のようにぼんやりと見えたそれは、雪とほとんど変わらない白色の炎（ほのお）となり、どんどん大きくなって三体の不定形の魔物（まもの）に変わったのだ。

三人は、慌（あわ）てて身構えた。

魔物は、ハーゴンが大冥界（だいめいかい）から召還（しょうかん）した冷気の精霊（せいれい）、ブリザードだった。

アレンは、初めて出会った敵に一気に接近した。

気合いとともにロトの剣（つるぎ）が一閃（いっせん）し、魔物の体を両断した。

ところが、横一文字に斬り裂かれたブリザードは煙のように揺らめくと、たちまちもと通りの姿になり、ブオーッ！　と、はげしい冷気を吐き出したのだ。凍るような寒さに、アレンはたまらず後退した。三匹の魔物は、ひるんだアレンを追撃して来た。

そのとき、後方にいたセリアが、いかずちの杖を振るってバギの呪文を唱えた。真空の渦が魔物の体をバラバラに斬り裂いた。だが、ブリザードはバギの呪文が巻き起こした突風がおさまると、すぐにもと通りに復活してしまった。

同じ精霊属である炎の怪物、フレイムを簡単に葬ったセリアのバギもブリザードには効果がなかったのだ。

「しぶといやつだ！」

コナンが連続して放った火球と電撃も、魔物は巧みにかわして接近して来た。

攻撃の決め手を欠いた三人をあざ笑うように、三匹の魔物はつづけざまに冷気を吐きかけた。真正面から冷気を浴びたコナンの全身に、いいようのない悪寒が走った。つづけて今までより、数段強烈な寒気が襲ってきた。

ブリザードは相手の体力を奪い、守備力をさげるルカナンの呪文を使ったのだ。

「くそっ！　しゃれたまねをしやがって」

コナンはつづけて攻撃をかけようとする魔物の機先を制して、マホトーンの呪文を唱えた。

魔法を封じられた魔物は、冷気を吐きながら前進してきた。
「アレン、援護して！」
セリアはそういうといかずちの杖を高くかかげ、低い声で呪文を唱え始めた。
ロトの楯で冷気を防ぐアレンの背後で、セリアが呪文を唱える声が徐々に高くなった。
防戦一方になった三人に、ブリザードたちは一気に襲いかかった。その瞬間――。
「イオナズーン！」
セリアが放った目もくらむような白熱球が爆発した。
閃光は周囲の雪原を照らし、灼熱の波動は三匹のブリザードの体を一瞬にして消滅させた。
「初めてだったから距離の見当がつかなくて――」
セリアは、額の汗を拭いながらいった。
三人は、ふたたび歩き始めた。やがて、雪原から岩肌の露出した荒野に変わり、両側の斬り立った崖と崖との間が急に狭まってきた。三人は、不安になった。もしこの先で行きどまりになっていたら――そう思うと愕然とした。二〇日もかけてやっとここまでやって来たのだ。といって、洞窟を出てからこの道しかなかった。両側の山と山の間を、雪原がつづいていたのだ。三人は、これが正しい道だと信じるしかなかった。
その夜、三人は岩と岩の窪地を見つけて、そこで野宿し、翌朝、うっすらと上空が明るくなりかけたころ、そこを出発した。

奥へすすむと、さらに崖と崖の間が狭まった。歩数にしたら一〇〇歩にも満たない幅なのだ。しかも、まっすぐでないから見通しもきかない。道は、右へ左へと大きく蛇行していた。ほとんど、巨大な隧道を通っているような感じがした。

だが、さらに奥へすすんで、右に曲がったとき、急に目の前が開けた。

荒涼とした大きな盆地が広がっていたのだ。その周囲を、雪をかぶった険しい山脈がおおっていた。そして、盆地の中央の要塞のような岩山に、城のようなぶきみな建物がそびえていたのだ。

ハーゴンの神殿――。

三人は、足を速めた。

岩山にそびえるハーゴンの神殿は、左右対称の七階建ての巨大な建物だった。

最上階の七階は半円形のドームで、その上に尖塔がそびえている。

やっと神殿が肉眼ではっきり見えるところまで接近すると、その先を巨大な奇岩の群が拒んでいた。

民家ほどもある大きな奇岩が何百何千と地中から露出していたのだ。おそらく、このような岩の群が、神殿の周囲をぐるりと取り囲んでいるのだ。

三人は、まるで迷路のような奇岩と奇岩の間を通って、神殿に接近した。

やっと奇岩の群を抜けると、すぐ目の前に神殿の城門があった。ローレシア城の城門とほぼ同じぐらいの大きさだ。厚い木の扉がぴたりと閉ざされていた。その城門の奥に、おどろおどろし

た黒曜石の神殿がそびえていた。
三人が城門の扉の前に近づいたとき、いきなり城門の左右の岩陰から、鉄の斧を振りかざした魔物の群れがつぎつぎに宙を飛んで襲いかかってきた。
コナンとセリアは慌てて身をかわし、アレンはすばやくロトの剣を抜いて一瞬のうちに三匹を斬り倒していた。魔物は、蛮族のバーサーカーだった。一〇匹あまりいた。
さらにアレンがバーサーカーたちに斬りかかろうとしたときだ。アレンが、背後に殺気を感じて振りむいた。
とてつもない巨人が三人を見おろしていた。南方の蛮族のような衣装をまとい、手には大木ほどもある鋼鉄の棍棒を握っている。全身は赤銅色に輝き、巨大な頭部にはひと抱えはありそうな単眼が光っていた。そして、そのひとつ目の上には一本の鋭い角が突き出している。アレンたちは、この怪物の膝までもなかった。
近衛司令官ベリアルの配下で、魔界随一の怪力の持ち主、アトラスだった。
「バズズとアークデーモンの敵、討たせてもらうぞ！」
アトラスはそういうなり、すさまじいいきおいで棍棒を振りおろした。
アレンはとっさに身をかわした。鋼鉄の棍棒が唸りをあげて頭上をかすめると、地面にめりこんだ。
「おまえも魔界から来た魔物か!?」

アレンは叫びながら斬りつけた。棍棒とロトの剣がぶつかり火花が散った。

ガキッ！　鈍い音にアレンは慌てて刀身に目をやった。以前、父、アレフ七世に譲られた剣が折れたときのことを思い出したのだ。しかしロトの剣には刃こぼれはおろか、一点の曇りもなかった。巨人は棍棒を握り直すと、ベッ！　と唾を吐いた。

「いつまでかわしつづけられるかな？」

アトラスは戦いを楽しむかのように、残忍な笑みを浮かべアレンに襲いかかった。

コナンとセリアは、すばやく魔物の背後に回り、つづけざまに呪文を唱えた。

バギの真空とギラの火球が巨体に炸裂し、破裂音が響いた。

だが、アトラスは呪文の攻撃をまったく無視して、アレンを狙いつづけた。

火炎も電撃も、いや一瞬でブリザードを倒したセリアのイオナズンさえ、この怪物には何の効果もなかったのだ。

跳躍し、地面を転がり、アレンは必死で攻撃をかわしつづけた。

しかし、それが精一杯だった。相手の攻撃をかわすだけで、反撃することができないのだ。アトラスはさらに棍棒を振り回した。突然後方で悲鳴があがり、血飛沫が城門に飛び散った。

それた棍棒が、攻撃の機会をうかがっていたバーサーカーの群れを直撃し、数匹がはるかかなたまで吹っ飛んだのだ。

アレンの呼吸は徐々に乱れ、跳躍する高さはさがっていた。

全身、汗まみれのアレンとは対照的に、アトラスは呼吸ひとつ乱れていなかった。
「とどめだーっ！」
アトラスは一声叫ぶと、一層高く棍棒を振りかぶった。
ガーン！　正面から打ちおろされた一撃を、アレンはロトの剣で受けとめた。
全身をすさまじい衝撃が駆け抜け、激痛に意識が遠のいた。だが、
「ギャオーッ！」
悲鳴をあげたのは、アトラスの方だった。
額の巨大な単眼には、握りの部分から折れた棍棒が、深々と刺さっていた。たび重なるはげしい衝撃で、鋼鉄の棍棒にひびが入っていたのだ。
半狂乱と化したアトラスは、握りしか残っていない棍棒を無闇やたらと振り回した。
「たーっ！」
跳躍したアレンは渾身の力をこめてロトの剣を振りおろした。
断末魔の悲鳴が轟いた。胸から毒々しい鮮血を噴き出し、アトラスは城門の扉に激突した。分厚い扉が砕け散り、巨人は地響きをたてて横転した。
ロトの剣の鋭い刃先は、アトラスの心臓を捕らえていたのだ。
二、三度痙攣した巨人はそのまま硬直して動かなくなった。
三人は、すばやく城門を抜け、奥の神殿の正面にある玄関に飛びこんだ。

その場所でアレンは、驚いて立ちどまった。
なんと、そこはローレシア城の宮殿そのものだった。柱や壁や天井の形や色まで同じだった。
さらに、大理石の玄関から奥の国王の間までつづく長い回廊には、「勇者アレフの物語」の壮大な絵が描かれていたのだ。旅立ちから始まって、魔物との闘い、そして竜王との闘いとつづき、国王の間で凱旋して終わっていた。
だが、国王の間まで行ってアレンたちはさらに驚いた。
正面の玉座にアレフ七世が座っていたのだ。
「ち、父上っ!?」
アレンは、一瞬自分の目を疑い、
「ど、どうなってるんだよ、これは――!?」
コナンとセリアも、あ然とした。
「よくぞ、ここまでたどり着くことができたな。さすがは、わが息子。勇者ロトとアレフの血をひきし者よ」
アレフ七世は、にこやかに微笑んだ。
「でも、どうしてこんなところにっ!?」
アレンには、まだ信じられなかった。
「さあ、わしに邪神の像を渡すがいい」

「な、なんですって!?」
「実はな、アレン――」
アレフ七世は、鋭い目でにらんで、にやりと笑った。
「何を隠そう、わしが大神官ハーゴンなのだよっ！」
「そ、そんなばかなっ!?」
「信じられぬのも無理はない。だが、今さら隠しても意味はなかろう。アレフ七世は欺くための仮の姿！　邪神を崇め、この世に暗黒の世界を構築することこそがわしの使命！」
「うそだっ！」
すかさずコナンが叫んだ。
「まやかしだ！　アレフ七世がハーゴンのはずがないじゃないかっ！」
コナンとセリアが、つづけざまに呪文を唱えた。
同時に、アレンもロトの剣をかざして宙に跳んだ。本能的に、敵だと見破ったからだ。
久し振りにアレフ七世を見て驚きはしたが、アレンは親子としてそれ以上のものを感じなかったのだ。互いの血が呼び合うような懐かしさもなかった。むしろ、肌の裏側がざらつくような悪寒を感じたからだ。
強烈な火炎と真空の渦を浴びたアレフ七世が、いきおいよく宙に跳ぶと、焼け焦げた服が粉々に斬り裂かれ、なかから恐ろしい巨大な魔物が爪を剥いて正体を現したのだ。

その直後だった。魔物が悲鳴をあげ、黒々とした鮮血が宙に飛び散ったのは――。アレンの剣が、一瞬にして魔物を八つ裂きにしていたのだ。
血まみれの首や翼や手足が、ばらばらになって床に飛び散った。魔物は、デビルロードだった。
「くそっ、ふざけやがって!」
散乱した魔物の死骸を見ながら、アレンが吐き捨てるようにいった。
「これはきっとハーゴンの幻術だっ!」
コナンが、王の間を見回しながらそういうと、セリアの首にかけているルビスの守りを見た。
「ルビスの守りがあれば邪神のまやかしを打ち破ることができる――」といったカンダタ十八世の言葉を思い出したからだ。
「やってみるわ!」
セリアは、ルビスの守りの飾りの部分を両手でそっと握りしめると、
「精霊ルビスよ――! わたしたちに愛の助力を――!」
瞳を閉じて、必死に祈りを捧げた。
すると、ピカーッ――と、ルビスの守りがまばゆい光を部屋いっぱいに放つと、突然、ゴオオオオオッ――すさまじい地鳴りとともに床がはげしく揺れ動き、柱や壁も左右にはげしく揺れたのだ。そして、まわりの柱や壁や絵や椅子が消え始めた――。
三人は、恐怖に顔を強張らせながら、立ちつくしていた。一瞬のできごとだった。地鳴りも揺

れもなくなると、国王の間が消えたあとに、巨大な礼拝堂が広がっていた。一〇〇〇人も二〇〇〇人も収容できそうな巨大な礼拝堂だ。この礼拝堂を、二〇本ばかりの巨大な円柱が支えていた。一階がすべてこの礼拝堂になっていた。

そして、三人が立っていたところが、祭壇のまん前になっていたのだ。祭壇には、邪教徒の魔鳥の飛翔する像が祀られていた。三人が立っている床には大きな十字が施してあった。十字の部分だけ半透明の青い石が敷いてあった。もちろん、魔物の死骸も消えていた。

礼拝堂は、森閑としていた。魔物たちの気配もなかった。

「上にあがる階段を捜そう！」

アレンがそういって、三人は三方に散った。

だが、三人ともすぐ祭壇に戻ってきた。どこを捜しても階段はなかったのだ。

「ちきしょーっ。どうやったら上に行けるんだっ！」

コナンは、悔しそうに高い天井を見つめた。

そのとき、アレンは、はっとなった。「邪神の像がなければ、ハーゴンの神殿には入れんぞ――」といった竜王の子孫の言葉を思い出したのだ。ひょっとしたら、城門や玄関のことではなく、このことをいっていたのか――と。

アレンは、革袋から邪神の像を取り出して、床の十字の中心に立ち、祭壇にむかって邪神の像をかかげてみた。すると、邪神の像の三つ目が赤く光った。

その光に呼応するかのように、突然三人の目の前がまっ暗になると、三人の体がものすごい圧力に締めつけられながら、ふわっと浮上したのだ。つぎの瞬間、
「あーっ!?」
三人は、あ然とした。
目の前の光景が変わっていたのだ。礼拝堂ではない、どこかの通路に立っていたのだ。目の前に、上にのぼる階段があった。
そこがどこなのか理解するまで、三人には少し時間が必要だった。
「そうか、上に移動したんだ! 一瞬のうちに!」
アレンが叫んだ。

2 ベリアル

「よし、ハーゴンを捜すんだっ!」
アレンは邪神の像を抱えたまま、まっ先に階段を駆けのぼった。
さらに上の階へ、上の階へとのぼった。
階段をあがると多くの魔物たちが待ちかまえていた。緑色の鱗におおわれたドラゴンは紅蓮の炎で、黄銅色のデビルロードは強力な攻撃呪文で三人に襲いかかった。

そして、ロンダルキア山脈の洞窟でアレンの剣を台なしにしたあの単眼、四本足の怪物が今度は複数で出現したのだ。だが、さしもの怪物も本来の力を取り戻したロトの剣の前には、まったく無力だった。アレンは、瞬く間に数体の怪物の首を斬り落とした。

三人はさらに上にのぼると、中央の部屋に飛びこんだ。

ローレシア城の大広間ほどもある部屋の床には深紅の絨毯が敷かれ、正面には高い背もたれのついた大きな椅子が置かれている。

その椅子に腰をおろした魔物を目にしたとき、三人はいい知れぬ戦慄を感じていた。

額には二本の角が生え、背中にはコウモリのようなぶきみな翼がついている。全身は金色にきらめく鱗におおわれ、がっしりとした手には三叉の矛が握られていた。

だが、その魔物からは何の気配も伝わってこなかった。今までの魔物が放った強烈な殺気も、戦いを前にした緊張感も。いやそればかりではない、呼吸による大気の動きさえ感じられなかったのだ。

魔物はハーゴン軍団の近衛司令官、悪魔族の最高位にあるベリアルだった。

「気をつけろ――」

アレンはベリアルをにらみながら二人にいった。

「今までの相手とはわけが違う――」

その言葉は半ば自分自身にむけたものでもあった。

そしてセリアとコナンも無言で頷いた。アレンと同じことを考えていたのだ。
ベリアルは三人を見るとニヤッと笑った。
「待っておったぞ。さあ、邪神の像を渡すがいい」
アレンはベリアルの言葉に油断なく身構えながら、邪神の像をしまおうとした。
そのとたん、魔物は音もなく椅子を立つと、スーッと前に出た。
巨大な体からは信じられないほどすばやく、滑らかな動きだった。
ブォーッ！　すさまじい火炎球を浴びせられたアレンは、横に跳んで身をかわした。
だが、ベリアルはアレンに逃げる余裕を与えなかった。すぐに二発目の火炎球を吐き出していたのだ。ロトの楯で必死に火炎球を防ぐアレンの全身を、強烈な熱気がつつみこんだ。
邪神の像がアレンの手から離れ、部屋の隅まで転がった。
コナンとセリアは、アレンを援護しようと即座に呪文を唱えた。ギラの火球とバギの渦が金色の巨体に命中する。しかし、ベリアルには何の効果もなかった。
「こざかしいっ！　わが眷族の恨み、晴らさせてもらうぞっ！」
ベリアルの額にある二本の角が光を放ち、白熱球が飛び出した。ベリアルはイオナズンの呪文を唱えたのだ。二人の体が爆発の衝撃で床に叩きつけられた。
その間に体勢を立て直したアレンは、一気に間合いを詰めるとベリアルを急襲した。
ロトの剣が一閃し、ベリアルの脇腹から紫の鮮血が噴き出した。が、ベリアルにはまったく動

じる様子がなかった。
「フフフッ」
ぶきみに笑う魔物の額で二本の角が光った。
すると見る間に脇腹の傷が癒えてしまったのだ。回復の魔法中、最高の威力を持つベホマの呪文だった。愕然とする三人に、ベリアルはつづけざまにイオナズンを放った。
爆発音が轟き、三人は部屋の反対側まで弾き飛ばされた。
そのすきにベリアルは、すばやく邪神の像を拾いあげていた。
「やっと手にいれたぞ――やっとな。これで大冥界から魔神を、破壊神シドーさまを呼ぶことができる――ハハハハッ」
そういうと、またもやベリアルの二本の角が白光を発した。するとベリアルの手から邪神の像が瞬く間に消え失せた。魔力で、像を一瞬にして転送したのだ。
「邪神の像は、すでに大神官ハーゴンの手に渡った。これで世界はわれら魔族のものだっ！」
ベリアルは叫ぶなり三人にイオナズンの白熱球を浴びせた。
その爆炎に、床の絨毯が千切れ飛び、深紅の切れ端がヒラヒラと舞った。
倒れた三人が立ちあがる間もなく、ベリアルはつづけざまに二本の角を光らせた。
光は魔物が手にした三叉の矛の先端に集まり、強烈な電光となってアレンたちにふり注いだ。
「うわーっ！」

電光をまともに浴びたコナンが悲鳴をあげた。
「コナン、大丈夫か？」
アレンは懸命にコナンに近寄った。
だが、ベギラマ以上の強烈な電撃を受けたにもかかわらずコナンは無事だった。
「また、こいつに助けられたよ――」
コナンは、胸のポケットから粉々に砕けた命の石を取り出して笑った。
「運のいいやつめ。だがもはやこれまでっ！」
ふたたび矛に白光を集中させたベリアルはジリジリと二人を追い詰めた。
セリアは何度か二人を助けようと、イオナズンの白熱球をベリアルにむけて放ったが無駄だった。白熱球は矛のひと振りで、むなしく宙に消えてしまったのだ。
あの角だ、あの角がやつのすべての力の源なんだ――。
コナンを助け起こしながら、アレンはベリアルに近づく方法を考えていた。
今までの戦いからベリアルの力の、魔力の源泉が額にある角だと察知していたのだ。だが、このままでは近づくことはできそうにもなかった。そのときだ。突然どこからともなく笛の音が聞こえてきたのだ。澄んだ美しい音色だった。
「ガルドだわっ!?」
セリアが叫び、アレンとコナンも周囲を見回した。

部屋の一番奥、ベリアルが座っていた椅子のむこうでカルドは悠然と笛を吹いていた。そしてガルドの出現に、いや、笛の音に慌てたのはベリアルの方も同じだった。

「エーイッ！　やめろっ！　この裏切り者が！」

異常に取り乱したベリアルは、ガルドの方にむき直ると矛を構えて襲いかかった。

アレンがそのすきを見逃すはずはなかった。背後の殺気にベリアルが振りむいたとき、すでにアレンは床を蹴って跳躍していた。

ロトの剣がまばゆい閃光を放ち、二本の角を根元から立ち斬った。唸り声をあげてのたうち回るベリアルに、左右からセリアとコナンが攻撃をかけた。バギの真空が金色の鱗を切り裂き、ベギラマの電光が角を失った頭部に炸裂した。

魔物は、カッと目を見開いて矛をかかげた。電撃による攻撃をかけようとしたのだ。だが、すでに力の源である角は失われていた。

額の傷口からは一層はげしく血潮が噴き出すだけだった。

ロトの剣が一閃し、三叉の矛が乾いた音をたてて床に落ちた。そして矛におおいかぶさるように、ベリアルの巨体が倒れた。金色のベリアルから流れ出す血が、深紅の絨毯にゆっくりと広がっていった。

「また、現れやがって——」

そういいながらアレンは、ガルドにむかって身構えた。
だが、ガルドは、じっと見ると、
「悪いが――おまえたちとは戦う気はない――」
「なにっ⁉」
「風の塔に行って来た――」
「えっ⁉」
三人は驚いた。
「じゃあ、魔女に会ったのねっ⁉」
すかさずセリアが聞いた。
「とっくに魔女は死んでいた――」
「なんだって？」
「おまえたちが立ち去ったあとすぐにな――。魔女の三姉妹は、そういう運命だったそうだ――。
おまえたちと会ったら――」
「えっ⁉　じゃあ、他の二人もっ⁉」
アレンが聞くと、ガルドは黙って頷いた。
三人はショックだった。まさかそんなことになっているとは、思いもよらなかったのだ。
「だが、魔女は風の亡霊になっておれを待っていた――」

「風の亡霊――？」
三人は、ガルドを見ると、
「じゃあ、やっぱりガルチラの子孫だったのねっ!?」
思わずセリアが聞いた。
「どうやらな――」
ガルドは、銀の横笛を見ながら頷いた。
「そうだったの――！」
セリアは嬉しそうにガルドを見つめ、
「じゃあ、ぼくたちと一緒に戦ってくれるんだな!?」
「それで今、助けてくれたんだな!?」
アレンとコナンは、顔を輝かせていった。
「それより、邪神の像はどうした？」
鋭い目でガルドがいった。アレンが、はっと顔色を変えると、
「急げっ！　冥界から大魔神が呼び出されたらこの世は終わりだ！」
そういいながら、すでに駆け出していた。

3 ハーゴン

神殿の七階にあたる巨大なドーム――。
このドームには窓がひとつもない。ま昼でもまっ暗なのだ。
その暗闇(くらやみ)のなかで、いくつもの篝火(かがりび)が焚(た)かれていた。
その炎の明かりに、ドームを支えている六本の巨大な円柱が照らし出されている。
ドームの正面に、ぴたりと扉が閉められた門があった。城門ほどもあるアーチ型の大きな門だ。
扉には巨大な魔鳥の彫物(ほりもの)がほどこしてあり、門柱にもおどろおどろした魔物の彫物が飾ってあった。
その門の前で、白いローブをまとったひとりの男が、無心に祈りを捧げていた。
ガルドより頭ひとつでかい大男で、手には錫杖(しゃくじょう)を持っていた。
男は、ときおり祈りの調子を取るように、チリン――チリン――と、錫杖(しゃくじょう)の鐶(わ)を鳴らした。
その音が、闇(やみ)のなかに谺(こだま)した。
こいつがハーゴンなのか――?
ドームに忍(しの)びこんだアレンたちは、巨大な円柱の陰に隠(かく)れて、息を殺してその後ろ姿を見ていた。

その隣の円柱の陰で、ガルドも同じような顔で見ていた。ガルドもハーゴンの真の姿を見るのが初めてなのだ。下の階の祭壇に映る巨大な影――ハーゴンの仮の姿しか見たことがないのだ。
扉の上の、アーチの中央にある台座に、さっきベリアルに奪われた邪神の像が置かれていた。邪神の像は、篝火の明かりに照らされて、まるで生きているように見えた。ぶきみな三つ目は赤い光を放ち、頭の上についた異形の怪物は、ときおり炎を吐き出している。
「そこまでだ、ハーゴン！」
アレンの大声が天井のドームに谺した。アレンたち三人が、円柱の陰から飛び出したのだ。だが、ガルドは円柱に隠れたままだった。
ハーゴンは、ゆっくりと振り返った。一見仮面をかぶっているように見える。だが、それは仮面ではなかった。青磁器のような青緑のつるりとした肌。異様なほど釣りあがった鋭い黄色の眼。ぶきみな三角の耳まで裂けた大きな口。全身からは、背筋の凍るような殺気を放っていた。
「ロトとアレフの血をひく者どもか――」
ハーゴンは、じっとにらみつけながら、低い静かな声でいった。
「この大神官ハーゴンの祈りを妨げた以上、生かしてはおけぬ――」
ハーゴンは、錫杖をかざして頭上で一回転させると、ハーゴンの両側で燃えていた二つの篝火の炎が、いきなり音を立てて襲いかかってきた。
アレンたちは驚いて身をかわすと、コナンとセリアがすばやくハーゴン寄りの円柱の陰に移動

して、呪文を唱えた。同時に、アレンも斬りかかった。
ベギラマの鋭い電撃がハーゴンを襲い、つづいてバギの真空の渦が襲った。
だが、ハーゴンは拳（こぶし）を握って払うようにすると、火炎は消え、渦も消えた。さらに、目の前に接近したアレンに、拳を突き出して火炎の球を放ったのだ。
アレンは、思わず立ちどまって身をかわした。だが、火炎の球は連続して襲ってきた。アレンはかわすのが精一杯で、それ以上斬りこむことができなかった。そのときだった。
天井の闇のなかから、ガルドが剣を振りかざしてハーゴンに襲いかかったのだ。
だが、ハーゴンが一瞬姿を消してガルドの攻撃をかわすと、数歩後方に現れてガルドに火炎の球をつぎつぎに浴びせた。
ガルドは、床を回転しながら火炎の球をかわして、すっくと立ちあがると、すかさず呪文を唱えた。宙でガルドの白い火球と、ハーゴンのまっ赤な火球がはげしくぶつかり合って散った。
「ガルドか――」
ハーゴンは、鋭い眼でにらみつけた。
「なにゆえに、悪魔神官を裏切った？　悪魔神官を裏切ることは、わしをも裏切ること」
だが、ガルドは鼻先でふっと笑っただけだった。
ハーゴンはじっとさぐるように見ると、
「どうせ、おまえの魂胆（こんたん）なぞわかっておる。邪神の像が欲しいのじゃろっ。魔界の魔力を手に入

れるためにな」

「——」

ガルドは、冷たい目でじっと見た。

「祈りの指輪だけでは満足できぬのか!? 愚か者めが——!」

「たしかにな——。たしかにあんたのいう通りだった——。だが、今は違う——。今おれが欲しいのは——」

ガルドは、ぱっとハーゴンに剣の刃先をむけた。

「あんたの命だっ!」

「な、なにっ!?」

ハーゴンは、恐ろしい目でにらみつけると、

「戯言もほどほどにするがいいっ!」

ハーゴンは、拳を頭上に振りかざして呪文を唱えた。

すさまじい真空の渦がドームのなかに起こり、とたんに四人を巻きこんだ。

「うわあっ!」

四人は軽々と吹っ飛び、つぎつぎに円柱に叩きつけられて倒れた。

巻きこまれたとき、体がよじれ、骨が軋んだ。

さらにハーゴンが呪文を唱えると、ドームの天井を黒雲がおおい、鋭い稲光が闇を斬り裂い

た。
「うわあっ」
つぎの瞬間、四人を直撃していた。全身を電撃が駆けめぐり、四人は海老のように撥ねた。全身が痺れて、身動きすらできなかった。
「ふっふふふ。見よあれをっ!」
ハーゴンは錫杖で門を指した。
「大冥界とつながる魔界門じゃ!」
「な、なにっ!?」
四人はやっと顔をあげて、錫杖の指す先を見た。
いつの間にか、観音開きの扉の中央がわずかに開いていて、その奥にぶきみな闇が口を開けていた。大人ひとりが入れるほどの幅だ。
「もうひとり生贄を捧げれば、魔界門は全開するのじゃ! もうひとりなっ!」
そういってハーゴンはにやりと笑った。
「さすれば、大冥界から破壊の神、大魔神がやって来るのじゃ!」
「そ、そんなことさせるかっ!」
アレンは、必死に身を起こして叫んだ。
「これ以上、勝手なことをさせてたまるかっ!」

「ふっふふふ。悪は真じゃ。悪のみがこの世を救い、悪のみがこの世に栄える。それが邪神の教えじゃ――」
ハーゴンは、円柱の横で気を失っているセリアを見た。
つぎの瞬間、ハーゴンがセリアの目の前に移動していた。その気配に気がついたセリアは、はっと息をのんで脅えた。
「さあ、大冥界からの迎えの使者となるのじゃっ！」
ハーゴンは、乱暴にセリアの手をつかんだ。
「てめえっ！」
アレンは、全身の痛みに耐えながら、必死に斬りかかった。
だが、それより早くハーゴンの呪文が炸裂し、アレンは火炎の球につつまれて、後方の壁まで吹っ飛んで気を失った。鉄の棒でなぐられたような衝撃があった。
「く、くそーっ！」
コナンが、渾身の力を振り絞って、マホトーンの呪文を唱えた。
ハーゴンの呪文を封じれば、なんとか攻撃できると思ったからだ。
呪文の波動が、セリアを連れ去ろうとするハーゴンの背中を襲った。一瞬、ハーゴンは肩をぴくっとさせた。だが、コナンを見て、恐ろしい形相でにやりと笑うと、拳を突き出した。
「うわあっ！」

コナンは、悲鳴をあげ、火だるまになって円柱にはげしく叩きつけられて悶えた。
ハーゴンは、強引にセリアを連れて、扉の前にむかった。
ガルドは、ハーゴンをにらみながらやっと立ちあがると、祈りの指輪をはめた左手を胸の前に置いてぐっと力をこめた。
ガルドは、ハーゴンがマホトーンの呪文を浴びて肩をぴくっとさせたことを見逃さなかった。
ひょっとしたら――と、ガルドは思ったのだ。呪文がいくらか効いたのかもしれない。もしそうだとしたら、もっと強力なものだったら――と。
ピカーッ――祈りの指輪が鋭い白光を放ち、ハーゴンの胸に突き刺さった。
ハーゴンは、恐ろしい形相でにらみつけると、
「いかに祈りの指輪とはいえ、このわしに通ずるとでも思っておるのかっ!? 三〇〇年も生きてきたこのわしの力になっ! わしの体を流れる恐るべき力になっ!」
全身に力をこめ、衝撃波を弾き返そうとした。
「黙れっ!」
ガルドはさらに力をこめた。
そして、以前ハーゴンの恐るべき力について、悪魔神官がもらした言葉を思い出していた。
――ハーゴンさまの力の源泉、それは常世のわれら人間界のものではない――
数十年前、魔界との交信に成功したハーゴンは、はるか時空を越えた大冥界から永遠の命のも

とを授かったのだ。
――それは、人間の目には深紅の光に見える凶々しい輝きとなって、ハーゴンさまの体に吹きこまれたのじゃ――
深紅の魔光――。悪魔神官はまるで自分がその光を浴びたかのように自慢気にいっていた。
ガルドは考えていた。たとえどれほどの魔力でもマホトーンさえ通じれば――。
「うぬぬぬっ！」
ハーゴンの顔が徐々に歪み、体がぶるぶる震え出した。その額に汗が滲んでいた。
「そりゃあああっ！」
ガルドは、全身を震わせながらさらに力をこめた。いつの間にか顔は汗でびっしょり濡れていた。
「うわああああっ！」
突然、ハーゴンは悲鳴をあげてのけぞった。
その悲鳴を聞いて、やっとアレンの意識が戻った。
ガルドは、さらに力をこめた。
ハーゴンは、全身をはげしく痙攣させた。
そのときだった。ビシッ――鈍い音がドームのなかに谺した。
祈りの指輪の白玉に亀裂が走り、粉々に砕け散ったのだ。

ガルドは、愕然として指輪を見ていた。いずれ自分は、近いうちに祈りの指輪に命の精を吸われて死ぬものだとばかり思っていた。だが、目の前で祈りの指輪が粉々に砕け散って効力を失ったのだ。ガルドには、奇跡が起こったとしか思えなかった。ガルドの生命力が、祈りの指輪の魔力より勝っていたのだ。

ハーゴンは、精気の抜けたような青い顔でガルドを見た。

「その指輪さえなければ――」

ハーゴンは、呪文を唱えようとした。同時に、

「命はまだあるっ！」

ガルドが、剣を構えた。そのときだった。

「うりゃあああああっ！」

ロトの剣をかざしたアレンが、ハーゴン目がけて猛然と突進していたのだ。

「うっ！」

ハーゴンは、慌ててベギラマの呪文を唱えた。しかし、魔力は封じられていた。ガルドが放ったマホトーンが、悪しき力に打ち勝ったのだ。

「とあああっ！」

接近していたアレンが、高々と宙に跳んだ。

ハーゴンは、必死になってイオナズンの呪文を唱えた。だが、それは無駄なあがきだった。

ハーゴンは、愕然とした。
「たあああっ！」
アレンが、ロトの剣を思いっきり振りおろした。
ロトの剣は、すさまじい光を放った。
「うわあああああっ！」
ハーゴンの悲鳴が、ドームの闇に響き渡った。
一瞬にして、ハーゴンの体がずたずたに斬り裂かれていた。
額、頬、首、肩、腕、胸――いたるところから一斉にまっ赤な光が噴き出した。
この深紅の光こそが、魔界からもたらされたハーゴンの力の、絶大な魔力の源だったのだ。
「うぬぬぬぬっ！」
ハーゴンは、そら恐ろしい眼でアレンをにらみつけた。
すると、ハーゴンの青緑のつるりとした肌が醜く歪み始めたのだ。見る見るうちに皺だらけになり、頬はげっそりとこけ、骨と皮だけになった。同時に、ハーゴンの巨体も空気が抜けるようにどんどん縮み、あっという間にハーゴンは、セリアよりも小さい、痩せこけた貧相な老人に姿を変えたのだ。三〇〇歳のハーゴンに戻ったのだ。
「あ――悪は永遠じゃ――。わ、わしの――肉体が消えても――、お、おまえたち――絶対に――こ、このロンダルキアから――だ、出さぬ――。こ、この悪の世界からな――」

苦しそうにあえぎながらハーゴンは、扉の中央に口を開けている闇のなかに飛びこんだ。自らが生贄となって、大冥界との門を開くために――。
「うわあああああっ!」
ハーゴンは、闇のなかの気流の渦に巻きこまれ、悲鳴とともに吸われるように消えていった。
「やっと倒した――やっと、ハーゴンを――!」
アレンが、そう思ったときだった。
邪神の像の三つ目がさらに光を増すと、突然門がはげしく揺れ、ギギギギィ――と、扉が完全に開いたのだ。大冥界への魔界門が――。
門の闇のなかで、はげしく気流が渦を巻いていた。
と、ピカピカピカッ――。門の奥から、すさまじい稲光がした。

4　シドー

ピカーッ――。
ふたたび門の奥の闇のなかから、稲光がした。
つぎの瞬間だった。はげしい気流の渦のなかから稲光を発しながら、巨大な黒い塊(かたまり)が飛び出して来たのだ。

「うわあっ!?」
四人は慌てて横に逃げた。
巨大な黒い塊は、派手に門にぶちあたりながら、地響きを立ててドームのなかに飛び出すと、なんと門の左手前にそびえていた円柱を粉々に砕き倒したのだ。
さらに大きな地響きと大音響が起こった。すると、巨大な黒い塊は崩れ落ちた瓦礫の山を振り払いながら、頭をもたげていきおいよく立ちあがったのだ。
天井に頭がぶつかるのではないかと思うほどの、とてつもない巨大な魔物だ。
四人は、思わず息をのんであとずさりした。
はるか頭上の闇のなかで、恐ろしいまっ赤な双眼がじろりと四人を見おろした。
ぶきみな二本の角、耳まで裂けた口と牙、巨大な翼、鋼鉄の鱗の背びれと尻尾、手が四本もある想像を絶する魔物だ。四本の手はそれぞれ三本の指を持ち、その指先は研ぎ澄まされた鋭い爪であった。さらに、暗緑色で艶のある鱗が全身をおおい、身の毛がよだつような殺気をドームのなかいっぱいに放っている。破壊の神、大魔神シドーだ。
シドーが、四人をじっとにらみつけると、
〈われを召喚した下僕どもよ――――!〉
どこからともなくおどろおどろした低い声が響き渡った。
シドーは、超能力で語りかけたのだ。

「冗談じゃない！　おまえを呼んだハーゴンならぼくたちが倒した！」
アレンが叫んだ。
だが、シドーは驚いた素振りも見せなかった。
〈命が惜しくば、黙ってわれの忠誠なる下僕となるがいい――！　じき、われにつづいて数百数千もの輩がこの門を通って大冥界から来る――！〉
「な、なにっ!?」
四人は、驚いた。
〈それとも、この場で死にたいのかっ――！〉
「黙れっ！」
アレンが叫ぶと同時に、四人は身構えた。
「そういうことか！」
ガルドが間合いを取りながら三人にいった。
「こいつら、端からハーゴンなんか相手にしてなかったのさ！　地上界に来るために利用しただけなんだ！」
シドーはいきなり強烈な火柱を吐いた。
「うわあっ！」
四人は慌てて、円柱の陰に隠れた。

ものすごい火力だった。火柱はいきおいよく燃えながら床を走り抜けた。
シドーは、つづいて巨大な翼を羽ばたかせた。
とたんに、嵐のような突風が渦を巻いて吹き荒れた。
「うわあっ！」
四人は、軽々と吹き飛ばされ、壁に叩きつけられて、床に落ちた。
ハーゴンやベリアルの呪文とは規模が違った。
「グオオオオッ！」
シドーは、生の声をあげ、大きく天を仰いで咆哮すると、ピカピカピカッ――と、四本の手の十二個の爪の先から鋭い電光を発した。
つぎの瞬間、ズズズーン――と床が抜けるかと思うような地響きと大音響を立てて、雷光がドームのなかを縦横無尽に斬り裂いたのだ。
「うわあっ！」
直撃を受けた四人は、ばらばらに吹き飛ばされた。
いきおい余った雷光は、あちこちに炸裂した。ビシビシビシ――天井や壁や円柱に巨大な亀裂が走ったのだ。
アレンたちは、頭が割れるように痛み、意識が朦朧としてしばらく動けなかった。
そのとき、シドーはすばやく魔界門を振りむいた。大冥界から他の魔物たちがやって来る気配

を感じ取ったのだ。
すると、ピカピカッーと、門の奥の闇を稲光が走った。
「他の魔物たちがやって来るっ！」
ガルドが、やっと身を起こしながら叫んだ。
「な、なにっ!?」
アレンたちも、驚いて必死に身を起こした。
「門はおれに任せろっ！」
ガルドが、よろけながら門へ行くと、
「魔物どもめっ！　一歩たりとも門は通さん！」
門にむかって両足をしっかり踏みしめ、両手を広げて渾身の力を入れた。
「うおおおっ！」
ガルドの両手の指先が波動を放ち、開いていた扉がいきおいよく閉じた。
「うりゃあああっ！」
さらに力をこめると、炎のような白光を放ち、その光の帯が門にふり注いだ。
その直後、光の帯が地響きとともにはげしく振動した。
門の奥の闇を越えて来た魔物たちが、閉じられた扉の裏側に激突したのだ。
シドーは、鋭い眼でガルドをにらみつけると、ふたたび天を仰いで咆哮をあげた。

十二本の指先から、雷光が轟いた。
と、ズズズズズーン——床が衝撃で大きく揺れた。円柱が揺れた。
電撃が、必死に呪文を唱えて魔物の進入を阻止していたガルドを直撃した。
「うわあああああ!」
ガルドの全身を電撃が駆けめぐり、ばちばちと弾けながら周辺に放電した。
ガルドの放つ白光の帯はとたんに弱くなり、扉が開きかけた。
「く、くそーっ!」
ガルドは、さらに全身の力をこめて呪文を唱えると、ふたたび白光が増し、扉を閉じて門をおおった。
ガルドの全身に汗が噴き出していた。顔はまっ青だった。
シドーは、さらに天を仰いで咆哮をあげた。
ピカピカッ——一段とはげしい雷光がした。
ズズズズズズズ〜〜ンッ! すさまじい地響きと揺れが襲った。
そのときだった。天井が、壁が粉々になって吹っ飛んだのだ。
「あっ!?」
三人は、愕然として見あげた。
無数の破片が、はるか上空に飛び散ると、やがてばらばらと雨のように降って来た。

アレンたちは、慌てて折り重なった円柱の下に隠れたが、破片の雨は容赦なくガルドを襲った。
だが、ガルドには避ける余裕もなかった。破片の雨を身に受けながら、必死に呪文を唱えつづけた。
頭や肩や腕から大量の血が流れ出し、ガルドは全身血にまみれた。
破片の雨がやんだあとには、崩れかけた円柱と壁だけが残り、上空には暗雲が広がっていた。
シドーは、憎々しそうにガルドをにらみつけると、火柱を吐きかけた。
ブオオオッ――強烈な火力の炎がガルドをおおってはげしく燃えあがった。
「うおおおおっ！」
ガルドは、苦しみ悶えながらそれでも呪文をつづけた。
ガルドの服の焼け焦げる臭いが一帯に流れた。
さらにシドーは、鋭い十二個の爪をかざして、ガルドに襲いかかった。
ひとかきで、とどめを刺そうと思ったのだ。そのときだった。
「たーっ！」
すかさずアレンがシドーの足に斬りかかっていた。
驚異的なアレンの跳躍力をもってしても、シドーの腰までさえ跳べないのだ。やはり足を狙うしかない。アレンが着地すると同時に、いきおいよく血飛沫が飛んだ。
シドーの爪が唸りをあげてガルドをかすめ、その風圧にガルドの長い髪の毛が大きくなびいた。

さらに、コナンとセリアが呪文を唱えた。
コナンのザラキがシドーを襲い、つづいてセリアのバギが襲った。
打撃を与えることはできなかったが、シドーの注意をひかせる効果は十分にあった。まずはガルドへの攻撃をとめなければならないのだ。
シドーは、アレンたちをにらみつけると、いきなり翼を羽ばたかせた。
「うわあっ！」
アレンたち三人は、転がりながら崩れた壁際まで吹き飛ばされた。
もうあとはなかった。後ろはなにもないのだ。落ちたら最後なのだ。
シドーは、一歩踏みこむと、今度は太くて長い尻尾で攻撃してきたのだ。鋼鉄の鱗の尻尾は、まるで鞭のように唸りをあげてしなった。
「うわあっ！」
三人は、悲鳴をあげて反対側まで吹っ飛び、瓦礫のなかに叩きつけられて起きあがることができなかった。
意識は朦朧とし、全身の激痛と痺れで、指一本動かすことさえできなかった。
シドーは三人に接近すると、鋭い爪をかざして襲いかかったのだ。
交互に三人を攻撃した。ひとかきで数カ所を鋭くえぐったのだ。たちまち鮮血が飛んだ。
セリアを攻撃したとき、鋭い爪の先が首にかけていたルビスの守りをかすめて、ルビスの守り

はばらばらに千切(ちぎ)れて宙に飛んだ。すると、不思議なことにその宝石や鎖(くさり)がきらきら輝きながら、ゆっくりと宙に消えてしまったのだ。

やがて三人から悲鳴や呻(うめ)きも聞かれなくなった。血まみれになった三人が、捨てられた人形のようにぐったりとして動かなくなると、シドーは身を乗り出して、三人に火柱を吐きつけた。

強烈な炎が三人をつつみ、轟音をあげて燃えあがった。

アレンの目の前がかすんできた。炎の熱さも傷の痛みも感じなかった。

意識が遠くなるのを感じながら、アレンは自分の体がどこかに浮いているような不思議な感覚にとらわれていた。どこかで体験したような感覚だった。自分は空を飛んでいるのだろうか――。そうだ――。風のマントだ。風のマントでドラゴンの角からルプガナ側へ飛んだときの感覚だ――。そう思うと、風のマントをもらった風の塔の魔女の顔が、竜王の子孫の顔が、ハレノフ八世の顔が、カンダタ十八世の顔が、旅の途中(とちゅう)で会った人々の顔が、そして、懐かしい父アレフ七世の顔が、つぎつぎに浮かんでは消えた。

その顔のなかに、輪郭(りんかく)がぼやけて白く見える人物がいた。だが、それがだれなのかアレンには思い出せなかった。

コナンは、目の前が暗くなると、死の予感がしていた。このままぼくは死んでしまうのだ――。目的を果たせないまま――。でも、仕様(しよう)がないんだ――。これでも、一生懸命戦ったんだ――。敵が強すぎたんだ――。そう思うと、愛(いと)しいレシルの顔が、懐かしい父リンド六世や妹のマリナの

顔が、つぎつぎに浮かんでは消えた。だが、ひとりだけ、だれなのかわからない人物がいた。やはり、輪郭がぼやけて白く見えるだけだった。

セリアの瞳から、涙が流れていた。薄れゆく意識のなかで、父ファン一〇三世や母や、懐かしい人たちの顔がつぎつぎに思い浮かんでは消えた。

おとうさま、おかあさま――。ごめんなさい――。敵を討てなくて――。そう心のなかで詫びていた。だが、アレンやコナンと同様に、ひとりだけわからない人物がいた。やはり、輪郭がぼやけて白く見えるだけだった。

その輪郭がぼやけて白く見えた人物が、三人に同時に語りかけたのだ。

勇者ロトとアレフの血をひきし者たちよ――。最後まで諦めてはいけません――。今一度勇者ロトとアレフの「勇気」と「正義」と「平和を愛する心」を思い浮かべるのです――。勇者ロトとアレフの苦しかった戦いを思い浮かべるのです――。

そういって、その謎の人物の声が消えたときだった。

三人の意識がすーっと戻った。

すごい豪雨だった。上空に垂れこめた黒雲が鋭い稲光を発していた。

矢のような強い雨を浴びて、三人の意識が戻ったのだ。

三人が、気を失っていたのはほんの一瞬のことだった。

三人を襲ったあとガルドに火柱を浴びせようとしていたシドーが、突然の雷雨に気を奪われた

ところだったのだ。
そのほんの一瞬の間に、神殿の上空が一天にわかにかき曇り、すさまじい雷雨が襲ったのだ。
雨に打たれながら、ガルドはなおも呪文をつづけていた。
上空を、稲光が何度(なんど)も斬り裂いた。
アレンは、一瞬どうなったのか理解できなかった。アレンは、さっき意識が遠くなるのを感じながら、不思議な感覚にとらわれていたことを思い出して、はっとなった。
「そうだ！　コナン、ベギラマの呪文だ！　セリア、あいつの気をこっちにむけろ！」
そう叫びながら、全身の痛みをこらえて必死に壁際にむかうと、革袋から風のマントを出して身にまとった。
風のマントを見て、コナンはアレンの作戦を理解した。
――精霊ルビスよ。われに力を――！
心のなかで叫びながら、アレンは崩れかけた壁の上から宙に飛んだ。空中から攻撃するつもりなのだ。
そのとき突風が吹き、アレンの体が急浮上(きゅうふじょう)した。
コナンとセリアは、シドーにむけて渾身の力をこめて呪文を唱えた。
シドーが、呪文を唱えているガルドに鋭い爪を振りおろしたときだった。
セリアの放ったイオナズンの火球が、シドーの後頭部で爆発した。

シドーは、振りむいて思わず眼を剝いた。シドーにすれば、セリアの呪文はほんの小さな虫に刺された程度のものでしかないのだが、セリアとコナンがまだ生きていたことに驚いたのだ。
身をひるがえしたシドーは、翼を羽ばたかせようとして、さらに驚いた。
目の前に、風のマントをつけたアレンがロトの剣を構えて飛んで来たのだ。
シドーは慌ててアレンに火柱を吐いた。だが、アレンは間一髪かわすと急上昇し、上空で体勢を変えて叫んだ。
「コナーン！」
雷の精霊よ――！　われにその力を――！　天地を切り裂く怒りの光を――！
コナンは、さらにありったけの力でベギラマの呪文を唱えた。
あまりの集中力に、コナンの全身がはげしく震えた。
すると、コナンの呼んだ雷雲が上空の黒雲に反応したのだ。
アレンは、急降下したかと思うと、鋭い爪で叩き落とそうとするシドーの鼻先で一回転して、ロトの剣をかざして正面から突進した。目の前に、ぎょっとしたシドーの顔が接近した。
「うりゃあああっ！」
アレンは、思いっきり眉間にロトの剣を突き刺した。
「グワオ〜〜ッ！」
シドーは、悲鳴をあげて思わずのけぞった。

眉間から、一筋の血が流れた。そのときだった。
ピカピカピカピカピカッ——鋭い雷光が空を斬り裂いて、シドーの眉間に突き刺さったロトの剣のロトの紋章に落雷（らくらい）したのだ。
すさまじい衝撃音が、神殿一帯に轟いた。
ロトの剣は、まばゆい光を放ち、恐るべき電撃がシドーの全身をいきおいよく駆けめぐった。
「グワオオオオ〜〜〜ッ！」
シドーは、さらに大きくのけぞり、はげしく全身を痙攣させた。
すると、ふたたびロトの剣が光り輝いた。
神殿のある盆地一帯にまでおよぶような強烈な光だった。
シドーの四本の手が震えながらむなしく宙をつかんだ。
シドーの巨体がゆっくりと傾（かたむ）き始めた。シドーは、キッとアレンたちに振りむいてにらみつけた。そら恐ろしい眼（め）だった。
だが、シドーは崩れかけた壁を倒しながら、そのまま七階から地上にむかってまっさかさまに落下したのだ。
「ウゴオオオ〜〜〜ッ！」
断末魔の叫びが天空に轟いた。
やがて、はげしい地響きが、七階の床にも伝わって来た。シドーが、地面に落下した音だ。

アレンたちが下を見ると、首を折ったシドーの巨体が無残に横たわっていた。
するとと、急に雨がやみ、風もやんだ。
ガルドは魔界門にむかって、必死に呪文を唱えていた。全身をはげしく痙攣させながら、さらに力をこめた。
だが、もはや限界だった。白光の帯は徐々に弱くなっていたのだ。
ガルドは心のなかで叫んだ。
わが偉大なる祖先ガルチラよ――！　そして、精霊ルビスよ！　われに力を与えよ――！　われの全生命に代わる、偉大なる力を――！　最後の力――！
「うおおおおおっ！」
ガルドは必死に最後の力をこめた。
その声を聞いて、アレンたちは、はっとなってガルドを見た。
ガルドの全身から炎のような白光が立ちこめて、光の壁となって門をおおった。だが、つぎの瞬間、
「うわあああああっ！」
ガルドの全身がまばゆい光を放って、そのまま門に吸いこまれていった。
すさまじい衝撃が、光の壁のなかから起きた。
その直後だった。扉の上の、アーチの中央の台座に置いてあった邪神の像が、パカッ――と、

まっ二つに割れると、突然魔界門が大破したのだ。
光が消えると、門はなにもなかったような黒曜石の壁に変わっていた。
そして、その前の粉々に砕け散った瓦礫の山に、ガルドが埋もれていた。
大冥界とをつなぐ門が永遠に閉じられたのだ。
慌てて駆けつけたアレンたちは、瓦礫のなかからガルドをひき出した。
「しっかりしろ、ガルド！――」
アレンが抱き起こした。
「――」
血まみれのガルドはうっすらと笑みを浮かべると、
「や――やった――」
苦しそうに声を出した。
「こ、これで――が、ガルチラも――許して――く、くれるだろう――」
アレンは、ガルドの顔の血を布の切れ端で綺麗に拭いてやった。
「もっと――は、早く――知り合ってれば――よかった――。お、王女――。こ、これ――」
ガルドは、震える手で懐から短剣を出した。
船底でセリアから取りあげた短剣だった。
短剣は、十五歳の誕生日に父ファン一〇三世から貰った大切な思い出の品なのだ。

「や、約束の――」

ガルドの手は、必死にセリアを探していた。

ガルドは目を開けていたが、視力がなくなっていたのだ。

「ありがとう――」

セリアは短剣を取って、ガルドの手を握りしめた。

「――」

ガルドは、ゆっくりと目を閉じた。かすかに微笑んだかに見えた。

だが、そのままガクッと首を垂れた。

「ガルド！　しっかりしろ！」

アレンは、はげしく揺すった。

だが、ガルドは二度と答えなかった。

すると、突然上空から明るい光が差してきた。

いつの間にか、暗雲が消え、青空が広がっていた。

どこまでも澄みきった、抜けるような青空だった。

さわやかな春の風が、渡ってきた。

そのとき、セリアが「あっ？」と声をあげた。

「ルビスの守りが――？」

アレンとコナンが、セリアの首元を見て、
「な、ないっ!?」
コナンが叫んだ。
シドーに千切られて、きらきら輝きながら宙に消えたのを、気を失いかけてた三人が知るはずもなかったのだ。
だが、突然の気候の変化――それは精霊ルビスの助力ではなかったのか――。
三人は、ふとそう思ったのだ。
そして、それぞれの胸のなかで思った。朦朧とした意識のなかで、励ましの言葉を残して消えた人物は、実は精霊ルビスではなかったのか――と。

終章

風の塔のよく見える丘の上に、ガルチラの墓があった。
アレンとコナン、セリア、レシルの四人は、深い草をかき分けてこの丘にのぼった。
空には白い入道雲が湧き、大草原は真夏の光にあふれていた。
あと数日で、セリアは十八回目の誕生日を迎えようとしていた。
十六歳の誕生日を迎える直前にハーゴン配下の魔物たちにムーンブルクが襲撃されてから、ちょうどまる二年が過ぎようとしていたのだ。
四人は、この丘に来る途中、風の塔に寄って来た。
風の塔は、以前来たときと同じように荒れ果てたままだった。
魔女のいた最上階までのぼった。だが、ガルドのいった通りだった。
四人は、心のなかで魔女に感謝し、魔女の冥福を祈り、魔女にガルドのことを報告した。そして、魔女が風のマントを織っていたところに、摘んできた野の花をそっと置いた。花は、かすかに風に揺れた。

シドーを倒したあと、アレンたち三人は、銀の横笛と一緒にガルドをハーゴンの神殿のあとがよく見える丘の上に埋葬(まいそう)すると、ハレノフ八世やレシルの待つベラヌールの町に凱旋した。

ベラヌールの町は大騒ぎだった。町の人々はいきおいよく花火を打ちあげ、また港に停泊(ていはく)している船の船乗りたちは一斉に銅鑼(どら)を鳴らして、新たなる英雄(えいゆう)たちを歓呼(かんこ)の声で迎えてくれたのだ。

そして、ただちに「勝利」の報を知らせる通信用の伝書鳩(でんしょばと)が、ムーンブルクの商都ムーンペタにむけて放たれたのだ。

さらにその知らせは、ムーンペタからまた別の伝書鳩によって、ローレシア城とサマルトリア城に運ばれて行くのだ。

凱旋した三人は、神殿のルビスの祭壇に跪(ひざまず)き、ルビスに深い感謝の祈りを捧げた。

その夜、コナンは五〇日遅れて、レシルとの買物の約束をやっと果たした。

そして、数日後、四人はハレノフ八世と別れて、ガナルと一緒にラーミア号でベラヌール港を出航したのだ。

ラーミア号は、季節風に乗り、順調に航海をつづけて、ロンダルキア山脈の南の半島を回ってこの風の塔の東海岸に接近すると、風の塔の近くまでつながっている入江を見つけてのぼって来たのだ。

ガルドの形見の長い髪の毛をガルチラの墓の横に埋葬すると、四人は野の花を手むけ、手を合わせてガルドのことをガルチラに報告した。
ざわざわざわ――ざわざわざわ――。
緑の大草原が波打つように揺れ、さわやかな風が丘の上まで渡ってきた。
四人は、ふと顔をあげた。
風に乗って、どこからともなく美しい笛の音が聞こえてきたような気がしたのだ。
四人は、しばらくその場に立って、風の音を聞いていた――。

風の塔をあとにした四人は、そのあとまっすぐローレシアに行き、ローレシア国民の熱烈な歓呼の声に迎えられて凱旋したのだ。
さらに数日後、四人は興奮さめやらぬローレシアをあとに、アレフ七世の船に乗ってラダトームへとむかった。
無事六年振りに、ロト祭が華やかに開催されるからだ。
そして、ラダトーム城の恒例の儀式で、勇者ロトとアレフの血をひく者たちは、勇者ロトに感謝し、新たに「勇気」と「正義」と「平和を愛する心」を勇者ロトとアレフに誓ったという。
魔物の襲撃を恐れ民家の地下に隠れていたアレフガルドの国王ラルス二十二世は、持ち前の明るさで無事主催者としての責任を果たすと、最後の夜の会食の席で国王を遠縁のミラジオ将軍に

譲ると宣言し、正式にアレフ七世とリンド六世に承認されたという。
また、コナンとレシルの婚約も発表され、みんなの温かい祝福を受けたという。
その後、ムーンブルクにむかったアレンとセリアは、ムーンペタのキゲル四〇世たちの協力を得、五年の歳月（さいげつ）をかけて美しいムーンブルク城と城下の町を再建したという――。

あとがき

今年の夏は熱かった。まずそれは、勘違いから始まった。

わたしは今、成田デス。ばっちし予定通りに原稿を書きあげました。

これから、念願のアメリカマイナーリーグ1Aの取材にでかけます。

一九八九年八月二十四日――。

あとがきの締めまでちゃんと考えていたっていうのに――。くそっ。

六月上旬のこと。「九月下旬までにドラクエIIの小説があがっていればいいです」といわれてわたしは喜んだ。こりゃあうまくいった。しめしめ。日頃の行いがいいわたしに神が味方したのだと思った。そのとき、すでにわたしの手帳には、

六月十一日――十四日　香港

六月二十七日――七月十四日　ロンドン　オーストリア　西ドイツ

八月二十四日――九月六日　アメリカ

と、旅行と取材の予定が書きこまれていたのだ。

だが、余裕余裕。アメリカに発つ八月二十四日までに上巻を、帰国したら一気に下巻を書きあげればいいのだ。がっはははは。

だが、ところがぎっちょん。香港から帰ってわたしは絶句した。とんでもない勘違いであることがわかったのだ。九月下旬というのは発売日のことだったのだ。原稿は八月の下旬には完全にあがっていなければならないのだ。上下巻とも。慌ててスケジュールを立て直した。大幅軌道修正である。

すっかり余裕がなくなってしまった。七月中に上巻を、八月二十日までに下巻をあげなければならなくなってしまったのだ。さらに、恐ろしいことに、書き始めたら遅々として前へ進まないのだ。毎日毎日頭ばかり掻きむしっていた。

六月二十七日、第一章を成田から郵送して、わたしはロンドンに飛んだ。予定では第二章まであげることになっていたのだ。

七月十四日、猛然と書くつもりで帰国したが、えらい時差ボケにあたって四、五日死んでいた。すでに全国各地で甲子園の予選が始まっていた。

そうこうするうちに、二十五日の実家の法事が近づいてきた。だが、実家までは盛岡から車で二時間ばかりかかる。当日東京を発ったのでは午前中の法事に間に合わないのだ。前日の二十四日、第二章をやっとあげて岩手に帰った。

ああ、それにしてもなんという巡り合わせだろうか。盛岡に着いたわたしは、すぐさま県営球場へタクシーを飛ばした。その日は甲子園の岩手予選の決勝だったのだ。な、なんとわが母校が勝ち進んでいたのだ。そして、後輩たちは十六年振り二回目の甲子園を決めたのだ！　な、な、

なにを隠そう、これでも野球部ＯＢなのだ。かつて甲子園を夢見た高校球児だったのだ。その夜のビールのおいしかったこと！

八月九日。夏の甲子園が始まった。その日、第五章があがった。やっと折り返し点だ。だが、アメリカに発つまであと十四日。締め切りの二十日まであと十一日。十一日間で上巻の直しと下巻をあげなければならないのだ。それでも、まだわたしはアメリカに行くつもりでいた。マイナーリーグは、毎年六月中旬から八月三十一日までしか行われていないのだ。この機会を逃すと、来年まで待たなくてはならないからだ。そのかわり甲子園に応援に行くのを諦めた。

八月十一日。ＴＶで母校を応援した。だが、完敗だった。

八月十四日。やっと第六章まであがったが、あと六日で七、八、九、十章をあげなければならなくなった。今までのペースでは絶対に不可能なのだ。締め切りを二十四日までのばしてもらい、アメリカへの出発を二十七日に変更した。最後の悪あがきに近かった。わたしは、眠気ざましのエスタロンモカ片手に猛然とワープロにむかった。だが、なかなか進まなかった。気ばかりが焦った。ちきしょーっ。食生活は、コンビニのオニギリとコーンフレークばかり。惨めっ。

締め切りの二十四日、結局第八章までしかあがらなかった。甲子園の熱い戦いもすでに終わっていた。ここまでだった。ギブアップだ。わたしはアメリカ行きを完全に断念したのだ！　チケットもなにもかもキャンセルした。体から力が抜けてしまった。自己嫌悪に陥った。自分の無力を呪った。どっと今までの疲労が襲ってきた。ああ、念願のマイナーリーグ取材だったのに——。

くそっ。気を取り直すまでに、時間がかかった。
第十章があがったのは、なんと九月四日だった。わたしは、そう、あこあしたのジョーのラストシーンのように、完全に燃え尽きたままワープロの前に座っていた。やった――！　心のなかでそう叫びながら。これなら読者のみなさんに満足してもらえる。そう確信しながら。
こうして、今年の長くて熱いわたしの夏は終わった。そして、またひとつ年を取っていた。
ところで、突然ここで問題をひとつ。ローレシアの城門に刻まれた「訪れる者にやすらぎを――。立ち去る者に幸せを――」という碑銘は、実際に西ドイツのある町の城門に刻まれています。さて、その町はなんという町でしょうか？　観光客、とりわけ女性客に人気のある美しい城壁の町です。興味のある方は調べてみてください。
最後になりましたが、小説ドラクエIを読んで励ましの便りをくれた読者のみなさん、ありがとうございました。改めてここでお礼申しあげます。
多忙のなか、素晴らしいイラストを書いてくれたいのまたむつみさん、今回もまた色々お世話になったドラクエ博士の横倉廣さん、原稿が遅れ最後まで迷惑をかけましたがにこやかに対応してくれたエニックスの保坂嘉弘さん、ありがとうございました。

一九八九年九月初旬　　高屋敷英夫

小説　ドラゴンクエストII
悪霊の神々 下

一九八九年十月二十五日　初版
著　者　高屋敷英夫
設定協力　横倉　廣
編集人　千田幸信

発行者　福島康博
発行所　株式会社エニックス
東京都新宿区西新宿7-5-25　西新宿木村屋ビル5F　〒160
印刷所　大日本印刷
乱丁・落丁本はお取り替え致します。
原作　ゲーム・ドラゴンクエストII悪霊の神々
シナリオ・堀井雄二